博士論文　平成 25 年度（2013 年度）

中国・遼東半島の地域社会の変容と観光文化の創出

―旅順周辺の事例を中心に―

慶應義塾大学大学院社会学研究科
王　慧琴

目次

序章　問題意識と研究視点
第１節　研究課題と研究方法　・・・・・・・・・・・・・・・3
第２節　先行研究　・・・・・・・・・・・・・・・6
第３節　本論文の構成と概観　・・・・・・・・・・・・・・・9

第Ⅰ部　地域社会の変容
第１章　調査地の概観―旅順周辺を中心に　・・・・・・・・・・・13
第１節　地理的概況　・・・・・・・・・・・・・・・14
第２節　歴史的概況　・・・・・・・・・・・・・・・17

第２章　解放後の地域生業の変化―社会主義の変容　・・・・・・20
第１節　解放初期の漁撈活動　・・・・・・・・・・・・・・・20
第２節　人民公社時代の捕撈活動　・・・・・・・・・・・・・23
第３節　経済改革開放後の漁撈活動　・・・・・・・・・・・・26
第４節　漁村の生業変容の事例　・・・・・・・・・・・・・・・30
結び　・・・・・・・・・・・・・・・40

第３章　改革開放後の地域社会の変容―家族を中心に　・・・・41
第１節　家族の変容　・・・・・・・・・・・・・・・41
第２節　民俗儀礼の変容　・・・・・・・・・・・・・・・49
第３節　婚姻の変容　・・・・・・・・・・・・・・・52
結び　・・・・・・・・・・・・・・・63

第Ⅱ部　観光推進における外部からのインパクト
第４章　観光推進の拡大と歴史文化の再認識―旅順・大連との
連関　・・・・・・・・・・・・・・・65
第１節　植民地遺構への再認識　・・・・・・・・・・・・・・・66
第２節　政治主導期の集合的「記憶」　・・・・・・・・・・・・68
第３節　「観光資源」としての植民地遺構　・・・・・・・・・・71
結び　・・・・・・・・・・・・・・・81

第５章　郷村観光と文化の創出―外部社会との交流　・・・・・84
第１節　郷村観光推進の背景　・・・・・・・・・・・・・・・84
第２節　郷村観光の概念と種類　・・・・・・・・・・・・・・・89

第３節　郷村観光の特徴　・・・・・・・・・・・・・93
第４節　旅順周辺の郷村観光と文化の創出　・・・・・・・・・97
結び　・・・・・・・・・・・・・101

第Ⅲ部　地域社会で創出された観光文化
第６章　地域エコ・ツーリズム風情の創出　・・・・・・・・・105
第１節　エコ・ツーリズム推進の背景　・・・・・・・・・・・105
第２節　エコ・ツーリズムの事例―桜と自然保護区・・・・・108
第３節　エコ・ツーリズムの事例―温泉と郷村　・・・・117
結び　・・・・・・・・・・・124

第７章　民間信仰の復興と観光化―媽祖と龍王と観音・・・・・126
第１節　宗教文化と「観光」　・・・・・・・・・・・127
第２節　「伝統文化」観光推進の背景　・・・・・・・・・・・128
第３節　媽祖信仰の復興　・・・・・・・・・・・131
第４節　龍王信仰の復興　・・・・・・・・・・・136
第５節　観音信仰の復興と横山寺　・・・・・・・・・・・141
結び　・・・　・・・・・・・・143

第８章　観光振興による養殖業の発展―グローバル化への道　・145
第１節　観光地の「特産品」　・・・・・・・・・・・145
第２節　ナマコ「特産品」のブランド化にむけて　・・・・・147
第３節　ナマコ養殖業の拡大　・・・・・・・・・・・156
結び　・・・・・・・・・・・164

第９章　地域開発と観光文化の創出―民間と行政のはざまで　166
第１節　観光開発における民間と行政との関わり・・・・・・166
第２節　観光推進による文化の変容と構築・・・・・・・・・168

序章　問題意識と研究視点

第 1 節　研究課題と研究方法

1．問題の提起と研究の意義

本論文は中国遼東半島における漁村の「地域社会」の変化の過程の考察を目的とする。筆者が漁村の「地域社会」に着目するのは中国の漁村が農村の一部でありながらも、その地に根付いている文化や風習などは農村社会と異なる特質を持っていると考えるからである。漁村社会の「独自性」は自然環境に影響されるが、その土地に育まれた「地域文化」が地域のイメージ創りに大きな役割を果たしている。「地域文化」は、伝統的に所与のものとして存在するのではない。地域の人々が発見、創造し、育て上げたものが「地域文化」である[橋本 2011：155]と指摘されるように、「地域文化」は人々の発見と創造によって徐々に育まれるのであり、地域の「魅力」を演出すると同時に、地域の「独自性」の醸成に貢献すると期待されている。近年、中国で村おこしや町おこし運動が盛んになる中で、「地域文化」を掘り起こす風潮が高まっている。本論文では中国沿海部の都市で最後に開放された旅順周辺の事例を取り上げて、新中国建国後に、「地域社会」の変化や地域経済の活性化をもたらした観光産業の推進に焦点をあてて、生業や社会伝承、及び伝統文化などの変容の考察を通して、中国北方地域、特に今まであまり注目されてこなかった北方漁村の「地域社会」の変容の全貌を浮き彫りにし、遼東半島における漁村地域の「独自性」創出の過程を考察したい。

本論文で考察の舞台として旅順の周辺地域を選んだ理由は以下の三点である。

① 遼東半島南端にある旅順は 19 世紀から 20 世紀にかけて、かつてロシア、日本、中国が「近代」的勢力を張り合って、激しく拮抗しあう「震源地」として歴史的に有名である。特に日清戦争（1894～1895）と日露戦争(1904～1905)の戦場として世界中にその名を馳せた。また、その後に傀儡国家たる「満洲国」の建国により、旅順は約 40 年近く植民地の歴史が続いていた。旅順をめぐる人々の記憶の中には戦争と植民地の歴史が深く刻まれている。かつて戦場と植民地であった旅順は現在どのように変わっているのかはあまり知られていないし、旅順周辺の地域に関する研究報告も全く見当たらない状況である。従って、本研究は旅順周辺の地域に焦点を当てて、新中国建国後の経済の改革開放後に起こっ

た、旅順およびその周辺地域における社会変動の動態を考察して新たな研究成果が得られると考えている。

② 旅順は三面が海に囲まれ、一面は内陸に接続し、昔から漁撈活動が盛んな地域である。日本植民地時代に旅順近くの漁業について、次のような記録がある。『大連要覧』には「関東州[遼東半島の南部]は三面海に面し黄海及渤海の二大漁場を有するを以て古来住民の斯業に従事するものが多く當管内に於ては小平島老虎灘等有名なる漁村たり。」[大連民政署 1928：290]とある。この記録から旅順周辺に漁撈を生業とする村が戦前から数多くあったことが読取れる。漁村社会に特有な民俗風習は社会主義政権になった現在でも残されている。例えば、毎年旧暦の 6 月 13 日に龍王の祭りが、旧暦の 1 月 13 日に媽祖の祭りが行われる。また、旅順の周辺はナマコの産地として有名で、漁撈活動の一部に組み込まれ、ナマコは地域文化を象徴する食べ物である。漁撈にまつわる伝統文化は、旅順周辺地域のイメージ造りに有用だとして、地域の「個性」の創出にも重要な役割を担っている。しかし、今まで中国の漁撈や漁村に関する研究は殆ど南方地域に限られ、北方地域の漁村社会に関する研究は皆無な状況である。本研究は旅順周辺の漁村の生業や民間信仰など広義の伝統文化を詳細に考察することで、北方地域の漁村社会に関する研究の空白を埋めることを意図している。以上のような観点から、旅順周辺の漁村社会の実態を把握し、文化人類学の視点から社会的な変遷を考察する試みは意義があると考える。

③ 地域社会に社会変動をもたらす要素は様々であり、国の政策や制度の影響があり、生業変化の影響もある。改革開放後、旅順周辺地域の生業の変化は急速に進んだ。近年には、観光などサービス業が著しい発展を遂げた。そうした中で、旅順の観光産業はいかに推進されてきたか、特に観光推進の中で戦跡や遺跡などを巡るダーク・ツーリズムはいかに展開されているのかに注目したい。1978 年以降、中国の改革開放は計画的に実施され、1980 年に深圳や珠海、汕頭、アモイなどの開放が始まり、1984 年には大連、天津、上海など 14 の沿海都市が開放された。旅順はその約 30 年後の 2009 年 11 月にようやく開放を迎えた。実は 1996 年に旅順の一部はすでに対外開放が実施され、観光推進もある程度の成果を収めていた。しかし、2009 年の全面開放以後は、今まで禁止されていた地区にも入れるようになり、観光産業の更なる発展に

寄与することになった。旅順の観光資源の中では、戦跡や遺跡が特徴的である。新中国建国後、かつての戦争に関わる戦跡と遺跡は計画的に整備や修復の作業が進められて、「烈士陵園」や「万人坑」および「博物館」のかたちで、戦争や植民地時代の出来事を記念し、顕彰する施設に整えられた。これらの特定のコメモレイションは、特定の社会集団が自らの集合性を確認しより強固なものとしていくために歴史上のある出来事を記念し記憶していく活動として、地域的アイデンティティの表象にもなっていると考えられる[坂部 2008：139]。一方、観光事業を推進する場合、戦跡や遺構などのネガティブな観光資源に偏ると、本来の観光の持つ魅力が半減し、楽しい体験が得られなくなる可能性がある。本研究は以上のようなネガティブな集合的コメモレイションを観光資源としていかに利用するべきであるかを検討して、地域社会との関連性を考察すると同時に、コメモレイションが果たす観光推進の中での位置づけを明らかにして、旅順における観光文化の創出の可能性を探りたいと考える。

2.　研究の対象と方法

本論文の研究対象を旅順周辺の地域社会に設定する。筆者は主に旅順周辺の漁村を視野に入れ、長期的な調査を行ってきた。考察の対象は具体的には、漁村の生業、家族の変遷、地域の民俗風習、民間信仰など広範囲に亘っている。広範囲に調査を行うことで様々な資料が得られ、相互の事象間の関連性を探り、より普遍的な知見を求めることが出来ると考える。また、地域社会は閉鎖的な「空間」ではなく、常に周辺地域と連動して変化している。特に 90 年代から中国では観光推進のために、毎年観光プロモーションが行われている。観光客を呼び込むために、観光客が移動しやすく連続性のある観光ルートを創出する工夫を凝らすことが要請され、大連、旅順、およびその周辺地域は連携して、観光商品の開発を推進することになった。以上のような状況を考慮して、本研究は地域社会の動態を考察するために、遼東半島の漁村だけでなく、旅順、大連などの都市も考察の対象に組み込むこととなった。以上のような観点から地域全体の変容過程を解明することを本研究の目的とする。

研究方法の第 1 はフィールドワークを通して、資料を入手することである。最初は一つの村に関して集約的な調査を行っていたが、漁村に共通する特徴を見出すために、複数の漁村を調査することに

なった。フィールドで入手した素材は本研究の第一資料として活用し、その上で文献資料と照合して考察した。また遼東半島の様々な情報を伝える地域新聞や各地に伝わる伝説も補助的資料として積極的に収集した。本研究の中では聞き取り調査だけではなく、地域新聞を批判的に利用することで事実の信憑性を高めようと試みた。

第２は社会学や人類学の成果を踏まえて考察を行うことである。先ず、旅順周辺地域の生業変化に着目し、その中に含まれる漁業と観光業を切り口にし、問題点を整理する。漁業と観光業の変化に伴い、様々な社会的文化的な変容が生成する過程に注目し文化人類学や社会学の知見を活用して体系化する。漁業に関しては生業形態を考察し、人民公社時代の資源管理型漁業から経済改革開放後の高い漁業収益を目指す漁撈形態への変化の過程を概観し、各時期の特徴をまとめる。次に、漁撈活動が変化して、地域のコミュニティや家族及び婚姻などの変容が起こる状況を考察した（第２章、第３章）。合わせて漁村社会の今後の発展動向を読取る試みをする。機能主義による漁村の人間関係や社会の動態の考察である

第３は文化の資源化や開発に関わる観光人類学の成果を取り込み、観光の中でもダーク・ツーリズム（dark tourism）の観点からの考察を行う。災害被災跡地や戦争跡地などの人類の死や悲しみを対象にした観光をどのように組み込むかという主題である。観光産業に関しては、観光政策を考察し、実践との接点を探る。山下は観光文化学には、政治経済的側面から観光を扱うものと社会文化的な側面から観光を扱うもの、および人はなぜ旅行し、旅行の経験は何を齎すのかという旅行者や旅行の意味に関する研究[山下 2007：4]といった三つの方向性を考えている。本研究では観光の政治経済的側面と観光の社会・文化的な側面の二つの観点から旅順周辺地域の観光推進の実態を考察する。政治経済的側面を扱う場合は、観光が誰によって、いかに仕掛けられ、演出され、消費されるかを明らかにすることが重要である[山下 2007：4]。また、観光が如何に生み出され、国家主導の観光産業は如何に推進されたか、実践的な事例を通して観光を作り出す仕組みを究明する(第４章と第５章)。さらに、観光を通じて、結果的に何が創出・生成されるのかを議論し、観光が作り出す文化を掘り起こす試みを行う(第６章､第７章､第８章)。

第２節　先行研究

１　漁村社会

漢民族の社会では生活習慣や民俗風習は全て農耕行事と深い関わりがあり、この研究については農業や農村経済に関する研究蓄積がある。農村での現地調査で社会構造を明らかにしたり、日常生活の変容に関する研究を行うなどの業績が数多くある。他方、中国では漁村は農村社会の一部であるという認識が一般的で、漁村社会は研究対象としては十分に重視されて来なかった。しかし、漁村社会は農村社会と生産方式が異なっているだけではなく、民俗風習や宗教生活の様々な面において、漁村の独特な特徴を持っているので、漁村社会の研究は漢人社会に新たな見方を齎すだけでなく、漢人社会の研究にも新しい観点を与える[王崧興 1967：2]。従って、漁村社会に関する研究の重要性を新たに認識しなければならない。

漁村社会の研究に関しては、豊富な事例を取り上げて考察作業を行った先行研究として、漢人漁村社会の実地調査を行った王崧興の報告がある。王崧興は台湾の宜蘭県頭城の沖に位置する亀山島の調査に基づき、漁撈活動や経済状況及び宗教生活などに関して詳しい考察を加えた。本報告で問われた課題が二つある。第一は亀山島の宗教活動の基本組織と漁撈の組織とが如何なる関係にあるかという問題である。第二は漁撈技術の個人主義の指標と宗教生活の集団精神の指標がいかに統合されたのかという問題である。王崧興は漁村の漁撈技術、社会生活、宗教生活の三つの分野に焦点をあてて、現地で得られた資料を考察して、課題解決の過程を提示しており、筆者の問題設定や論文構成でも参考の価値が高い研究だと考えている。ただし、亀山島の研究は 1960 年代の中国本土からは離れた台湾の漁村社会の事例であり、筆者の研究範囲や調査時期とはかなりかけ離れている。また、社会体制や歴史も異なる。中国の大陸部では改革開放後、地域の経済を活性化するために、漁撈だけでなく様々な産業が同時に展開する事例がよく見られ、状況は急速に変化した。漁村の調査においても、漁撈活動だけに集中し過ぎると、地域の全貌を捉えることは難しく、考察にも限界がある。

王崧興は現地調査をもとにして漁村社会の実態を解明する研究方法をとったが、現在の中国大陸の漁村では直面する問題をいかに解決するかを考察する研究がある。大陸の場合は、1990 年代に「三農問題」（農業の低生産性、農村の荒廃、農民の貧困が経済社会の持続的発展を脅かす不安定要因となる社会問題）が指摘され、2000 年代半ば頃から、漁村に展開した「三漁問題」として研究も盛んになった。于立、孫康、徐斌は「“三漁問題”与公共政策調査思路」で「三

漁問題」の概念について説明し、「三漁問題」の社会的背景への考察を試みた[于立、孫康、徐斌 2007]。また、林光紀は「三漁問題」の深刻化による漁村の新しい階級の形成について考察し、現在の漁村や漁業が抱える問題点を指摘した[林光紀 2010]。しかし、「三漁問題」の解決は今後の課題である。

２　観光推進

中国の観光は経済の改革開放前とその後とは規模、種類だけではなく、性質も大きく変わっている。改革開放前の観光は「政治」を第一の理念とし、観光はレジャーというよりは愛国教育の手段としてよく利用されてきたのに対し、改革開放後の観光は経済の活性化の牽引力となることが意図されていた。観光の振興に伴い、観光に関する研究は中国本土のみならず、日本でも数多くの研究が蓄積されてきた。例えば、高山陽子は『民族の幻影－中国民族観光の行方－』[高山 2007]の中で観光の「真正性」を議論し、民族文化と「真正性」の関係を論じた上で、民族文化が愛国主義教育に果たした役割や商品化された経済的な役割に関して考察した。また、韓敏は毛沢東の生家「韶山」の事例を通して、伝統文化や革命の伝統はいかに観光商品として位置づけられるのかに関して検討した。「中国観光のフロンティア―創出される“地域文化”」の中で韓は「伝統的文化と革命の伝統の利用は、観光開発における地域性の強調のための戦略となる」と述べる一方、「現代化や改革開放によって、人々は伝統文化や革命の伝統の喪失がもたらされ、アイデンティティを失ってしまう。……自分たちの地域、自分たちの歴史のルーツを求める人々に、アイデンティティの再構築のきっかけを与えている。」と指摘した[韓敏 1996]。観光振興は地域性を「売り出す」と同時に地域住民の「自己」への再認識の機会でもある。しかし、これらの研究はいずれも「正」の観光に関する研究で、「負」の観光、いわゆるダークツーリズムに関する先行研究はあまり見当たらない。

観光に関しての先行研究は中国本土でも数多い[宗暁蓮 2009]。特に 1992 年以降、毎年行われている観光プロモーションの影響を受けて、観光振興が急速に進められ、都会と農村の格差を縮めるために推進された「郷村観光」の成長に伴い、報告や考察が雨後の筍の子のように登場した。しかし、その殆どは「郷村観光」政策の考察や概念の解説、分類の試みなどの考察や報告である。実践的な事例を通しての考察は少なく、「郷村観光」を推進する農山漁村と周辺地域

との連携開発の可能性を探る研究も見当たらない。確かに「郷村観光」の推進は最近 10 年前からであり、研究対象としての限界がある。ただし、観光政策の研究や問題点の指摘はある程度は可能である。

第 3 節　本論文の構成と概観

本論文は主に漁村社会の変容を通して、観光文化がいかに創出されてきたのかを考察する。観光文化を作り出すためには、当然地域社会の積極的な取り組みが必要であるが、それ以外に行政の効果的な政策や周辺の地縁関係の影響も大きいと考えている。旅順周辺の漁村地域における観光推進の実態を解明するために、本論は序論、第一部地域社会の変容、第二部外部からの働きかけ、第三部観光文化の創出から構成される。

第 1 章では旅順周辺の概況について考察し、旅順の歴史と自然環境について概観する。

第 2 章では旅順周辺における漁村の生業や家庭生活への観察を通して、漁村の生業や食生活及び住生活などの変化過程を論じた。特に労働形態の変化に伴う人々の労働意識の変化に注目したい。人民公社時代は村の人々が全員人民公社の集団労働であったが、改革開放後、家族単位の漁撈が主流になってきた。収入が前より増えた一方、村の人々の交流が少なくなり、お互いに疎遠感が芽生え、地域のコミュニティには様々な問題が発生している。

第 3 章では改革開放後の漁村地域での家族の変容を考察した。まず漁村社会の日常生活への観察を通して、地域社会の生活環境の変化を捉えた。漁村地域の女性の社会的な地位がいかに変わってきたかを究明すると同時に、従来の婚姻に関する価値観の変化も明らかにした。特に人民公社時代と改革開放後の結婚相手の選定基準を比較し、社会的な背景の特徴を読取ることができるのではないかと考えた。漁村社会の事例を中心に、各時代の結婚式の考察を通して、時代の社会変化の足取りを垣間見た。婚姻の変化は常に経済の発展状況に連動しているので、変化の要因を究明する作業を行った。本研究では主に婚姻変化に焦点を置いたが、今後、婚姻変化による家族の変容にも留意しなければならないと考えている。さらに漁撈活動が盛んになるのに伴って、民間信仰や神様への祭祀や儀礼が益々重視されるようになってきた。祭祀や儀礼などの行事を通じて、地域のコミュニティの再構築に有力な手段になる可能性を論じた。

第 4 章では旅順・大連の数多くの植民地遺構が負の文化遺産とし

て定着し、「正」の観光資源とは異なる特徴を持っていることを考察した。本研究ではポストコロニアルの概念について説明した上で、その理解にあたっては歴史の「連続性」に注目する必要があると考えて考察を進めた。また植民地遺構と観光の「相互作用」の関係を明確にした後[安村他編 2006：64]、植民地遺構のうち悲惨な記憶を呼び起こす戦跡をダーク・ツーリズムの重要な観光対象として取り入れる可能性を提示することが可能になった。更に中国の政治主導期に植民地遺構を「烈士墓」、「万人坑」、「博物館」などの集合「記憶」に収めて、愛国主義教育の教材となる役割を果たしていたことを検討した。最後に旅順・大連の植民地遺構の特徴に着目し、地域社会によって果たす意義が異なることを指摘したいと考えている。

第 5 章では経済の改革開放を実施して以後の状況について論じた。特に 1992 年から中国政府は観光を大がかりに推進するために、毎年特定なテーマを定めて、大規模な観光プロモーションを行うことになった。これを契機に経済発展の恩恵を受けるのが遅かった旅順周辺の漁村地域に新しい観光形態の「郷村観光」(中国語では郷村旅遊)が導入された。「郷村」とは、田舎や村里の総称でことを指す。中国では「三農問題」の解決手段に止まらず、地域社会の自然環境や暮らしぶりなどを維持する手段と考えられている。

本研究では「郷村観光」の概念や特徴を考察し、「郷村観光」が外部社会にどのように影響されたのか、その社会的な背景も検討した。近年になって郷村観光に対して地域社会が熱い視線を注がれるようになった理由は、農村産業構造の調整期に伴う供給側の需要と都市化の急成長による市場側の需要があるからだと考えている。郷村観光を通して、漁村地域は外部社会との連携が強まり、地域の歴史や風土に培われた特色ある伝統的な文化を継承・発展させる土台が再構築されてきたと考えられる。

第 6 章では農山漁村ツーリズムの構築にあたって、観光商品が如何にして生まれ、地域住民が観光商品の開発にどのように関わってきたのかについて、「在地の側」からの実践的な事例による研究を提示した。従来の研究では、こうした観点はあまり見当たらないという事情を踏まえて、観光がいかに生み出されるのか、観光が何を作り出したのかを検討した。本研究は先行研究の不備を補うと共に、漁村のツーリズムに焦点をあて、地域住民が観光資源に関してどのような意識変化を起こすのかを考察し、漁村地域の観光振興の実態を考察する試みを行った。さらに 2009 年以後、旅順とその周辺地域

の観光振興は大きく性格を変え、古戦場見学などに偏っていた従来の集客姿勢を大きく改善することへの期待が寄せられている。観光が漁村社会にもたらした社会的、経済的効果は見逃してはならないが、旅順周辺地域の観光推進は旅順のダーク・ツーリズムを補完する役割を演じる対応として注目されつつある。

第 7 章では漁村地域で漁民にとって最も重要視されている漁撈信仰や民間信仰など独自の文化や伝統の変容に関して考察する。宗教文化と観光の接点は､宗教ツーリズムと呼ばれるようになってきた。現在では観光資源にすることを目的として民間信仰の復興を企てることも多い。注目されるのはスミスのモデルである[Smith 1992:4]。このモデルでは「聖」の宗教と「俗」のツーリズムの二つは対立する領域が現れ､「聖」と「俗」は一見矛盾しているように見える。しかし、実際には信仰と娯楽の両方の目的を持つツーリストが多数いるという観点から宗教とツーリズムの共通点を掘り起こす必要であると主張する。そこで注目されるのは「真正性」authenticity である。宗教文化が持つ「真正性」はツーリストが求める「真正性」と合致しているからである。本研究では、旅順周辺地域の漁民の日常生活に深く根付いた「媽祖」と「龍王」の信仰、民間信仰の中で最も影響力のある観音信仰を取り上げ、改革開放後、民間信仰がいかに復興され、表象されるかを検討する同時に、観光資源として持続的に利用する可能性を論じた。民間信仰や伝統文化は観光化の創出に関しても重要な意味をもつと考えている。

第 8 章では観光のもう一つの視点から「土産品」について考察した。特に地域の「特産品」を「土産品」に演出する過程を検討した。旅順周辺の特産品ナマコを事例として、遼東半島のナマコ食文化の歴史を踏まえて、現代のナマコ食文化の多様性、ブランド化されたナマコの位置づけなどを考察した。また、昔から培われたナマコ食文化を考察して、現代のナマコ食文化の特徴を解明した。現在ナマコは大連・旅順地域のブランド（銘柄）として確固たる地位を確立し、大連地域の文化指標となっていることが明らかである。ブランド化されたナマコは、主にもてなし、贈答品、儀礼の食べ物、観光客への特産品などに多様性に富むので、今後はナマコ食文化は観光振興の中に重要な役割を果たすことが期待される。

本論文では主に地元政府や地元民といったホスト側の視点からの考察を行っている。しかし、観光によってもたらされる効果を評価する場合にはゲスト側からのまなざしが何よりも重要である。観光

を消費するのはツーリストであるが、ツーリストの視線を通して地域の観光資源や観光施設及びソフトサービス面に様々な変化を引き起こす可能性がある。ツーリストの体験に関しては、E・コーエンが五つに分類して、気晴らし体験や、心身疲労の癒し体験、及び自分の価値観を変える体験など「正」の影響がある体験を強調した[Cohen 1979]。しかし、「正」の観光資源と「負」の観光資源を併せ持つ旅順の観光はツーリストに与える影響はもっと複雑だと考えている。従って、旅順の観光に関しては、ツーリストの多様な反応を詳細に調査して検討しなければならない。

第Ⅰ部　地域社会の変容

第１章　調査地の概観―旅順周辺を中心に

はじめに

遼東半島は山東半島の向かい側、中国東北地方の南部に位置し、中国では第二に大きい半島として知られている。半島の付け根の渤海湾側に営口があり、その最南端に旅順がある。現在、旅順口区の面積は 506 平方キロ、人口は 21 万人である(図 1)。本節では旅順の周辺地域の概況を論じたい。

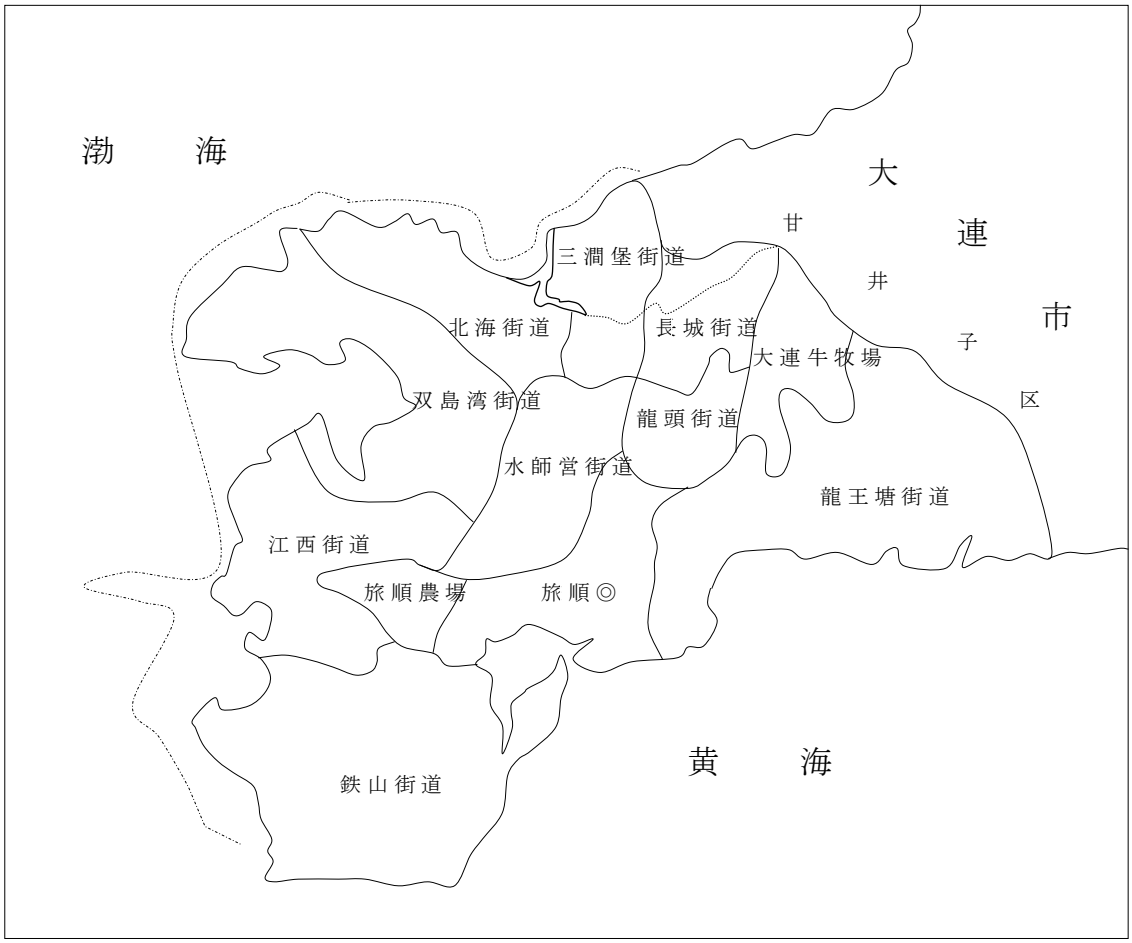


図 1　旅順地域分布図

第１節　地理的概況

遼東半島の最南端に位置する旅順は西は渤海、東は黄海に囲まれ、天然の良港として有名である。東北は 45 キロ離れた大連市内に繋がっており、現在南路、中路、北路の三つの道路が開設されている。旅順は長白山脈の千山余脈に位置するため、平地が少なく、山地や山岳が多い。陸地面積 506.8 平方 km、海岸線の長さは 169.7km であり、沿海部の村では昔から漁業が盛んである。また、耕地面積は 9732.5 ヘクタールで総面積の 19.4％を占め、林地は 1.32 ヘクタールで、総面積の 26.4％を占めている。旅順は遼東丘陵の南端に位置し、東北から西南に伸びるにつれて、徐々に低くなっている。旅順地区には平原が割合に少なく、丘陵が起伏し、海抜はおよそ 50 メートルぐらいである。地質は主に古い花崗岩や混合岩が中心であり、非金属鉱が最も豊富である。その中でも石灰石の埋蔵量が多く、有名な産地として知られている。

旅順の気候は温帯海洋性気候であり、冬は厳寒期がなく、夏は残暑がなく、四季がはっきりと分かれ、晴天が多く、日照時間が長く、農作物の成長に比較的有利であるので、麦、大豆、玉蜀黍、さつまいも、落花生などを中心とした農作物が収穫され、主に大連市内の住民に供給されている。旅順地区には山地や山岳が多いため、農産物以外に果物の栽培も盛んに行われている。日本植民地時代には、移民の増加に伴い果物の栽培が拡大し始めた。中でも林檎が最も有名であり、その他に葡萄や梨、桃、サクランボ、苺なども大量生産されている。近年、果物の産地としての魅力をアピールするために、毎年サクランボ狩りや苺狩りのイベントが開催され、大勢の観光客を集めようとする動きが出始めている。

海洋資源は旅順の大きな強みである。旅順の周辺は海岸線が長いがゆえに、港湾や漁村が多く形成されている。黄海湾には旅順港、龍王塘漁港、塔河湾漁港があり、渤海湾には旅順新港、羊頭洼漁港、董砣子漁港、艾子口漁港、大潮口漁港などがある。このような数多くの漁港は周辺地域の生活基盤となり、沿海部の漁村では昔から漁業が盛んで、魚やナマコ、アワビ、貝類、エビ、海藻類などの豊富な資源に恵まれている(図 2)。特に魚の種類は多く、よく水揚げされるものとしては太刀魚、ヒラメ、キグチ、マダイ、鯖などがあげられる。昔から来訪者に「海鮮料理を食べなければ、大連に来たことにはならない」という表現が多用され、海鮮品はこの地域の目玉商品と見なされている。旅順は大連の一つの区で、この表現は旅順にも適合

する。また、広大な干潟と浅海水域では、エビ、ナマコ、アワビ及び真珠など珍品の養殖が大規模に行われ、地域の経済を支えている。さらに、沿海には塩田も多く点在しており、全国の重点塩区の一つといわれ、全国でも屈指の生産量を誇っている。

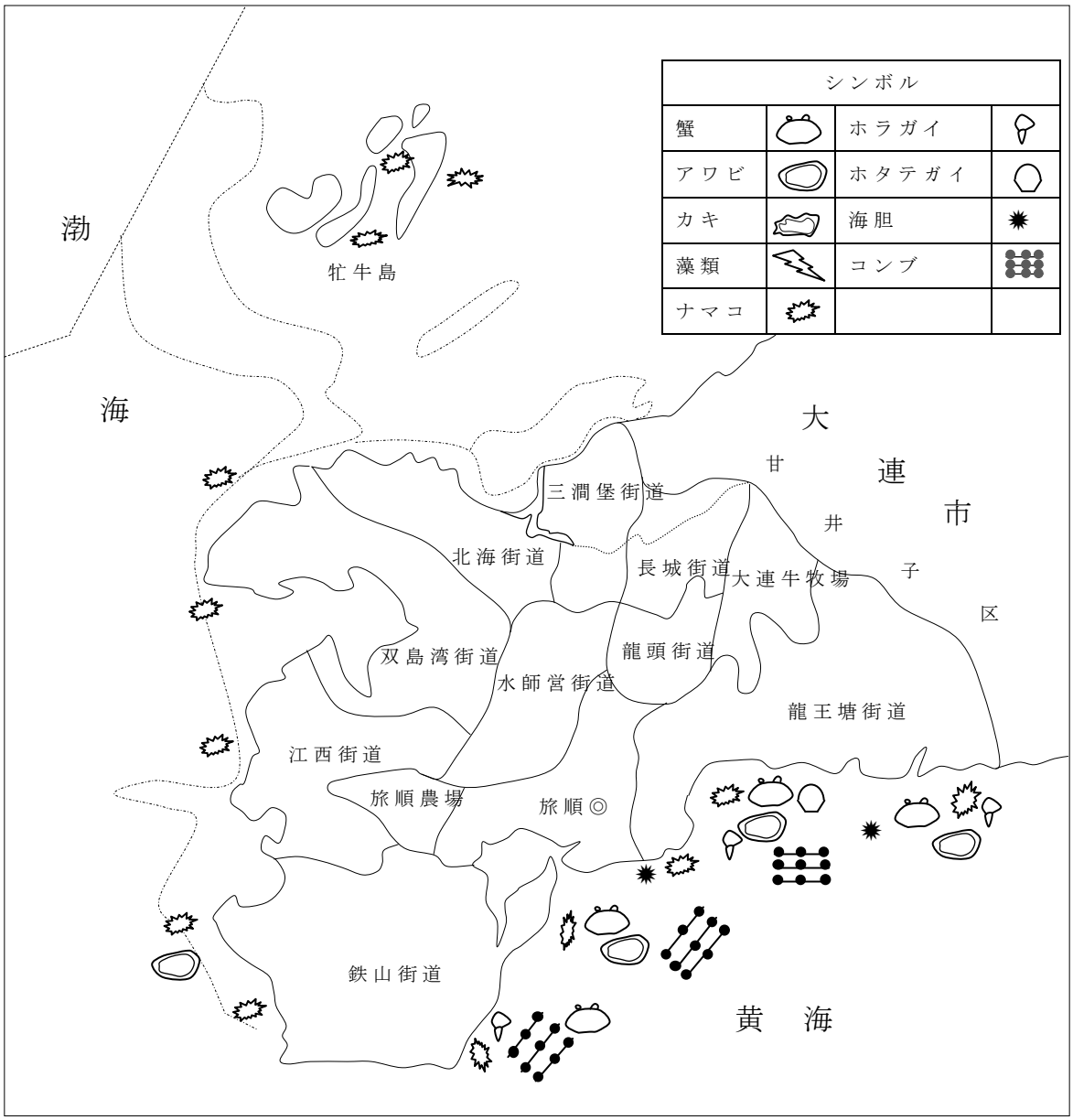


図 2　旅順地域水産資源分布図

旅順の周辺は、海岸線に囲まれ天然の良港に恵まれている一方、区域内にはまた無数の 山や島、河川が控えている。こうした自然条件によって数多くの絶景スポットが形成され、地域の貴重な観光資源として活用されている。老鉄山旅順地域の最も高い山で、標高

465.6 メートルである。1980 年に国家級自然保護区に指定され、「黄海・渤海境界線」と共に有名な景勝地として知られている。また、旅順には大小様々な島嶼があり、13 個に及ぶ。最も大きな島は渤海湾に浮かぶ猪島で、面積は 1.12 ㎢、海岸線は 5 ㎞である。現在は海産品の養殖場として利用されている。旅順の西北の渤海海域には、面積が 1 ㎢に満たない蛇島という小島があり、草木が繁茂して、2 万匹に近い蝮が生息している。一つの島に多くの蝮がいるのは世界でも珍しく、世界の奇島―蝮の王国と呼ばれ、国家級自然保護区に指定されている[董志正編 1988]。

旅順周辺地域には漁撈に従事する村が 53 村あり、その中で漁撈を主要産業とする村は 14 村である。漁撈は沿海の漁村にとっての重要な産業とはいえ、農業が軽視されたことはなく、昔から土地への執着もあった。伝統中国の農村社会では、土地が最も重要な財産として認識され、金さえあれば何よりも優先して考えられたのは、土地の購入である[1]。1950 年代に実施された土地改革の時期に漁村では土地や船の所有状況に基づき、「成分」(階級区分)[2]が定められていた。つまり土地が重要な財産であることが昔から人々の記憶に刻まれてきた。旅順は山が六割、水沢が一割で、耕地は三割しかないので、土地が何よりも重視され、昔から土地は厳しく管理されていた。明代から土地の測量が始まり、土地の登記簿即ち「魚麟図冊」[3]が完成し後の土地管理にも大きな影響を与えた。清代には、満州族の貴族及び八旗に加入した漢人が所有する土地が、それぞれ「旗紅冊地」「民紅冊地」に登録され、清朝政府は所有権を認めていた。登録された土地は代々受け継がれ、貸出や売買も許されていた。しかし、登録されていなかった土地とその後に開拓された荒地は「余租地」と呼ばれ、開拓に携わった農民に「永佃権」[4]はあったが、所有権がなかったので売買は許されていなかった。

旅順解放後、1949 年に政府が地主の土地を没収し、貧困農民に分配する政策を実施し、1950 年には農民も平均一人当たりで 2.01 ムーの土地を所有するようになった。

---

[1]東北地方の農民の土地の重要性に関しては[聶莉莉 1992]が詳しい。
[2]1953 年に農民は財産によって階級区分、いわゆる「成分」に分けられ、戸籍にも記入されるようになった。
[3]南宋に始まり明代に広範囲に広がった。土地の番号、所有者氏名、面積や等級などを詳細に記載した。魚の鱗の形から名付けられた。
[4]土地を小作人に貸出し永久に使用権が持てる形式にした。

第 2 節　歴史的概況

「一個旅順口,半部中國近代史」（旅順という一つの土地が、中国近代史の半分を語る）と言われるように、旅順の近代史への影響は極めて大きい。1894 年の日清戦争と 1904 年の日露戦争の主戦場として、旅順の名は近代の歴史に永遠に刻まれている。旅順の歴史上の大きな事件以外にも庶民の生活に関わる歴史には多種多様な出来事がある。

旅順の鉄山街道郭家村新石器時代の遺跡からは、老鉄山の山麓に紀元前 4～5 千年前の人類の活動跡が発見されている。戦国時代、旅順は燕国の遼東郡に属した。漢代に現在の旅順口は最初に「将軍山」と命名され、その後東晋時期には「馬石津」、隋唐の時には「都里海口」、遼金時代には「獅子口」、元代時期には「老鉄山海口」と称せられ、明代に「旅途平順」（道中平穏）の意味で旅順口と呼ばれるようになった[董志正編 1988]。明清時代に旅順口の行政組織は頻繁に変更されたが、旅順口の名前はその後もそのまま使われていた。1899 年に帝国ロシアは旅順に「関東州総督府」を設け、旅順を始めて市と称した。さらに日露戦争後の 1905 年に日本が「関東庁」を設けて、旅順口、大連、金州の全域の管理が行われた。旅順は王朝や政治政権が交代するたびに改名され、歴史的に不安定な状況が長く続いた。

旅順の人口構成は不安定な歴史と深い関係がある。戦争にさらされる時期になると人口が激減し、平安な時期になると人口が増加する状況の繰り返しであった。明朝末期に旅順は明軍と後金軍の争いの中心地であったため、旅順全域の地元民が戦争に巻き込まれ、多数の人々が命を落とした。島や山の洞窟に逃げて、戦争の被害から免れた人も一部いた。現在の旅順地域の陳姓、羅姓、方姓、金姓はその時に幸いに生き残った遺民であるといわれている。旅順の龍王塘の大陳家村と小陳家村の陳姓はその末裔として知られている。その後、清朝初期には政府が荒地開拓のために、順治元年（1644）以降は地方の官府に幾度も「開墾者を募集し、本籍を問わず荒地を開墾させ、永遠に所有させる」という命令を出した[聶莉莉 1992:17]。これを契機に山東省、河北省、河南省、山西省からの移民が増えた。中でも山東省からの移民が最も多く、朝鮮半島からの移民もいた。更に清朝初期から八旗貴族が遼東半島に移住するようになった。清朝政府による八旗編成という懐柔政策は、ヌルハチ時代に創設された軍事、行政、生産を一体化した集団で、各々の組織が黄、白、紅、藍、鑲黄、鑲白、鑲紅、鑲藍の八種の旗を持っていた[劉正愛　2006：

60]。旅順地域は「正白旗」に所属していた。八旗組織には漢人の加入も許され、構成員の旗人は荒地を自由に開拓することが可能であり、農具や農畜などが無償で提供され、収める税額の優遇が定められていた。旅順の地元民の陳姓一族は清朝初期に八旗に加入していたが、山東省などから移住した漢人も八旗に編成された。

八旗に編入された漢人及び八旗の貴族が土地の所有権の特権を持っていた。彼らは平原で馬を走らせ、蹄の跡で囲まれた範囲を自分の土地に帰属させる「跑馬占山」という方法で、比較的肥沃な土地を先に占拠していた[聶莉莉　1992]。彼らは「占山戸」とも呼ばれ、旅順地域では瀋姓、徐姓、張姓、韓姓、劉姓などが有名であった。その後、清朝政府は、定期的に山東省、河北省、河南省などから移民を受け入れた。移住者は殆どが八旗には未加入で、「占山戸」の土地を借り、山地での開拓を行ったので「刨山戸」と呼ばれた。

旅順は山東省からの移民が持ち込んだ内陸の文化と満洲族の文化を融合し、独特な風土を育ててきた。例えば、媽祖の祭日は福建省では 3 月 23 日であるが、旅順では旧暦正月十三日であり、山東半島から来た移民の影響と推測される。旅順の食文化や言葉への影響も強く、遼東半島と山東半島の生活習慣は非常に似ているといわれる。一方、満洲族と漢族は長年一緒に居住していたので、満洲の民族文化が漢族の文化に同化した事例も数多くあった。清朝中期以降から満洲族の姓を漢字姓に改名したことはその表れである（表 1)。

表 1　　漢字姓への改姓

元の姓	漢字姓
アイシン・ギョロ（愛新覚羅）	肇、金、羅、徳、洪、依、海
グアルギャ　　（瓜爾佳）	関、白、石、鮑、汪
マギャ　　（馬佳）	馬
イルゲン　　（伊爾根覚羅）	趙、冬
ウアンギャン　　（完顔）	王、汪
シュムル　　（叙穆禄）	徐、舒、米、宿、鄭、肖、万
ニングタ　　（寧古塔）	劉、寧

出典：[劉慶華 1982：17][劉正愛 2006：85]

姓名は常に人々のアイデンティティを表象する重要な要素として働く[劉正愛 2006：83]。満洲族の姓の漢字姓への変更は漢文化への

変容の証だと考えられる。満洲族の文化は漢文化に変容し、漢文化は積極的に満洲族の文化を取り入れる傾向もあった。例えば、薩其馬（食品名）、嗄肌窩（脇下）など満洲言葉が漢民族に今でも使用されており、満洲族の食文化も漢民族に受容されつつある。このように戦乱の歴史が長い旅順は外来文化の影響を受けながら変容し続けてきたのである。

第２章　解放後の地域生業の変化―社会主義の変容

はじめに

中国漁村は農村と同様に、常に国の政策に連動し変化している。1949 年の中国解放後､1950 年代初めに地主の土地所有制を解体して土地改革がなされ農業の集団化を進めた。1958 年に人民公社運動が始まり、農村の末端行政機関は生産隊、生産大隊、人民公社の三級所有制に再構成された。農村社会では協同化が進められ，互助組，初級農業生産合作社，高級農業生産合作社の段階を経て、1978 年の経済改革開放を迎えた。1978 年 12 月開催の中国共産党十一期三中全会で「過度の集中・過度の統一」という生産力の発展を妨げた旧経済管理体制の弊害を取り除き、経済の活性化が目的とすることが宣言された。これが改革開放の始まりで、1985 年春には全国の人民公社はほぼ全部解体された。経済計画に基づく生産活動が自由に行われるようになった。この時代の農業の生業変化に関する先行研究は夥しく残されているが､漁村の生業変化に関する研究は殆どない。従って、本章では旅順周辺の漁村の生業が解放初期からいかに変容したのかを考察し、各時代の漁撈の形態や特徴を明らかにしたい。また、漁村社会の生業変化に比重を置いて、体系的具体的に考察して中国社会主義の変容の一端を示す。本章では解放初期（解放前～1957 年)、人民公社時代（1958 年～1978 年)、経済改革開放後（1979 年以後）の三期に分けて漁業の変化過程を探ってゆく。

第１節　解放初期の漁撈活動

旅順の周辺は海岸線が長く、気候、水質は良好で、海水や淡水での漁業や養殖の発展には極めて好条件を備えた自然環境が揃っている[5]。旅順は漁撈の歴史が永く、清代には既に漁船や漁具、漁法を

[5]日本の植民地時代の記録では「渤海の魚族が豊富であると云ふ説の根拠は大體次の様である。それは渤海に多き穉魚からの推察であるが、渤海の穉魚は其の微生物によって生くるものであらう、そして其の微生物は次の理由によって多くあり得べきを想像し得る。即ち黄海及白河等の注入河川の運ぶ有機物質が多いこと、海深が浅いから太陽の光線は充分であること、同時に日光の齎す熱と淺きために感應容易なる外界の熱の為に適當の水温があること等、即ち光と熱とが充分であり得るから之等の微生物は存在し得べしとするのである。」［高橋 1925：10］とある。

改善し、延縄漁業、流網漁業、地曳網漁業、風網漁業、桁曳網漁業などが主要な漁法として使用され、大規模な漁撈活動が進められていた[井上 1930]。旅順の住民は水産業を重要な生業としていた。

日本の植民地時代には軍需鮮魚の供給を目的としてやってきた日本人が急速に増えて（表 2)、漁業の改良や漁法の改善が行われ、水揚げ高は年々に増加する傾向であったが[6]、その恩恵を受けるのは日本漁民と地元の裕福な漁家に限られ、大勢の漁民は相変わらず舢板など伝統的漁撈方法に頼り、漁獲能力は著しく抑制されていた。

表 2　漁業者戸数及び人員（1927 年）

	戸　　数			人　　員		
	専業	兼業	計	専業	兼業	計
日本人	60	5	65	93	9	103
中国人	908	628	1536	1763	1338	3101
合計	968	633	1601	1856	1347	3203

出典：『大連要覧』[大連民政署 1928]より筆者が作成

一方、日本の植民地時代には、過度の捕撈活動により、魚類資源が甚だしく枯渇し、年間漁獲量は激減する傾向が現れた。一例を挙げると渤海湾には真鯛が豊富に獲れるため、最初に延縄漁船が出漁したが、水揚げ高を更にあげようと漁民は機船底曳網漁に転換し、水揚げ量は最初の年間約 100 トンから 300 トン位に上昇した。しかし、1920 年代になると、真鯛の水揚げ量が減少し、漁獲高は年間僅か 10 トン余りに下がっていった。1930 年代は戦争の時代に突入して不安定な状況が続いたが、漁業はほぼ同様な状況が続いた。

1945 年に戦争が終了したが、当時の旅順では漁業資源が枯渇していた。国民党が東北地域への経済封鎖を行ったこともあり、2 キログラムの魚は 0.5 キログラムの玉蜀黍としか交換できないという極めて不合理な比価になった。漁民は食糧や漁具の不足などの厳しい

[6]当時の旅順を含む関東州の漁撈状況について、『大連要覧』の中に「昭和元年水産業者の集團たる關東州水産會を組織せしめ之に補助を與へて魚市場の經營、販路の擴張、水産に關する講習講話等專ら斯業の改良發達に努めしめたるを以て逐年その漁獲高を増し現在に於いては大連市場水揚げ高の如き年額二百萬を突破するの盛況にあり。」[大連民政署 1928]と記され、漁獲高が年々に増えてきた状況が明らかである。

状況に追い込まれ、漁獲量は著しく低下していた。このような実態を早期に改善するために、政府は「漁民互助組」(日本の漁業組合に相当)を設立した。1949 年までに 241 個の「漁民互助組」が作られ、漁民に貸付金を提供するなど様々な利便を講じる措置を取った。当時は 2738 人の漁民が互助組に所属し、入会率は 90%以上を超え、1499 世帯の漁民に 287 万元の貸付金を融資するなど、漁民の漁撈に従事する環境が少しずつ整い始めた[『旅順口区志』1999]。漁業産業の発展を促すため、1947 年には国民党政府が「公営旅順水産公司」を設立し、漁撈活動以外に、魚類の買取りや乾物の加工及び製塩などの産業も発展した。ただし、解放直後の 1950 年には旅順の全区域に 120 馬力の船は 6 隻しかなく無動力漁船は 1063 隻であった(表 3)。発動機船の馬力も低く 1950 年代に徐々に改善された。発動機付の漁船の総馬力は 1952 年と 1953 年は社会体制の過渡期であったためか大きく落ち込んだが、1954 年以降は上昇に転じた。しかし、1958 年以後の大躍進で再び落ち込むことになる。統計資料についてもどの程度まで正確かどうかは簡単には判断できない。

表 3　解放初期の労働力及び漁船状況（1949 年～1957 年）

年	労働力(人)	漁　船　数			
		合計	発動機付		無動力漁船(隻)
			船(隻)	総馬力	
1949	2738	1127	5	100	1122
1950	2232	1069	6	120	1063
1951	1734	987	5	100	982
1952	2155	894	8	63	886
1953	2133	987	10	79	977
1954	2043	899	7	179	892
1955	1679	899	11	243	888
1956	2086	863	10	224	853
1957	1558	730	9	245	721

『旅順口区志』1999 に基づき筆者が作成

表 4　1945 年～1957 年の漁業状況　単位（ｔ）

年	総生産量	漁撈	養殖
1945	1302	1302	－
1950	3198	3198	－
1955	6401	6401	－
1956	5762	5762	－
1957	5943	5943	－

『旅順口区志』1999 に基づき筆者が作成

1950 年には旅順全区域の捕撈高は 3198 トンに達し、1945 年の 1.45 倍に増えた（表 4)。しかし、この時期の漁業生産は主に漁撈活動によるもので、養殖産業の生産高は統計上の数字には全く現れていない（表 4)。社会主義政権下になって、生活が安定し漁業生産の基盤は徐々に回復したが、生活向上のためには対策をこうじて、漁業の全面的な発展を図らなければならない状況に迫られていた。

旅順の解放初期の漁撈活動は主に個人単位で行われており、1949 年に設立された「漁民互助組」も少人数の集団で行政管理など様々な問題を抱えていた。社会主義政権になったことで組織も大きく変化した。1952 年には「漁民互助組」を新たに組織し直して、「初級漁業生産合作社」が成立した。これは集団で計画的に漁撈活動を行って、漁獲物による収入は労働状況に応じて再分配する方式であった。1956 年には全国の農村で「農業合作社」が推進され、その影響が漁業に及び、旅順の全地域では、20 個の「高級漁業生産合作社」に改編された[『旅順口区志』1999]。各々の「高級漁業生産合作社」が漁業生産の計画を作成し、請負制度を導入して、これを契機に漁撈活動は徐々に組織化されるようになったのである。

第 2 節　人民公社時代の捕撈活動

1958 年に人民公社が成立した後では、漁民全員が人民公社の社員になり漁船など漁具は全て人民公社の集団管理に任せることになった。1958 年から 1960 年の大躍進政策によって生産は落ち込み、人民公社時代には生産意欲が衰えて経済は停滞した。1966 年に始まった文化大革命が生産や流通に混乱を招いた。また、初期には「以糧為綱」（食糧を大綱とする）といったスローガンを掲げ、農業を重視し、漁業を軽視する路線に切り替えていたので漁獲高は再び低

下していた。当時、人民公社の社員になったとはいえ漁撈活動を従事するのは一部の経験者のみで、大勢の住民は農業や養殖業に従事するようになっていた。人民公社初期に漁撈組織は旅順全区域の漁撈状況に応じて漁場は 13 箇所、漁業隊は 6 団、各人民公社には「大海市」という組織が設けられ[7]、主に漁撈生産の指導や漁撈、養殖の技術者の育成などが行われ、漁撈以外に養殖産業にも着手したため 1958 年から養殖業による収入が大幅に増加した。この時期に漁撈に従事する労働力及び漁船状況は以下のようになる（表 5）。

表 5　人民公社時代の労働力及び漁船状況（1958 年～1978 年）

年	労働力（人）	漁船数				
		合計	発動機付		無動力漁船（隻）	
			船（隻）	総馬力	捕撈	養殖
1958	1770	762	10	215	729	32
1960	1472	956	15	517	594	347
1962	1286	943	36	3604	590	317
1964	1548	822	31	1200	707	84
1966	2147	825	27	1150	707	91
1968	2152	900	30	1205	604	266
1970	2181	872	33	1155	491	348
1972	2195	901	52	1555	349	500
1974	2513	853	80	3517	326	447
1976	3337	917	152	6619	297	468
1978	3780	1068	197	8080	272	599

『旅順口区志』1999 から筆者が作成

このように漁撈生産が数年間順調に増加していたものの、1958 年から 1960 年の大躍進の政策の失敗[8]によって、農業生産が著しく衰退したため、農民の収入が全くなかった状況であった。その影響は漁業にも及び、漁業が大きなダメージを受けた。

[7]「大海市」は漁業全般を管理する組織である[『旅順口区志』1999]。
[8]この間の生産の落ち込みは天候不順によるという説があるが、実際上は政策の失敗によって大飢饉となって大量の餓死者が出た。

1962 年に漁撈組織はまた改編され、人民公社の指導の下で漁業生産大隊、漁業生産隊といった地域区分に所属する生産管理のシステムが取り入れられた。漁業生産隊は人民公社の住民に水産品を提供するのみならず、水産局が決めた漁獲量を確保しなければならなかったため、漁船の発動機付けの改造や捕撈技術の改善及び漁場の整備などの課題に直面した。1960 年代には旅順の各漁撈生産隊の動力漁船には漁業ナビゲーション設備が装着され始めて、毎年のように徐々に普及するようになった。また、木造船や舢舨船（小さな船）も動力漁船に改造され、水揚げ高を大幅に高めたので、この時期には各漁業生産隊の漁獲による収入は単独で採算を取れるようになった。こうして漁業生産隊が漁撈活動の末端組織として確立されていった。

表 6　人民公社時代の漁業状況（1958 年～1976 年）単位［ｔ］

年	総生産量	漁撈	養殖
1958	7431	5451	1980
1960	8290	5494	2796
1962	5132	4108	1024
1964	2946	2689	257
1966	3800	3165	635
1968	5576	3404	2172
1970	5173	3478	1695
1972	8610	4289	4321
1974	10600	6421	4179
1976	14806	8071	6735

『旅順口区志』1999 により筆者が作成

人民公社時代の漁撈生産は主に集団的に漁撈を行い、漁獲物は統一的に販売しその収入はその労働点数に応じて再分配するといった方針に基づいて進められていたが、この方式は意欲の減退につながって、生産高は増えなかった。他方、人民公社時代に養殖業の生産は徐々に成長し､漁業の中心は漁撈活動から養殖産業へと転換して、養殖の種類や範囲が次第に広がっていた（表 6)。現在まで続く養殖産業の基礎はこの時期に確立されたと言える。

1949 年の旅順解放の当初、周辺には日本人経営の水産試験場があ

り、主に昆布、わかめ、海苔、牡蠣、アサリなどの養殖実験を行っており、海藻の養殖には成功したものの、規模はそれほど大きくなかった。1952 年 1 月に大連市政府が昆布養殖を再開させ、わかめの養殖に力を入れるという方針を固めた。それを受けて 1955 年に旅順の龍王塘や長海県海洋島などに新しい養殖場が開設され、昆布種苗の養殖実験が行われた結果、画期的な成功を収めた。1958 年の人民公社成立後、旅順の周辺に更にいくつかの養殖場が設けられ、昆布、わかめなどの養殖が大規模に行われるようになった。当時コストを下げるために、捕撈用の釣り糸、網、またシーズンオフに使わない浮標などを海藻の養殖に使いコストを 3 分の 1 ぐらい削減出来たのである。しかし、養殖産業の発展は順風満帆ではなかった。1959 年からの 3 年間の大躍進の影響により、1963 年以後昆布の価額は一時大幅に下落し、販売量が著しく低下しした。表 6 に示した通り 1964 年～1966 年までの生産高も一時的に激減し、養殖産業に大きなダメージを与えた。その後、クロガイ、ホタテなどの養殖が始まり、養殖の生産高は年々に回復するようになった。

漁民の間では淡水養殖の試みが始まっていた。人民公社時代に政府は海洋養殖を奨励すると同時に淡水養殖を推進した。きっかけは 1958 年に主要課題として全国的に展開された「水利建設」である。旅順地域もダムや池の建設に力を入れ、新たに作られた数多くの池にハクレン等淡水漁の種苗を大量に投入したことが、淡水養殖の始まりであった。しかし、淡水漁は大連・旅順地域では余り人気がなかったので、養殖事業は予定通りに進めることが出来なかった。大連・旅順地域では淡水漁を食用する習慣がなく、よい値で売れなかったことも要因である。ただし、養殖による経済効果は顕著に現れていたため、養殖産業の重要性は地域の人々に益々重く認識され、養殖業も徐々に漁撈と同じように重要な産業として位置づけられるようになった。

第 3 節　経済改革開放後の漁撈活動

経済改革開放後、旅順周辺地域の漁業・養殖業は飛躍的な発展期を迎えた。1979 年から農村では生産請負制[9]が実施されて、人民公

[9]人民公社時代の集団労働は「大鍋飯」という分配制度が実行され、農民の生産意欲がなくなり生産の不振が長く続いた。1979 年以降の改革で所有権と経営権の分離を原則とする生産請負制が導入された。

社時代の集団での統一経営から個人・家族による生産と経営に移行した。漁村も例外ではなく、生産請負制度の導入により 1980 年代から家族、個人単位の漁撈形態が主流になってきた。生産請負制が実施され、漁獲量は個人の収入に直接反映されることになったので、漁民の労働意欲は俄然向上し 1983 年の漁獲量は初めて 1 万トンを超えた。さらに 1985 年に水産品の生産、購入、販売がすべて民間に開放されたため、漁民が漁撈生産への意気込はすこぶる高まっていた[『旅順口区志』1999]。漁業の急速な発展は漁村に様々な変化がもたらされ、漁民の生活も大きな改善がうかがえた（漁村の詳しい変化は次節に論じる）。大連の統計では漁民の 1957 年の一人当たり平均収入は 106 元、労働力平均収入は 183 元であったが 1978 年の一人当たり平均収入は 194 元、労働力平均収入は 507 元、1984 年の一人当たり平均収入は 644 元、労働力平均収入は 1412 元であった[10]。1980 年代の平均収入は 1950 年代の数倍に増えた。漁民の労働意識にも根本的な変化が見られ、漁撈活動を通して生活を豊かにしようとする人が増加していったのである。漁撈者の中には地元民は勿論、他地域から一時的に漁撈に携わる人も急増してきた。特に 80 年代後半に入ると人口流動が激しくなり、内陸出稼ぎ者の沿海部移住がブームになり、その中には新しく漁民になる人も数多くいた。1979 年以来、旅順周辺では漁船はすべて動力漁船に改造され、漁撈能力は着実にレベルアップした。労働力及び生産力の変化は当然水揚げ高をあげるには不可欠な条件だが、過酷な捕撈による水産資源保護を巡る問題の解決にも迫られていた。50 年代に大衆魚及び高級魚の種類は漁獲高の 60%を占め、60 年代には 50%以下に下がった。70 年代に入ると漁撈能力は資源再生の能力を大幅に超え、資源の自然構造を破壊し、旬の魚種が減少し、水産資源は全体から見ると衰退していく傾向が見られた。特に近年漁業の生産高はさらに低下し、その反面水産品の単価は大幅に値上りしたことが分かった（表 7）。

資源の減少が漁民の生活に負の影響を与えることは避けられないが、その影響を食い止めるために水産品の養殖に比重を置くようになり、漁撈以外の産業の開拓も大いに進んだ。1970 年代までは昆布、わかめなど海藻の養殖がメインであったが、1980 年から養殖と実験が大規模に行われ、中でもホタテ貝の発展が比較的早く、銀サケ、ニジマスの試験養殖も成功している[董志正編 1988]。またこの時期

[10]旅順は大連に所属する一つの区で平均収入も同様と思われる。

にエビの人工養殖にも力が入れられ 1980 年に龍王塘人民公社と江西人民公社にはエビ池が 7.1 ヘクタールもあった。1982 年にエビの養殖面積は 7.5 ヘクタールに広がり、生産高は 4 トンに達した[『旅順口区志』1999]。このようにエビ養殖は次第に拡大し、漁業の主な収入源となった。1990 年代に入るとナマコ、アワビといった高級海産物[11]の需要が高まり、ナマコ、アワビの養殖面積、生産量が毎年のように倍増し、養殖の主力となっていった（ナマコの養殖は第 8 章で詳述する）。このように旅順地域での養殖産業は、昆布養殖ブーム、ホタテ養殖ブーム、エビ養殖ブーム、ナマコ養殖ブームなどを経て[包特力根白乙 2011]、「点」から「面」に広がり、様々な水産品の養殖経験が蓄積されていった。現在も旅順政府は「以養為主、捕撈為輔」（養殖を主とし、捕撈を副とする）という方針を推進しているため、養殖産業は今後漁業経済の中核に据えられることは間違いないであろう。旅順周辺地域の漁村の生活は養殖によって大きく変化し、人々の価値観や生き方を大きく変貌させることになった。

表 7　旅順漁業生産高と生産額

年	生産高（万トン）	生産額（億元）
2004	30.0	17.9
2005	30.0	19.0
2006	30.6	21.3
2007	31.0	24.1
2008	11.7	43.0
2009	22.2	19.3
2010	17.8	20.8
2011	18.3	23.2

『大連年鑑』（2005～2012）により作成

1980 年代以後は養殖業のみならず、水産品加工業も飛躍的な発展を遂げ、冷凍製品、海藻加工、練り製品及び水産缶詰加工などの分野にも力が入り、大きな発展をみせた。例えば、1993 年に設立され

[11]1990 年代になると、一般庶民の生活は大分豊かになったので、高級食材の追求がブームになった。清代以来の満漢全席が復活し、ナマコ、アワビ、フカヒレなど高級食材が含まれていた。

た大連太平洋海珍品養殖有限公司と 2005 年に設立された大連碧龍海珍品養殖有限公司はすべてナマコ、アワビ、ウニなどの養殖を行うと同時に、水産品の加工や新製品の開発にも積極的に取り組んでいた。水産品加工業は養殖業と同じく漁業生産の急速な発展に大いに貢献したといえるであろう。

しかし 2000 年代に入ると漁撈資源の減少や漁業の工業化の浸透により、「漁業、漁村、漁民」の「三漁問題」が益々顕著になってきた。「三漁」問題とは 1990 年代に議論されていた「三農」問題[12]の漁村への適応であり、双方共に産業構造の転換が迫られている。「三漁」とは、具体的には「漁撈資源の枯渇、漁民生活の貧困化、漁村経済基盤の脆弱化」という漁村地域の経済発展の停滞を問題とする考え方である[于立、孫康、徐斌 2007]。旅順周辺地区の漁民の生産状況は、以前は水産品の生産量の 70%以上は漁撈生産によるものであったが、1985 年以後には養殖業を主とする水産物生産を中心とする方針に基づいて進められてきたので、漁撈によって生計を維持する漁民の生活が問題視されることになった[林光紀 2010：7]。旅順地域では昔から季節により、様々な種類の魚を獲る旬の時期があった。例えば毎年の 4 月～10 月は太刀魚の旬、5 月～11 月はヒラメの旬、4 月～7 月と 9 月～11 月は鯖の旬であったが、大量の捕撈を行った結果として環境破壊が進み、多種多様な魚類が絶滅の危機にさらされている。現在ではそれぞれの魚の旬の時期になっても、魚がとれない状況が続いており、漁民の収入が減少して、日常生活にも甚大な影響を与えている。特に 2000 年代になってから、養殖産業による漁業の生産額は常に増加してきたが、漁民の漁撈による収入は著しく減っていくという極端な傾向が出てきた。養殖産業の発展や漁業工業化の普及は一部の人にしかその恩恵を受けられず、大部分の漁民は漁撈資源減少の窮地に追い込まれている。漁村社会に新たな階級が生まれ、階級格差は明らかに拡大している[包特力根白乙 2011：150]。最近になって 「三漁」問題で海を失った「三無」漁民に漁業戸籍を確立し、漁民の生産、生活の現状に配慮するような施策を施すこと、この上にたって合理的に海洋資源を分配し、資源の増殖に関わる漁民の行動を表彰して、漁業資源の回復や漁業技術のレベルアップを図るようにと、各部門やメディアが呼びかけている

[12]「三農」問題は主に農業の停滞、農村の空洞化、農民所得の低下など問題の改善を中心に取り上げられている。

[林光紀 2010：6]。しかし、筆者は「三漁」問題を解決するには漁業のみに頼らず、地域のあらゆる資源に目を向け、漁民が他の産業にも積極的に参与すべきであると考えている。近年になって、旅順地域では「三漁」問題の解決を図るために、政府が漁村社会の都市化を推進して、漁業以外に観光業、飲食業などサービス業の発展に力を入れ始めた。旅順周辺地域の観光業がいかに推進されてきたかに関しては第 4 章～第 8 章で詳しく述べる。

第 4 節　漁村の生業変容の事例

近年、経済の発展に伴い、農村社会は日々変化している。農村社会の縮図である漁村地域も急速に発展し、多様多種な変容が見られる。本節では旅順近郊にあるＴ村を事例として取り上げ、その変容の全貌を考察する。この村を選んだ理由は以下の二点である。第一は、この村は昔から交通が相当に不便なために魚を獲っても高値で売れず、近郊では貧しい村として有名であった。改革開放後、1984 年に村の中に道路が開通し、市内向けのバス路線が村まで延び、最初は一日一便であったが、現在では五便に増え、交通は前と比べて随分便利になった。この結果、獲れた魚は新鮮なうちに迅速に市内へ運送できるようになり、漁民の生活に大きな変化をもたらした。第二の理由は、調査地を決める前に、旅順の近くや遼東半島大小長山島の辺りに予備調査を行ったが、Ｔ村は経済の発展速度が速く、変化が大きい村として知られていた。例えば 1985 年にＴ村が属する江西街道の一人当りの年間収入は 884 元であるのに対して、Ｔ村の一人当りの年間収入はすでに 2000 元台になっていた。当時、全国の農村住民の家庭一人当りの純収入は 397.6 元で、農村の消費水準は 347 元であった[13]。Ｔ村はこの水準を遥かに超えている。昔「女は嫁ぎ先無く、男は嫁取りの金なし」という貧しい村は、この十数年の間になぜ豊かな「小康村」[14]に変わったのか、この疑問を解くため筆者はＴ村を調査地として選んだ。

筆者は旅順に住む知人に頼んで村の責任者と連絡を取り、住み込

---

[13]『中国財政年鑑』[2002：461－462]を参照のこと。

[14]「小康」は 1980 年代に政府が設定した中国農村の発展目標で、人間が最小限必要な衣食住、教育、保健を満し文化と余暇水準を保つ生活水準をいう。江沢民は 2001 年に初期段階が達成されたとした。

みの調査が許可された。T村に初めて行ったのは 2003 年の夏であった。大連市内から約１時間ほどバスに乗って、旅順のバス停留所に着き、T村へ向かうバスに乗り換えた。T村に着いてすぐに村の書記のD氏に挨拶した。私の調査意図を説明した後に、彼は私の滞在先になるRさんの家に電話を掛け、10 分後に 60 歳ぐらいの女性が村民委員会の事務室にやってきた。彼女が筆者の住み込み調査に協力してくれたRさんで、私を家に案内してくれた。村の中心部を通り過ぎ小さい橋を渡って緩やかな坂を登ると、彼女の家が眼の前にあった。家は村の一番南にあり、現在夫と二人暮らしである。二世帯住宅なので隣に長男夫婦と孫一人が一緒に住んでいる。その日から、Rさんの家に一ヶ月ぐらいに泊まり、村に関する民俗調査を始めた。それ以後も、ほぼ毎年T村に行って、漁村生活の変化を追い続けているが、本稿では主に一回目の調査時にRさんから聞いた村の昔の様子と、筆者が自ら観察した変化の様子を織り交ぜつつ漁村の一家族の生活変化や漁村生業の変化を浮き彫りにする試みを行う。

1　調査地の概況

T村は遼東半島の西南側にあり、旅順の西側にあたる。村の西の方は渤海に臨んでいて村の海岸の近くには小山のような小さい島があり、地元ではこの小島を「坨子」と呼ぶ。昔から村には、主に董、陳、劉の三大姓があり、その中で「董」姓が最も多いので昔からこの村は「董坨子」と呼ばれてきた。村の老人の話では、彼らの祖先は清代に山東省から移住してきたという。最初に移住したのは董姓で、その後に劉姓と陳姓がやってきた。移住当初は近くの山の麓に住む人が多かったが、その後徐々に海辺の平地にも人が住むようになったという。船上生活者もいて、解放後になって、住民は全員自分の家を持つようになった。住民の半分以上は、漁撈に携わり、半農半漁の人もいる。人民公社時代に村は三つの生産小隊に分けられ、捕撈隊が一つ設立されていた。人民公社の崩壊後、1983 年には郷政府に変わり、生産大隊も村民委員会となり、村民委員会が設立された。現在T村は村民委員会の管轄で、村は三つの集団に分けられている。さらに 2008 年には旅順の西海岸に経済開発区の建設が始まり、隣接するT村は経済開発区の一部として開発が進められている。

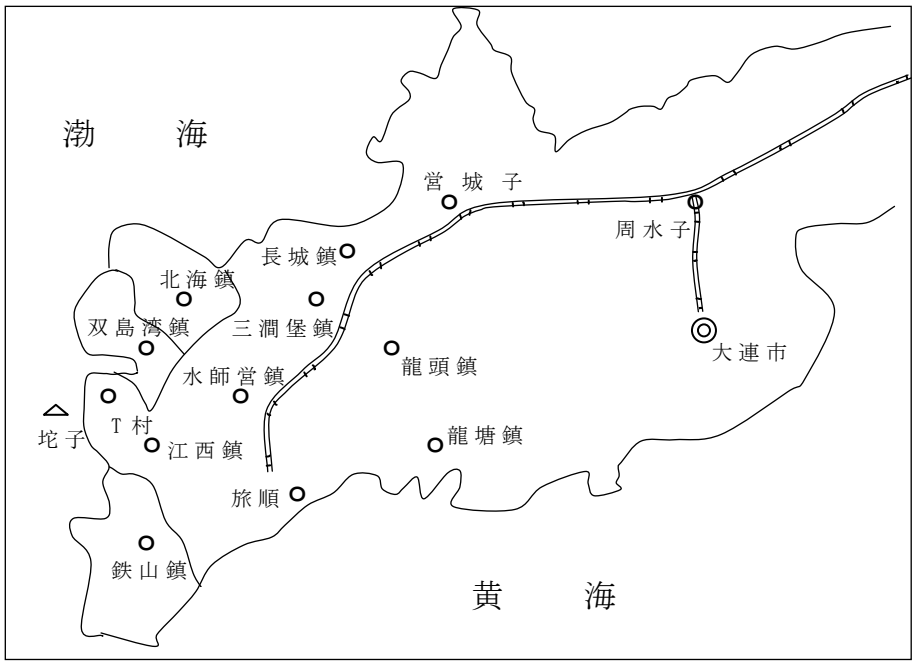


図 3　T 村の周辺図（2003 年）

2003 年 T 村の総人口は 736、総世帯数は 265 世帯であり、労働人口は 290 人である。現在も村には董姓が最も多く、172 世帯ぐらいある。次に劉姓が 70 世帯ぐらい、陳姓がほぼ 20 世帯、それ以外に、王姓、張姓、刁姓はそれぞれ一世帯である。近年、経済の発展に伴い、人口の流動も激しくなり多くの出稼ぎ者が内陸の農村から沿海部に移住するようになったため、流動人口は主な労働力として漁に出る時期に網元に雇われている。例えば、2010 年に村の戸籍がある住民は 767 人に対し、外来人口は 263 人で、地元民の約三分の一を占めた。外来者は簡単に村の戸籍に変更することが出来ないので、一時的な「暫住証」を持って生活している[15]。流動人口は村の労働力の不足を補うが、村の住民とは認められていない。

村の総面積は 3.82 平方キロ、山林の面積は 149.1 ヘクタールである。T 村の水産養殖の面積は 1999 年に 300 ムーであったが、2004 年に 3500 ムーに増えた。個人の企業は三つ、村が所有する企業も一つあり、水産物の養殖や加工を中心に行い、近年はアワビやナマコの養殖も進められている。人民公社時代に、村の生業は漁業から農業に転換したため、玉蜀黍の他、サツマイモ、ジャガイモ、白菜な

[15] 2003 年には「暫住証」は一年に 400 元で、2003 年以後は政府の管理強化により、月に 10 元、一年で 120 元に値下りした。

どが栽培されていたが、耕地が少ないため、生産高は他の村よりずっと低かった。改革開放後、漁撈は農業より高収益なので、農業から漁業或いは養殖業に転職する人が増え、漁撈や養殖業と農業の兼業者がいるが、漁撈未経験者でも友達や親戚と一緒に出漁するようになり、漁撈を専業として生計を立てる人口が年々に増加している。旅順周辺の沿海で漁業を主な産業とする村は 14 ケ所でＴ村はその一つである。

写真１　Ｔ村の海辺の風景

写真２　Ｔ村漁港

2　解放初期の捕撈活動

日本植民地時代の『関東州水産事情』には以下のように記されている。「關東州は其地勢が長く海中に突出して居るため、住民は太古より海産物を主要食物として居たらしく、石器時代に使用した石、骨製銛や骨製釣其の他土器時代の素焼の錘、漢代前に使用せられたと思はれる銅製釣等が州内の各所に發掘せられて居る。」［井上 1930］。この記述から旅順沿海の漁村は代々漁撈を受け継いでいることが分かる。解放前のＴ村には約 20 軒の家があり、旅順の方家屯会[16]に所属していた。当時の水産資源は非常に豊富で、マダイ、サメ、太刀魚、ヒラメ、ドジョウ、アワビ、ナマコ、クルマエビなどが最も多かった。しかし、当時の村には無動力小舢舨が 10 隻ぐらいしかなく、漁撈技術や生産性は極めて低かった。また、日本植民地時代の 1906 年に『関東州漁業取締規則』と『魚市場管理規則』が公布され、漁撈、供給、販売などに関して厳しい取り締まりが行われていた事もあり、豊富な水産資源があっても自由に販売することができない時代であった。当時は交通も不便で、獲った魚は主に近くで物と交換するか、「高利貸」への返済に当てたと聞かされた。昔この村

[16]日本の植民地時代に、旅順には方家屯会、三澗堡会、水師営会、王家店会、営城子会、山頭会などがあった。

には「魚窩子」という言葉が流行っていた。「魚窩子」は「高利貸し」のことである。当時の村の男性は漁撈以外に、夏の暑い時期と冬の寒い時期によく賭け事を楽しんでいて、負けると「魚窩子」からお金を借り、返済時は現金ではなく、魚で返済するという仕組みがあった。正月などの祭日や出産時には村の人々はよく「魚窩子」を利用していた。この制度は当時の漁民生活の苦しさを物語っている。男性が出漁するのも、半分はこの「魚窩子」のためであったと村の老人たちが感慨深げに語っていた。王崧興は漁村社会は農村社会とは違って、労資関係が随時に成立し、随時に取り消しができると指摘した[王崧興 1967]。しかし、「魚窩子」のような地域社会に根強く存在する貸借関係は簡単に撤廃できない。このような状況は長く続き、漁民の生活を困窮に陥らせるのみならず、精神的にも大きな負担を強いた。このように解放前にＴ村は漁村とはいえ、漁獲物による現金収入が得られず、漁民は極めて苦しい生活に追い込まれ、漁撈産業の基盤が相当に脆弱だった様子がうかがえる。

3　人民公社時代の捕撈活動

新中国成立後、Ｔ村も他の地域と同じく「互助組」、「初級生産合作社」「高級生産合作社」などへの再編成を経て人民公社に組み込まれた。当時Ｔ村は旅順が管轄する江西人民公社に属し、三つの生産小隊に分けられて各々の責任者がおり、小隊の単位で農作業が行われていた。人民公社時代の組織は表８の示した通りであった。

表８　人民公社時代の村の組織状況

生産大隊（自然村）	各生産小隊
大隊長	生産隊長
生産支部書記	副生産隊長
婦人連合会主任等	婦人隊長
捕撈隊長	

Ｔ村の概況により筆者が作成（2005 年）

1955 年にＴ村には漁撈に従事する特別の組織「捕撈隊」が設立された。捕撈隊は以前の「合作社」をもとに作られ、漁業隊が集団で漁撈活動を行い、漁獲物の販売ルートも漁業隊に決められ、個人の自由販売が禁じられていた。漁獲物による収入の配分は漁撈隊が漁

民の労働状況に応じて定められ、収入は一般の農民より高く一日に0.8元の補助金が配られていた。また月に食糧は21キロ支給され、共同食堂があって食事も無料で提供される好待遇だったので当時T村の人々は憧れる職場であった。

捕撈隊はT村大隊に属し、各生産小隊と無関係に独自に運営されていた（表7）。1960年代の統計によるとT村は現在の半分以下の人口で、総世帯数は109世帯、村の人口は383人で、労働人口は241人であった。捕撈隊に属する人は40人位で殆どが漁撈経験者の男性であった。1955年に設立した当初、捕撈隊は大きな戒克（ジャンク）船[17]を一隻持っていて、主に遠洋漁業を行っていたがそれ以外に十数隻の小さい舢舨船もあった。捕撈隊が毎年どのぐらい捕撈するかは人民公社により基本方針が決められていたが、捕撈隊が獲った魚や貝類などはT村に搬送する必要がなく、直接近くの煙台港や天津港に降ろして統一して加工・冷凍、輸出されることになっていた。そのため当時出漁するたびに名簿を取り、現金を管理するなど財務の関係者が二名同行する必要があり、漁場から帰港した際には、すぐに其の売上を報告できるように求められていた。漁撈関連の仕事は全て捕撈隊によって管理され、個人の出漁は厳しく禁止されていた。T村の人々は海辺に住んでいても、食卓にあまり魚が上らなかったのは捕撈隊が獲った魚を全部供出していたからである。捕撈隊の利益はT村と関係なく全て人民公社が一括して管理していた。

1960年代前後には人民公社が「一平、二調」[18]の方針を推進したので、旅順沿海部漁村の捕撈隊はすべて国営捕撈隊に統合され、全国的には「大鍋飯」[19]の呼び掛けがなされたために、魚を沢山獲っても獲らなくても報酬がみんな同じとなった。このため漁民の生産意欲は著しく低下し、捕撈隊は漁撈生産の不振、管理の混乱の状態を招いて、追い詰められていった。そこで、1962年に旅順政府は国営捕撈隊を解散し、元通りT村捕撈隊は再び独立した。1964年にT村捕撈隊はようやく20馬力の動力漁船を2隻購入し、翌年にまた

---

[17] 『関東州水産事情』[井上　1930]によると、当時遼東半島では大きな船を「戒克」と呼び、小さい船を「舢舨」と呼んでいた。

[18] 「一平二調」は分配の平均化と人民公社集団間の無償調達の方針に基づき、生産や漁撈等の活動を行うことで、農村経済は大混乱となった。

[19] 「大鍋飯」は文字通りに大きな鍋で炊いた飯の意味で、報酬が平等に配分される平均主義の喩えである。

20 馬力の発動機付きの漁船を 2 隻改造、1966 年にさらに 90 馬力の発動機付き漁船改造が成功した。漁撈技術の進歩により、漁撈活動の範囲が徐々に広がり、漁獲高が以前より遥かに増えてきた。捕撈隊の収入は旅順水産局の規定で「購八留二」といって、漁獲物の 8 割は国に納め、2 割は漁撈隊が自由に売り捌く権利があったが、捕撈隊の経営状況が少しずつ改善されると、漁民の利己的な風潮が蔓延するようになった。一部の漁民は自分の収入を増やすために、漁獲物の大半或いは全部を私物化し、水産局に決められた漁獲量通りを収められなくなる状況が多発した。1966 年に始まった文化大革命により、捕撈隊は殆ど年々赤字に転落、経営不振の状況は人民公社崩壊前まで続いた。1979 年にＴ村捕撈隊は解散して、漁船や漁具などは人民公社に没収された。

捕撈隊に所属していない人は殆ど生産隊で農業に従事していた。当時のＴ村は圧倒的に農業を主体としており、旅順周辺では主食は玉蜀黍なので、同村でも主に玉蜀黍を栽培し収穫していた。1955 年から全国の農村では食糧の「三定」という政策が打ち出された。「三定」とは「定産」（生産高を決める）、「定購」（統一購買する）、「定銷」（統一販売）のことで毎年国が各人民公社の生産高を決め、各村に分担させる[『旅順口区志』1999]。村は分担された生産高を目標にして生産活動が行われ、収穫物は指定場所に運ばれて、統一して購買され、購買物は国が統一して販売した。原則として納入後の余剰物は村の人々に分配される。Ｔ村は農地が少なく、生産高も他村に及ばず、収穫物を国に納めた後、村人に配る分さえ足りない時もあったが、この時は隣村から借りることで補った。

改革開放後、Ｔ村は 1983 年に正式に生産請負制度を導入し、個人単位の経営が認められるようになった。既に 1979 年に捕撈隊は解散し、所属員は各々船を購入し、家族単位の漁撈活動が始まっていた。Ｔ村は耕地が少なく農業だけでは貧窮する事は自明の理であったので、村の半数以上の住民が漁撈或いは養殖業に携わるようになった。Ｔ村の生業形式は時代に応じて変化している。生産請負制実施以来、村の生産形態は農業主体から半農半漁業に変わった。

村の全体の管理は村民委員会が行い、管理職は三人（書記、副書記、婦人主任）で村全体の行政を行っている。村民委員会は農村社会の末端組織で、委員は原則的には毎年の選挙で決めるが、実際は上の組織が任命する場合が多いと調査の過程で度々耳にした。

4　改革開放後の漁撈活動

生産請負制度が実施されて以来、T村には家族単位で船を購入して漁撈を行う人もいれば、一定の金額を出資して友人や親戚と一緒に船を購入する人もいた。働き盛りの男性がいない家庭や母子家庭などの場合は村の近くにある養殖所で働くのが普通である。収入から見ると漁撈に従事する人の年間収入は養殖所で働く人の収入の何倍もある。人民公社時代は皆集団労働で貧富の差があまりなかったが、今はT村に住んでいる人の間にも貧富の格差が出てきたようだ。生産請負制度を実施した当初、漁船を購入したのは殆ど人民公社時代に捕撈隊に所属した人々で1990年代半ばから一般の村民も自分の船を持つようになった。2004年の統計によると、T村では漁船があわせて192隻あり、馬力別に分類すれば、次のようになる。

表9　　T村所有漁船の状況（2004年）

350馬力：　2隻	34馬力：　1隻
300馬力：　2隻	25馬力：　1隻
275馬力：　2隻	22馬力：　96隻
185馬力：　8隻	18馬力：　1隻
135馬力：10隻	15馬力：　2隻
58馬力：　2隻	12馬力：　31隻
56馬力：　1隻	6馬力：　26隻
40馬力：　3隻	4馬力：　4隻

T村概況より筆者が作成

船の馬力が大きければ大きいほど安全性も高く一回の出漁での水揚げ高も大きい。60年代から山東省より網を固定する技術（定置網）が伝えられ、ケタ網や底建ての袋網、底引き網などもよく使われている。定置網を使用することによって漁撈量は以前より大幅に増えてきたという。例えば、Rさんの家は夫妻が1981年に12馬力の船を購入し、最初は長男と一緒に漁撈を行っていたが2001年に長男が独立したので、自ら40馬力の船を購入した。2003年にRさんの次男が旅順市内にある工場の仕事をやめて、Rさん夫妻と一緒に漁に出るようになった。家族が生産単位として捕撈活動を行うのがごく普通の光景となった。

現在は船を持つ家では出漁は男性の仕事であるが、魚を販売するのは女性の仕事でRさんはその典型である。彼女は人民公社時代に

他の女性と同じく毎日野良仕事をやっており、商売にはずぶの素人であった。勘定を間違ったら一大事なので最初は無論緊張していた。彼女は魚を販売するだけではなく、毎日の家事や野良仕事もきちんとこなさなければならないので多忙な毎日である。大体5時に起床し、豚や羊、鶏、猫、犬などに餌をやる。その次に朝食の準備、朝食ができたら夫を起こして朝食をとり、朝食を食べる間に夫が漁に出る準備を手伝う。夫の出漁中に、彼女は家に帰って洗濯や野良仕事などを手早く終わらせ、昼になったら昼食を用意する。夫からの連絡が入ったらすぐ海辺へ行って迎えの準備をし、その日に獲れたものを海辺ですぐ行商人に売りさばく。行商人との交渉は彼女の仕事である。行商人は今までずっと付き合いのある得意先なので、かなりの信頼関係がある。水揚げされた魚を大きな籠に入れ、籠ごとに重さを量る。Rさんはその魚を種類に分けてメモを取る。支払は1カ月単位でまとめて清算し月末に現金で支払ってくれる。彼女の話では不漁の場合は年間5万元ぐらい、豊漁の場合は約7、8万元の収入が得られる。毎月現金収入があるので生活が随分楽になったが、農業の時代よりも金銭の感覚が敏感になり、連日不漁になると当然ながら不安に感じてくると聞かされた。次に示したのはRさんの一日の漁獲物の項目に関するメモである。

表10　一日の漁獲物の種類成（2005年4月12日）

種　　類	獲る量	金　額
大老板（大ガンギエイ）	19斤×13元	247元
小老板（小ガンギエイ）	11斤×11元	121元
黄花魚（キグチ）	33斤×8元	264元
大　虾（大えび）	75斤×6元	450元
小　虾（小えび）	18斤×2元	36元
海　羅（サザエ）	6斤　×5元	30元
大扇魚（大マナガツオ）	8.5斤×5元	42元
小扇魚（小マナガツオ）	72斤×3元	216元
烏　魚（イカ）	3.5斤×4元	14元
小雑魚（小さわら等）	11斤×2元	22元
合計		1442元

調査データにより筆者が作成

メモは禁漁になる冬と夏の一定期間を除き、毎日取っている。T村では夫婦一緒に漁撈活動を行う家が一般的になり、人民公社時代のように村人が一緒に働く光景は見られなくなった。家族単位の経済活動は確かに収入の増加に繋がるが、村の人々の交流が少なくなり、互いに疎遠感が芽生えてくるのではとRさんは心配している。

写真 3　水揚げ量を測る漁民（2004 年夏）

写真 4　海岸の風景（2004 年夏）

改革開放後、特に 1979 年から 2000 年代の前半に漁民の収入は順調に伸びていた。例えば 1995 年の統計では一人当りの年間収入は 6008 元に上がり、この時期はピークに達した。2003 年の統計では一人当たりの年間収入は 5839 元に下がっていたが、それでもT村の一人当りの収入は周辺地域ではずっとトップレベルを保っていること明らかであった。2000 年代の半ばから水産資源の枯渇及び外来捕撈者の増加、漁船性能の向上による過酷な捕撈などの要因で漁撈量が年々に減っていく傾向が見られた。先述したように近年「三漁」問題が漁村社会の主要問題として大きく取り上げられるようになり、T村でも問題となった。水産資源の保全や漁業生産の確保のために旅順水産管理部門が様々な措置を取ったが、その中では毎年漁獲禁止期間を設ける方法が注目されつつある。例えば大連地域は夏の 7 月～9 月と冬の 1 月～2 月を漁獲禁止期間とし、この間に出漁すると罰金が科されると定めているにもかかわらず、毎年密漁者の跡が絶えない。于立らは遼東半島のクラゲ漁を通して、「三漁」問題と公共政策の関係を論じる際に、水産資源に対して有効的な公共管理システムを探る必要があると指摘した[于立·孫康·徐斌　2007]。漁業構造の改革が迫られている。クラゲ漁は「資源公有＋個人捕撈」というモデルであるため、乱獲を招きやすいのだという。このように「三漁」問題を解決しない限り、漁民の生活基盤は今後は揺らいでゆく可能性も否定できない。

結び

旅順周辺の漁村は時代と共に常に変遷している。各時代の社会的情勢に強く影響を受け、漁撈活動を軸に生業基盤の変化がもたらされた。旅順解放の初期は水産資源が割合に豊富であったが、漁船の性能が劣っていたので、水揚げ量は向上しなかった。経済の改革開放後、漁船性能の向上に伴い、水揚げ量は増えたものの、水産資源の枯渇を招いた。漁獲生産力と水産資源をいかにバランスよく展開していくかは当面の漁村に問われている大きな課題である。水産資源の持続的な利用や漁業産業の健全な発展は何よりも重要であるが、漁村社会の「三漁」問題の改善にあたっては、他の産業への参入も視野に入れて、漁村の限りある資源を最大限に生かしつつ、多種多様な業種の育成に着目する必要に迫られることになった。

第 3 章　改革開放後の地域社会の変容―家族を中心に

はじめに

前章では旅順周辺地域の生業に関して検討したが、時代に応じて地域の経済に直接影響を与える生業は常に変化していることが判明した。生業の変化に伴い、地域社会の日常生活や家族の構成、及び婚姻は大きく変化した。この点に関して、中国北方の漁村に関する研究は皆無な状況である。農村の家族や農村生活に関する研究は多少あるが、数はそれほど多くない。これは解放以後の数十年にわたる中国社会の激変と深い関係がある。1950 年代から 1970 年代にかけて中国社会では政治、経済、文化のあらゆる分野に激しい変化が起こり、農村社会も大きく変化した。この間に調査研究はかなり難しい状況にあった。1980 年代に入ると、中国の社会人類学者の多くは少数民族を対象に「民族学」を研究するようになった。外国の学者は中国での現地調査の実施が極めて難しかったので文献上での研究しかできなかった。中国の社会人類学の研究は外国と比べて相当に遅れをとった。しかし、「民族学」が少数民族の研究を主体にしていて、漢族の農村社会や漁村社会が研究対象としては余り注目されなかった事も研究の遅滞の一因であった。

近年、日本では中国農村の変化について関心を寄せる中国人研究者が増え、東北部では[聶莉莉 1992]、福建省では［藩宏立 2002]、湖南省では［蕭紅燕 2000]などの業績が刊行された。彼らは中国本土での現地調査をもとにして、農村社会の考察を試みている。漁村社会は農村社会と似た点が多いが、独特な特徴や習慣などがあると思われるので、本章では以上の先行研究を踏まえ、漁村社会を中心に旅順周辺地域の家族や婚姻及び儀礼の変化に関して考察する。

第 1 節　家族の変容

1　日常生活

現在では沿海部の漁村地域の生活は内陸農村よりは豊かであると一般には認識されている。確かに経済改革開放後、漁撈による漁村経済の活性化や環境の整備が急速に進められ、漁村の日常生活に様々な変容が齎された。T 村でもその一端を垣間見ることが出来る。

T 村は経済改革開放前に、交通がかなり不便であった。1987 年にアスベスト道路が完成し（写真 1)、2000 年に旅順市内との往復バスが村まで延びて 40 分ぐらいで到達できるようになった。2005 年現

在ではバスは村から旅順まで一日五往復運行され、交通は随分と便利になった（表 11)。住民は獲れた新鮮な魚は迅速に市内の市場に届けることができ、随時に旅順市内に行けるようになった。

表 11　旅順から村までバスの時刻表

時刻表	旅　順	Ｔ村
一便	６：２０	７：２０
二便	８：４０	９：３０
三便	１０：２０	１１：２０
四便	１２：４０	１３：３０
五便	１６：００	１７：００

調査データにより筆者が作成（2005 年）

旅順解放の当初は、Ｔ村の漁民の生活は他の村と同様に相当に苦しかった。老人の話によると、その時、一年の収入は 5 元、よくても 20 元程度で、時には一年間働いても、年末に一銭の報酬もない場合もあったという。その後の人民公社時代に収入が徐々に伸び、生活もある程度は改善された。政治と経済は混乱が続いていたが、1970 年に各家で電気が使われるようになり、1984 年に水道が整えられた。

2008 年にＴ村は旅順経済開発区の一部になり、漁港の拡大建設が進められ、村の西側に新しい道路が開通し、旅順新港まで直接連絡することができるようになった。交通の利便性の増大が村にさらなる発展の機会を与えることになった。村には 1965 年には小さな売店があったが醤油、塩、マッチなどしか売っていなかった。1997 年に大連市政府及び旅順口区政府が「小城鎮」建設の計画を立案し[20]、1999 年に村の中心部に商店街を建て、雑貨店は勿論、八百屋、床屋、風呂屋、レストランなど様々な店が入った（写真 6)。店のオーナーには地元の人も旅順市内の人もいる。市内で流行っている物があればすぐに仕入れて販売する体制が整い、住民は村での生活が都会と余り差がないと言うまでになった。

[20]小城鎮は 10 万人以下の小都市で、農民を移住させて経済発展の拠点とし、農村と都市の格差を是正し、大都市への人口流入やスラム化を防ぐ意図があり、広場・運動場・商店街・公園が一つある。

写真５　村に通じる道路

写真６　村の商店街

漁村の生活変化は、またＲさん一家の日常生活を通して観察できる。Ｒさんの家には豚３匹、羊５匹、犬２匹、猫１匹、鶏 10 匹を飼っている。彼女は毎朝一番の仕事は豚や羊や鶏に餌をやり、その後羊の乳を搾り朝食を用意する。朝食は殆ど饅頭とお粥である。おかずは漬物と焼き魚が多かった。夫と孫さんは毎日羊の乳を飲むが、なぜ自分が飲まないのかと聞いたら「私は丈夫だよ。」と笑いながら答えた。長男夫婦は隣に住んでいるので夕食は殆ど一緒に食べる。長男の嫁は料理上手でよく美味しいものを作ってくれた。三食には必ず魚がある。揚げ魚、煮魚、魚団子のスープなどはよく食卓に上った。漁村なので魚料理が多く肉料理が割合に少ない。肉は炒め物に少し入れるぐらいで他には余り使わないようである。野菜は自分の菜園で自家栽培している。1985 年に生産の請負政策を実施する時にＲさんの家族全員は 1.2 ムーの耕地を分配された。この耕地で玉蜀黍やサツマイモ、白菜、大根などを栽培し、夏だと胡瓜、トマト、ナス、インゲンなども作っていて野菜は殆ど自給自足である。これらの農作物の栽培は殆どＲさんの仕事である。他に食べたい野菜があれば村の八百屋に行って買う。村には２軒の八百屋があり十数軒の店があるので生活が不便という感じは全くない。魚、野菜、卵、羊の乳が自給自足なので、日常生活に必要なものはそんなにお金はかからない。船のデイーゼル油が専らの出費だという。また風邪を引いた時に薬代や子供の服に使用するお金などは取っておく。おやつにはよく果物とアイスクリームが出される。子供は近くのお店でお菓子などを買ってくる時もあるが、お菓子の種類は都市と余り変わりない。Ｒさんの話では、今の生活は人民公社時代より随分よくなったという。人民公社時代は海辺に住んでいても勝手に魚を捕ることが出来ず、生産隊には捕撈隊があるので捕撈隊が船を管理し、計

画的に漁に出ることに決まっていた。祝日の時は村人に少し魚を分配するが、普段の食卓には魚が頻繁に上ることはなかったと聞いた。

現在は村の九割の家庭には冷蔵庫があるため自分が捕った魚は売る以外に一部が冷蔵庫に冷凍するようになり、漁の少ない時期にいつでも食べられるように保存する。村には 1983 年前後にテレビが普及し始めた。今はどの家でもテレビが一台、中には二台持っている家もある。テレビは漁民にとっては時間を費やす娯楽の道具ではない。出漁に際して一番大事なのは天気の確認なので、天気予報は必ず毎日チェックする。また彼らは市場の海産物の価格変化及びデイーゼル油の値段変動などに常に関心を寄せているので、油に関する情報はよく盛り上がる話題である。例えば 2003 年にデイーゼル油は１トン当たりで 3000 元前後であったが、2004 年には１トン当たりに 4000 元以上になった。毎年徐々に値上がりする。漁村の人々はあまり新聞を読む習慣がなく、情報は全てテレビで知らされるため重要な情報源になっていた。テレビ以外に、現在各家には固定電話、携帯、冷蔵庫、洗濯機が殆ど普及し、乗用車かトラックを持っている家もある。家庭用品の普及状況は次の表のように示される。

表 12　　家庭用品などの普及状況

年	品　種	値段
1978	白黒テレビ	1000 元前後
1983	カラーテレビ	3000 元～10000 元前後
1985	冷蔵庫	2000 元～6000 元前後
1987	洗濯器	2000 元～
1992	固定電話	1000 元前後
2000	携帯電話	500 元～3000 元前後
2000	トラック	6 万元～
2006	乗用車	4 万元～

調査データにより筆者が作成　（2011 年）

このように漁民の生活は漁撈活動による収入に応じて徐々に改善されてきた。その変容は物質に留まらず、社会保障にも及ぶ。中国の社会保障は 2000 年までは、主に都市住民を対象に進められてきたが、これ以降は農村でも社会保障システムの整備が積極的に取り上げられるようになった。数年前から 60 歳以上の老人の老後保障を考

え始め、2004 年に村民委員会は 60 才以上の老人に年に 120 元の手当を配当し、2007 年は 500 元、2010 年に 730 元にレベルアップした。また医療保険も検討し、入院する場合は最大 18000 元の手当を支給すると定めた。現在の社会保障はまだ都会と大きなひらきがあるが、漁村の日常生活は以前と比べて著しく変化した。

2　住生活

漁村の生活変化を論じる際に住居の変容にも着目しなければならない。T 村の住居は昔の「草房」から、人民公社時代の「瓦房」に変化し、さらに経済改革開放以後の「楼房」に変容するようになった。「草房」「瓦房」及び「楼房」はそれぞれの時代の特徴が示され、各時代の経済状況が如実に反映されている。「草房」は名前の通りに藁の草や昆布で屋根を覆う住宅であり、「瓦房」「楼房」は瓦屋根の住宅である。T 村は現在「草房」が一軒も残っておらず、全部「瓦房」「楼房」になっていた。T 村では六十年代以前は全て「草房」であったが、六十年代にある出来事をきっかけに村の住宅は全部「瓦房」に一変した。それは 1964 年 8 月 25 日の出来事で、村が台風に巻き込まれ殆どの「草房」は強烈な龍巻によって吹き飛ばされた。村の住民は自分の家があっという間に崩壊したので、大変な衝撃を受けた。これ以降、村人は無利子貸し付けで新しい家を建て直そうと決意し、二度と台風に吹き飛ばされないように、この時期以後に新築した家は全て瓦屋根の「瓦房」になった（写真 7)。60 年代に建てられた「瓦房」は殆どは同じ間取りで、西炕・堂屋・東炕からなっていた（図４)。台所（厨房）は真中に、両側はオンドルの寝室になっている（写真 8)。

写真 7　T 村の瓦房

写真 8　オンドル

<table>
<tr><td>西炕
（オンドル付きの寝室）</td><td>堂屋
（厨房）</td><td>東炕
（オンドル付きの寝室）</td></tr>
<tr><td colspan="3">院子（庭）</td></tr>
</table>

図 4　三間の家の間取り

オンドルは床下に竈の煙突が通り、竈で煮炊きした時に発生する煙をパイプに通し、部屋も暖める床暖房が効いている。中国北方漁村の各家にはオンドルが作られ、炊事すると同時に暖を取る。1980 年代以後は三間の部屋や五間の部屋の中にオンドル付きの部屋とベッド用の部屋を設定した。ベッドの利用者が増えてきたためである。図 4 の間取りは北方地域の一般的な住居であった。

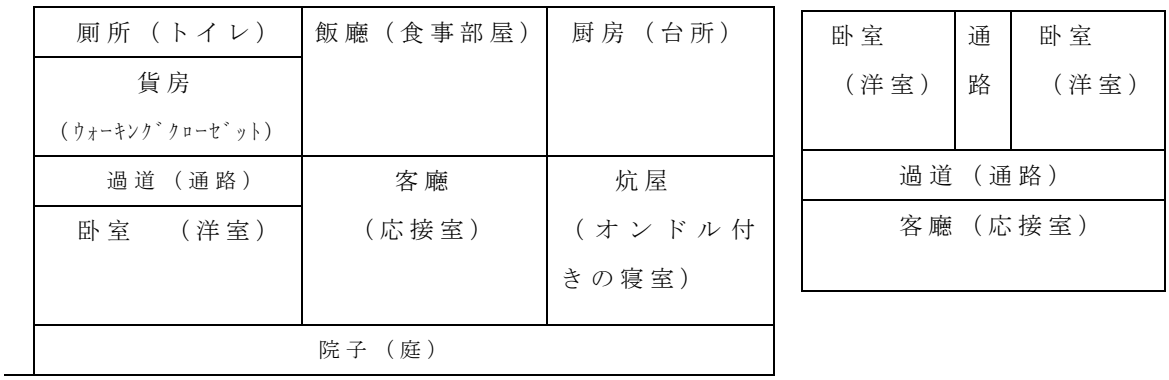
中国の農村や漁村では「家」を持つことは何よりも重要である。昔は子供が成長し、特に結婚年齢になる息子がいれば、一間を用意するのは一般的であった。しかし、三間の家（図４）は手狭に感じられるので、80 年代は三間から徐々に、親と息子が一緒に住む二世帯住居（図 5）が増え、Ｒさん宅もその事例で、Ｒ夫婦は東側、長男夫婦は西側、孫は一人で応接の南側の洋室に住んでいる。「東頭為大」（東は大と為す）と言われ、親は東に住むのが一般的である。台所は別々でお互いに干渉せず、各々が別に生活する事が可能になった。

<table>
<tr><td>堂屋
（厨房）</td><td>過道</td><td>客廳
（応接室）</td><td>堂屋
（厨房）</td></tr>
<tr><td>西炕
（オンドル付きの寝室）</td><td>過道</td><td>卧室
（洋室）</td><td>東炕
（オンドル付きの寝室）</td></tr>
<tr><td colspan="3">院子（庭）</td><td>卧室
（洋室）</td></tr>
</table>

図 5　二世帯住宅

1990 年代になると若い女性は結婚する時点で「自分の家」を持てることに憧れる人がだんだん増えてきた。昔のように舅、姑と同居をあまり望まないので、結婚前に新婚用の家を用意するのが一般的

になってきた。建物は以前の「瓦房」と違い、二階建てや三階建の「楼房」に変わりつつある。Rさん夫妻は次男が結婚する前にこのような「楼房」を用意した（図 6)。「楼房」が従来の建物と最も違うところはトイレが都会の住宅と同様に、外ではなく建物の中に組み入れられていることである。都会の住宅と比べて全く遜色ないように建てられている。Rさんの話によると、70 年代に三間の「瓦房」を建てるには 1000 元くらいであったが、1986 年に二世帯共に住む「瓦房」の建設費は 2000 元くらいに上昇した。さらに 2001 年に二階建ての「楼房」の建設費は約 140000 元もかかった。このように時代の変化に伴い、新築に使われる費用は数十倍をも増えてきた。



楼房の 1 階　　楼房の 2 階

図 6　楼房住宅

近年、旅順周辺地域の都市化は加速している。特にT村のような近郊の漁村はなおさらである。改革開放以来 30 年たって、都市化は二種類の変化があった[林光紀 2010:12]。第一は人の都市化である。つまり、数年前の故郷を離れても土地は手放さずにおいたまま、都会へ出稼ぎにでる労働者である。近年は様々な理由で再び故郷へ戻る人が増えてくる。第二は空間の都市化である。都会に近い近郊の漁村はこのパターンが多く見られ、郷鎮企業や工業団地の影響で、都市化が進められている。T村はこの典型である。生産請負を実施した後、郷鎮企業や民間企業が急速に発展して進出した。2008 年にT村は開発区の一部になったため、ビル建設が大規模に行われている（写真 10)。現在では農村戸籍の一部の人がマンションに入居し、都市住民の身分になっている。数年後は漁村に住む全員がマンションに引っ越す予定である。今後は、漁村が完全に都市化されて、漁民の生活を営む生活スタイルには大きな変容が訪れるであろう。

写真 9　村の 3 階建の楼房

写真 10　都市化が進む漁村

3　余暇生活

漁村は都会と異なり、特に昔は娯楽活動が非常に少なかった。余暇時間は労働と同じく重要であるとは認識されていなかった。余暇時間といえば、男性は殆ど賭博に耽溺していた。人民公社時代に村には少人数の劇団があり、定期的に村民に『紅灯記』(50 年代 60 年代に流行）などの名劇を披露してきたが、年に一回か二回くらいでは村民の希望を満たすことはできなかった。1970 年代前半はテレビが普及していなかったため、村の住民はめったに映画を見られなかった。見たい場合は旅順市内までに行かなければならないし、チケットの費用もかかるので、食べるのに精一杯であった時代にはそれが余りにも贅沢なことだと考えた人が多かった。そこで村が夏の間に月に 2 回位は無料で映画の放映を行っていたという。当時の経済状況からいえば､余暇を楽しむ余裕がなかったのはいうまでもない。

Ｔ村は 1985 年に生産の請負政策を実施して以来､90％の人が漁撈或いは漁撈活動に関わってくるようになった。彼らは一年中出漁するわけではなく休漁期もある。先述したように旅順地域では毎年夏と冬の間に海を封鎖するのでこの間の出漁は禁止である。この時期になると､男性たちは船の補修や農業仕事などをするのが一般的で、女性は旅順市内へ買い物に行ったり或いはどこかへ旅行に行ったりして休暇を有効に利用する。また毎年の夏に、旅順市では女性ダンスの試合が行われる。Ｔ村の女性チームも毎年必ず参加する。Ｒさんの長男の嫁もダンスチームのメンバーの一人である。彼女たちはこの試合に参加するために、実は一年中、毎日ではないが、忙しくない時に集まって練習している。家事や魚の販売や野良仕事などは彼女たちには非常に大事な仕事であるが、ダンスは大事な生活の一部である。普段の猛練習の結果、彼女たちは今まで数回も賞を受賞したことがあり村人はみんな彼女たちのことを誇りに思っている。

写真 11　村のダンス代表団

従来、近代社会で中心的意味を持つ活動は、「労働」であった[前田 1995:105]。労働は漁撈に携わる漁民にとって 50 年代 60 年代は、特別な意味を持っていた。しかし、改革開放後、若者の余暇活動が豊かになり、老人も余暇生活を重んじるようになってきた。T 村では 60 歳以上の老人は年に一回団体旅行を企画し、この機会を通して、村民間の交流を促した。生産請負制の実施以後、家族単位の経済活動は確かに収入の増加に繋がるようになったが、村の人々の交流が少なくなり、お互いに疎遠感が芽生えてくる傾向が見られた。

第 2 節　民俗儀礼の変容

漁撈生活で最も重視されるのが海上安全で、漁民にとって民間信仰や神様への祭祀活動は日常生活の中で最も重要な一部になっており、最近 T 村では神様への祭祀や祖先祭祀に関する活動が徐々に増加し、復興してきた。人民公社時代、特に 1963 年の「破四旧」運動（旧弊な思想、文化、風俗、習慣をとり除く）が始まって以来、神への祭祀や祖先祭祀に関連する活動は一切御法度となった。神への祭祀や祖先祭祀の行動が発覚するとすぐに検挙され、批判される。文化大革命の時代（1966 年～1976 年）には、都市から農村まで「無神論」が横行していた。T 村も例外でなく、無神論者によって、祭祀を執行していた龍王廟が破壊され、各家にある祖先祭祀用の位牌や祭壇などは全部没収された。こうした破壊行為によって人々の意識の中では神への信仰が薄れ、祭祀の実践は行われなくなっていった。しかし、改革開放後の人民公社の解体に伴い、神の信仰や祖先祭祀は再び復興の動きを見せ始め、龍王廟も新築された。

1　民間信仰の復興

T 村では漁撈活動に関わる人が多いので他地域より民間信仰を重

視しており、復興活動は早期に展開された。その契機になったのは1988年のある日の出来事である。T村の人々はその日は普段と同じように漁に出ていた。ところが天候が急変して、出漁した漁師の中に遭難者が出たという情報が村に伝わってきた。村人は皆心配して海岸まで駆けつけたが、大自然を前にして彼らが唯一できるのは神と祖先が遭難者を加護するようにと祈る事だけであった。この日だけで10人の死者が出て、村人は大きな衝撃を受け、現在でも人々の記憶に残されている。この日から村の人々は新しい龍王廟の立て直しを検討した。以前には村の東北の山の上に龍王廟があったが、長い年月に何の手入れもしなかったので、荒廃した状態であった。新しい龍王廟の立て直しが迫られ、具体的に建設を計画したが、資金の工面が難航して、なかなか実現できなかった。長い期間を掛けた再建活動によって、2003年に村の人々と関係者からの献金によって、新しい龍王廟（写真12）が完成した。

写真12　T村の龍王廟

献金された金額は10万9998元であり、T村の人々が如何に祭祀や儀礼の復興を望んでいたかが察せられる。龍王廟の石碑には献金者の一覧が刻まれて、後世の人々にも伝えることが意図されている。献金状況の詳しい内容は次の表13に示す通りである。石碑に刻まれた献金者54人の内、董、陳、劉の三大姓は38人もいて過半数を占めている。つまり、この地に住んでいる漁民の間では、龍王への信仰が代々伝えられてきたことが分かる。また献金額には幸運な数字8と9が多いことに注目されたい。この数字には漁民の強い願望が込められているのである。

表 13　龍王廟を建てるための献金状況

陳吉宏 60500 元	張成斌　10000 元	董文忠　1990 元
董文偉　1980 元	于登州　1000 元	鄒明強　1000 元
遅希楽　1000 元	袁宏亮　1000 元	董文喜　1000 元
董文勝　990 元	董志印　990 元	陳吉軍　990 元
陳吉青　990 元	周森林　990 元	董有芳　990 元
董文瀚　990 元	董文爽　990 元	刁勝利　990 元
董文武　990 元	董文岩　990 元	董文壮　990 元
董双全　990 元	劉尊利　990 元	刁勝勇　990 元
陳徳彬　990 元	董文君　900 元	杜祖純　500 元
董文全[大]500 元	劉汝平　200 元	董文波　200 元
董志鎖　200 元	董文海　200 元	于　水　200 元
董有財　200 元	董文軍　200 元	劉汝祥　188 元
董文升　100 元	劉汝彬　100 元	劉汝元　100 元
董艶東　100 元	董文全[小] 100 元	董文斌　100 元
董又珠　100 元	董文連　100 元	董万勝　100 元
李永軍　100 元	鄭建東　100 元	劉延弼　100 元
陳徳強　100 元	朱占偉　50 元	辛民慶　50 元
張高鵬　50 元	張彦民　50 元	陳吉成　20 元

出典：筆者が龍王廟の石碑により作成

毎年旧暦の 6 月 13 日はＴ村にとって、海神の龍王爺爺と龍王奶奶を祀る非常に重要な祭日である。2005 年の旧暦 6 月 13 日に筆者は祭祀儀礼を見学する機会を得た。前日に用意された豚肉や羊肉と「饅頭」などを供え物として龍王廟に運び、祭祀を執り行うことで、長年の夢が実現された。儀礼に関しては第 7 章で詳しく論じる。

儀礼が執行された後に、親戚や友達が集まって美味しい酒や料理などを一緒に楽しみながら世間話をして、お互いの交流を深める。こうした祭祀を通して人々がふれあう機会が多くなると共に、漁業の安全や豊漁であるよう祈願する漁民の真意がうかがえる。

2　年中行事

Ｔ村では旧暦 6 月 13 日の龍王廟の祭祀以外にも、重要視される幾つかの年中行事がある。その中の一つに祖先祭祀が挙げられる。祖先祭祀は人民公社時代に一時的に途絶していたが、経済改革開放後再び復興している。Ｔ村の祖先祭祀は死者の命日以外に、正月、清明

などの祭日に、家と墓の両方で祭祀儀礼が執り行われる。一般的に長男が祭祀を継承することが理想とされているが、実際は長男でない場合も結構ある。Rさんの夫の両親は亡くなる前に一緒に暮らしていたので、夫は末子であっても、祭祀を継承するようになった。祭祀儀礼に必要な費用は他の兄弟と分担することになっている。祭祀の日取りはRさんの頭の中にきちんと入っており、その日になると、彼女は他の兄弟に電話をかけ、祭祀の準備などを相談する。Rさんの家には応接室に祭壇があり、その上に祖先の写真と位牌が置かれてある(写真 13)。その前の机に供え物が据えられる。祭祀の在り方は家ごとに異なるが、「四代奉祀」と「三代奉祀」がある。劉氏の家は「三代奉祀」で、三代祖まで祀る。董家村の人々にとって、祖先祭祀は既に日常生活の一部になっており、家の繁栄は祖先祭祀を丁寧に執り行うかどうかと強い関連性があるといわれる。

写真 13　Rさん家族の位牌

第 3 節　婚姻の変容

婚姻はいつも時代の文化と社会を反映する。家族の形成の契機となる婚姻は時代の変化に伴い、結婚式や結婚相手への選択基準などあらゆる面は変化する。新中国成立後の 1950 年に公布された婚姻法により、結婚の自由、男女平等、一夫一婦制など新しい家族規範が築かれ、それまでの家父長制的な家族制度は、地域により程度の差はあるが、徐々に消滅するようになった。1950 年代から数十年の間は激動の時代で、1958 年の大躍進、1966 年からの文化大革命、1978 年の経済の改革開放など幾つかの政治運動が起こっていた。それぞれの時代の政治運動は各家に計り知れないほどの衝撃を与え、婚姻の態様にも大きな波紋を投じた。改革開放以後、人々の生活水準や居住状況が著しく変化して、婚姻形態や結婚過程などの変容も益々際だって変化した。婚姻形態の変化はその時々の文化や社会の経済をありのままに映し出す鏡であると考えられる。

近年、都市部ではこんなダジャレが流行っている。「結婚は一種の誤りで、離婚は一種の目覚め、再婚は頑迷に非を認めないことで、独身は徹底的な悟りである（结婚是一种错误，离婚是一种醒悟，再婚是执迷不悟，单身是大彻大悟）」。これは一つの戯れ言葉に過ぎないが、多かれ少なかれ今日の中国社会の婚姻事情や中国人の一部の婚姻に対する考えを表している[虞萍 2008：80]。これはあくまでも2000年代の都市部の一部の若者の婚姻への認識である。中国では都市と農村は戸籍が各々違うので、当然ながら農村出身の人は都会の若者の考え方とは大きな開きがある。そして、経済の発展に伴い、農村や漁村における人々の婚姻への認識も様々な変化が見られる。従来のように結婚相手の人柄を重んじる人もいるし、相手の経済状況を重視する人もいる。特に漁村は沿海都市の近郊に位置する場合が多く、都市部の風潮に影響されやすい一面がある。

中国の婚姻に関する先行研究は多数あり、虞萍は婚姻の変化を考察し、都会と農村の婚姻の差異性を検討した[虞萍 2008]。松川昭子は婚姻の変化と結婚式の変容を時代に対応させて論じた[松川 2004]。しかし、これらの研究はいずれも都市と農村に焦点を当てた考察であり、漁村を研究対象の中心に取り扱ったものは未だない。中国では漁村は農村とは異なる特徴を持っているので、違う視座から考察するべきである。本節では、旅順周辺漁村のフェールドワークをもとにして、近年の漁村における婚姻態様の変化や結婚過程の変容などに関して考察する。また、漁村社会における女性の地位や女性の役割などに焦点をあて、婚姻変化の背景も究明したいと考えている。具体的には、遼寧半島のＴ村の実例を通して、漁村社会における婚姻変化の全貌を捉えようする。

1　結婚相手の選択標準

婚姻変化の中でも、結婚相手の選択基準の変化は一番顕著である。結婚相手を選ぶ基準は時代に応じて変化する。解放前の中国では家父長制が強く根付いていたので、男性が女性を選ぶ権利はあるが、女性はどこに嫁ぐか、誰と結婚するかを自分で決める権利がなかった。伝統的な社会では、婚姻の決定は父母の命令によって行われ、結婚前に男女双方が対面する機会のないことも多かった。聶莉莉は伝統的な東北部の農村では、嫁を選ぶ時の基準は次の４つであると論述している。第一は嫁を選ぶ時は嫁の家柄を考えなければならない。第二は「侍奉公婆」（夫の両親に仕えること）である。第三は「妯

娌和睦」（夫の兄弟の妻たちと睦まじいこと）である。第四は家事労働が上手いことである[聶莉莉 1992：76][21]。伝統社会では、女性の結婚はその配偶者に嫁ぐよりは、「家」に嫁ぐと言ったほうが適切かもしれない。女性は一旦結婚すると、終生その家にとどまらなければならない。夫を支え、子供を育てるだけでなく、夫の両親にも全力で奉仕することが「婦道」だと言われる。離婚は許されないので、女性の一生を運命に委ねるしか方法がなかったのである。それでも多くの女性はやはり結婚をきっかけにして、自分が貧しい生活から脱け出して、幸せな生活を手に入れようと願っていた。従って、結婚相手の家の経済状況が女性本人とその家族にとりわけ重視されていた。貧しい地域では妻を娶ることが難しい一面もあった。

筆者が調査したＴ村は昔は小さな漁村であった。村の老人の話によると、新中国成立以前、Ｔ村は隣接する村に行く道路さえも整備されていないし、交通が不便な所であった。他の村から嫁いできた嫁は非常に少なかったと言う。貧しい状況の中でＴ村に嫁いで来た人は、未亡人が大半を占めていたという。当時は貧しい生活をしていた漁民が嫁をもらうのは容易ではなかったのである。

新中国成立後の 1950 年代から、女性も人民公社の集団労働に参加したので男女交際の機会が増えた。解放以前は、婚姻は両親が取り決めたが、共産党が婚姻自主と男女平等などのスローガンを出したため、自由恋愛の場合も少なからず存在していた。しかし伝統的な観念がいきなり消滅することはなく、親の権限が相変わらず強かった。勿論、この時期、女性も自分の嫁ぎ先の希望や結婚相手の理想像はあったと思われるが、実際は自分の意思通りにはならなかった。なぜならこの時期の婚姻は当時の政治状況にかなり影響されていたからである。1953 年から始まった土地改革運動によって[22]、各家の財産を基準として、農民は地主、富農、上中農、中農、下中農、貧農、雇農などの階級に分けられた。いわゆる「成分」（階級区分）である。戸籍の「出身」欄に自分の「成分」を必ず記入しなければならないという決まりがあった。当時、Ｔ村は全部で 109 世帯があり、

[21]聶莉莉は中国東北農村の嫁を選ぶ時の基準に関して論じたが、旅順でもこの基準が適応できると考えている。

[22]中国共産党が 1947 年 9 月に全国土地会議を開催し、10 月 10 日に「土地法大綱」を公布し，解放区に関して土地を没収し、人頭割りでの均等配分を決めた。1949 年の解放以後全国に広がった。

地主は 1 戸、富農は 2 戸、上中農は 1 戸、中農は 10 戸、下中農は 10 戸、合わせて 24 戸、それ以外の 85 戸は全て貧農であった。地主、富農、上中農、中農の「成分」の人たちは一定の財産があるので、資本主義思想の持ち主だと思われていて、下中農や貧農を含む民衆に強く批判されていた。「成分」が下中農、貧農である人は自分の「成分」がいいので、誇りをもっていた。その反面、地主、富農、あるいは上中農、中農であれば、その本人および家族は周囲に批判されるので、生涯面目がたたず、自殺する人も少なくなかった。このような状況の中、結婚を利用して自分の「成分」を変えようとする人もいた。次に筆者が調査したＴ村の実例を挙げたい。

【事例１】R さん（1947 年旧暦 6 月 17 日生。女性）

結婚相手を選ぶ時に、両親に猛反対された。理由は T 村があまりにも貧しかったからである。同じ村の人と結婚したら、生涯にわたって苦しい生活を送ることになるだろうと彼女の両親は考えていた。また、相手の「成分」は貧農であったため、富農「成分」の彼女にふさわしくないと言われていた。彼女は両親の意見を受け入れず、自分のことを自分で決めようと決意した。その時ちょうど相手は村の青年団の書記を担当していたため、彼女は一日も早く青年団に入りたがった。両親の反対にかかわらず、青年団に入りたいという意思を強くアピールするために、彼女は毎日集団労働が終わった後に、「軍人家族」（息子が軍隊に属する家庭）の所に行って、家事や野良仕事などの手伝いをした。努力の結果、彼女はようやく青年団に入ることができた。青年団は共産党に付属し、向上心のある有望な若手を育成する組織である。村幹部は全て青年団から優秀な人材として選ばれる。青年団に入ることで自分も他の人と同じように優秀な青年だと評価されるのである。もし将来「成分」のいい家に嫁いだら、自分の未来はきっと幸せになると彼女は信じていた。彼女は五年後に両親に反対されたまま、相手と結婚することを決めた。結婚してからの二年間は実家に帰ることすらできなかったが、子供を出産した後で、母親が孫に会いたいという希望がきっかけとなって、時折は帰るようになった。このように「成分」は本人や家族だけではなく、子供の将来をも左右するものであった。

【事例２】Ｑさん(1950 年 3 月 28 日生。女性)

Ｒさんと同じような境遇であった。Ｑさんの出身「成分」は可もなく不可もない中農であった。彼女は自分の夢を持っていたので、若いうちに青年団に入団した。しかし、「成分」がそんなにいいとは言えない彼女は自分の将来のために、1972 年の春に黒龍江省のある軍隊に勤務する軍人と結婚することを決めた。勿論、彼女の婚姻は、両親も賛成してくれた。ところが、1984 年に彼女の夫が軍隊から退役したので、黒龍江省に残るか、彼女の実家に帰るか迷っていた。当時Ｔ村は生産請負制を実施したばかりの時期で、漁撈活動が非常に盛んであった。彼女は夫と相談した結果、Ｔ村に戻った。最初は村人との付合いが余りなかったので、すぐには馴染めなかったが、二、三年が経つと、徐々に村の生活に馴れてきた。数年前に彼女は村民委員会の幹事に選ばれ、自分の夢を長年かけて実現させた。

この二つの事例は出身「成分」によって人生の在り方が左右される実例である。通常は女性は「成分」の良い結婚相手と結婚したがる。事例１は低い「成分」の男性、事例２は高い「成分」の男性との婚姻で、時代の状況が感じられる。1970 年代から農村では「出身階層」による差別をなくす学習や教育などが行われてきたが、人々の「階級意識」は一朝一夕に変わるものではなかったのである。

先述したように、漁村女性は結婚相手を選ぶ場合、いつもその時代の動きに影響される。例えば 1950 年代から 1970 年代にかけて、軍人や労働者のように国から保障される職に就く人は、女性に好まれていた。特に 1960 年代後半から約 10 年間にわたって、「知識青年上山下郷運動」(高校を卒業した都市部の若者を農村や農場に行かせ、数年間肉体労働を体験させ、貧農や下層中農から道徳の教育を引き受けるという運動）が行われていたため、当時、都市部から下放された若者は滞在先の農村や漁村女性（或いは男性）と結婚した人も数多くいたのである。

1982 年から戸籍の「出身」欄がなくなった。これによって「成分」に左右される時代に終止符が打たれたことを意味した。1980 年代初めに生産請負制が農村および漁村で徐々に実施されるようになり、漁撈に携わる漁民たちは家族単位の漁撈活動が主流になってきた。そのおかげで、数年間で、漁撈によって生活を営む漁民の生活は日々豊かになり、貧困村のイメージも徐々に改善されるようになった。現在では漁家に嫁いでくる女性はＴ村の中だけではなく、近くの村から、あるいは旅順の周辺にまで広がった。Ｔ村の女性たちの結婚

相手の選択基準も少しずつ変わってきた。結婚相手の男性は人柄がどうであるか、よく働くかどうかが選択の重要な条件となってくる。勿論、多くの女性は男性の家が裕福かどうかを見ている。出身「成分」はもはや昔話となり、だんだん人々の記憶から消えていった。

婚姻状況は各時代に応じて変わってきた。時代ごとにまとめると次のようになる。

解放初期には昔の伝統思想や風習の影響で、婚姻は結婚当事者個人の問題ではなく、男性も女性も自分の意思通りに結婚相手を選ぶことはできず、親の取り決めによる婚姻いわゆる「包办婚姻」が主流であった。1950 年代に「男女平等」の呼びかけで、女性の社会進出がますます進んでいく中に自由恋愛が増えてきた。しかし、古い観念を一気に取り除くことができないため、親の取り決めによる結婚は相変わらず多かった。1960 年代から 70 年代にかけて、政治運動は婚姻にも暗い影を落とした。結婚相手の出身状況がいかなるかは重視され、結婚を通して自分の政治「身分」を変えようとする人が大勢いた。1980 年代になると、学歴や職業を重く見る傾向が見られ、結婚相手を選ぶ時の重要な判断材料とするのが一般的であった。1990 年代には、個人起業がブームになり、多くの女性が実業家への関心度を高めて、結婚相手の経済力を重んじるようになった。2000 年代に入ると、結婚後の住居を男性が用意してくれるかどうかを結婚相手の選択基準とするようになり、結婚相手の家柄や経済力にさらなる関心を寄せるようになった。結婚相手の選択基準はいつでも時代の息吹が反映されている。時には政治の色合いが強く、時には経済の色合いが濃厚である。政治運動や社会的な変動は人々の観念や追求する目標を変化させ、家族や婚姻のあり方に直接に影響を与えることが断片的にせよ理解できるであろう。

2　結婚式の変化

Ｔ村で調査を行った時、年配者から「今の若者は本当に幸せだね。結婚する時、何でも揃えるのよ。」とよく耳にした。確かに時代の変化に従って、結婚の過程や内容が大きく変わってくる。次に、婚姻の最も重要な部分である結婚式を取り上げて考察する。

伝統社会では「天地拝礼」は代表的な結婚の儀礼であった。この儀礼は、新郎新婦が親の前に跪いて祖先に対して拝礼し、次に、親に向かって拝礼し、最後に新郎新婦が互いに向き合って頭を下げる[松川 2004：62]。これは「三拝天地」とも呼ばれる。新郎新婦はそ

の前に一度も会ったことがなくても、「天地拝礼」の儀礼が行われると、結婚を覆すことができない運命となる。特に女性の方は結婚の誓いを破ったら本人の面目が立たないだけでなく、親にとっても一生の恥である。従って、多くの女性は生涯の間、どんな夫であっても我慢するしかなかった。「天地拝礼」の後には宴席が設けられるのが普通で、裕福な家にとっては、自分の経済情況を周囲の人々にアピールする最もいい機会でもある。

新中国成立後、土地改革、「破四旧」、大躍進、文化大革命などの政治運動が相次いで起った。運動が起こる度に、人々の考え方が変わるだけではなく、実際の生活にも大きな影響を与えた。改革開放前には、質素が美徳とされていたため、「集団結婚式」や「茶話会」が一時流行した。茶話会は元々はお茶を飲みながら世間話をする会であるが、1960 年代から 1970 年代には結婚式を茶話会の形で簡単に祝った。お菓子や果物、煙草などで参列者を歓待する形式である。また、「喜糖」（慶事の飴）とよばれる飴を新郎新婦が結婚式で花嫁が壇上に上がる時と同時に参列者に配り、「喜びを分かち合う」という意味合いをもっている[松川 2004：62]。現在は結婚式の祝いのお返しとして参列者に配る。後で新郎新婦が新居に入る時に配り、職場の同僚や隣人にも配る習慣がある。

1980 年代になると、人々の考え方が比較的自由になって、結婚を祝う宴席を設けず、挙式だけをして、その後に新郎新婦が国内旅行に出かける人が増えてきた。これを「旅行結婚」（新婚旅行）と呼ぶ。1990 年代後半になると、生活が豊かになってきたため、双方の家が一緒に披露宴を行った後に、新郎新婦が旅行に出かけるケースが一般的となった。最近では披露宴の後に、エジプトやシンガポールなど海外旅行に出るカップルも現れ始めた。

このように婚姻は各時代に応じて変わる。例えば解放初期には昔の伝統思想や風習の影響で、婚姻は結婚する当事者の問題ではなく、男性も女性も自分の意思通りに結婚相手を選ぶことはできず、親の取り決めによる婚姻、「包為婚姻」が主流であった。1950 年代に「男女平等」の呼びかけで、女性の社会進出が益々進んでいく中に自由恋愛が増えてきた。しかし、古い観念を一気に取り除くことができないため、親の取り決めによる結婚は相変わらず多かった。1960 年代から 70 年代にかけて、政治運動は婚姻にも暗い影を落とした。結婚相手の出身状況が重視され、結婚を通して自分の政治「身分」を変えようとする人が大勢いた。1980 年代には、学歴や職業を重く見

る傾向が見られ、結婚相手を選ぶ時に重要な判断材料となっていた。1990 年には、個人起業がブームになり、多くの女性は実業家への関心度を高めた。2000 年代に入ると結婚式の変化は新郎新婦の衣装にも表れた。1990 年代以前の結婚式では、新婦は主に赤い中国服やスーツなどの結婚衣装を着用していた。最近では欧米の習慣が中国に持ち込まれ、本来は漢族では葬送の色である白を使ったウェディングドレスを着ることが流行っていると言う[松川 2004:63]。しかし、漁村の人々は、白に対して抵抗感があるので、桃色や赤などのウェディングドレスを着るのが一般的である(写真 14　写真 15 参照)。

写真 14 赤いスーツの婚礼衣装

写真 15 ピンクのウェディングドレス

結婚式の変化は当日の宴会である「婚宴」からも見てとることができる。R さんが自分自身の「婚宴」と二人の息子の「婚宴」について話してくれた。彼女は 1971 年 11 月 30 日に結婚したが、結婚式は非常に質素で簡素だったと言う。結婚相手は同じ村の人であったため、彼女は徒歩で相手の家に出発した。家族や親戚、友人 20 人あまりが集まって、机を 3 個設けて、普通の食事会のような感じだったという。その日、参列者に出された料理は「六菜一湯」(おかずは 6 品、スープは一つ。結婚式には偶数は縁起が良い) と少しの「喜糖」であった。漁村なので料理に魚は欠かせない。彼女の結婚式に費やされた金額は 100 元にも満たなかった。20 年後の 1996 年に彼女の長男の結婚式が行われた時の「婚宴」の机は 13 個であった。参列者を招待する料理は「十二菜一湯」(おかずは 12 品、スープは一つ) であり、嫁を迎えに行く乗用車は 10 台も用意したと言う。この地域では息子が結婚する当日に姑が嫁に「圧腰銭」を渡さなければならないという習慣がある。「圧腰銭」とは嫁入りの時に渡すお金で、原則的には嫁は一生涯保存して使わないとされている。R さんは嫁に 600 元の「圧腰銭」を渡した。また、「釘門帘」の儀礼が行われ 100 元程度

かかった。「釘門帘」とは結婚の当日、嫁の兄弟が扉のカーテンにかける釘をとんとんと叩く習慣である。普通は前もって用意された斧や重りで叩く。これは新郎新婦が揺るぎなく白髪まで添い遂げるという意味である。彼女は長男の嫁に「釘門帘」などの儀礼の費用として 500 元あげたと言う。長男の結婚式に使われる総額は 15,000 元ぐらいであった。『中国統計年鑑』(1997 年)によれば、当時農民一人当たりの年間平均収入は 1926 元である。この地域は家族単位の漁撈活動を行ったため、収入が大幅に増えた。1998 年の調査によると T 村の一人当りの年間収入はすでに 6200 元に達した。長男の結婚式の費用の金額はかなりの額と言えよう。

その後、2003 年に次男の結婚式を行った。2000 年に入ってからは、家で行う結婚式はほとんどなくなり、ホテルやレストランで「婚宴」を行うようになった。しかし「圧腰銭」と「釘門帘」の風習は相変わらず残っている。R さんによると、「釘門帘」の金額は長男の時期と余り変わらなかったが、次男の嫁にあげた「圧腰銭」は 999 元であったという。漁村社会では「6」と「9」の数字が縁起の良い数字である。また、次男の結婚式では「婚宴」の机が 16 個設けられ、料理は「十六菜一湯」を用意したと言う。R さん自身の結婚式と二人の息子の結婚式の費用は桁が違うだけではなく、1970 年代から 2000 年代の間に、漁村社会がいかに変化したかが反映されている。

結婚式は時代の変化とともに変容している。披露宴に出される料理の数にとどまらず、新婦の衣装や結婚儀礼の種類なども多様に変化していることが明らかになった。

3　居住変化による婚姻変容

伝統的な中国社会では、「婚姻者,合二性之好,上以事祖宗,下以継後世」(婚姻とは男女が結ばれ祖先に仕え、子孫を後世に伝えることである)と記述されている。つまり、昔は女性が男の家に嫁いだら、そこを家とし、終生その家で「相夫教子,侍奉公婆」(夫を助け、子を育て、姑に奉仕する)といった婦道を尽くすべきで[蘇林　2005]、女性は一日も早くその家の習慣や家の掟を覚えて、常日頃は舅姑と仲良く過ごさなければならないのである。従って、結婚後、女性は常に姑の監視の下に置かれて、嫁としての修行が行われ、姑とその兄弟と同じ屋根で生活するのが一般的であった。解放後の 1950 年代以降は女性の社会進出に伴って、ある程度の自由と自己主張の権利を獲得するようになった。50 年代の後半から、経済的に少し余裕が

あれば、姑と別々の竈が設けられて、「分家」する事例が増えてきた。

Ｔ村では 50 年代までは「草房」が一般的であった。三間部屋の場合は中央の部屋は「堂屋」で、「灶」（竈）がこの部屋に設けられる。堂屋の両側の部屋はオンドル付きの寝室である。姑と嫁は同じ屋根の下で家事などを共にするので、嫁は見よう見まねで日ごろから姑の働き方や家事のやり方を覚えるようになった。結婚後は夫の家に住むのは漁村における主たる婚姻の様式であった。

60 年代になると、「草房」に代わって、「瓦房」に建て直されるようになった。「瓦房」と言っても、間取りは以前とあまり変わらない。この時期に女性の経済的な地位の上昇につれ、結婚して数年後には別の家に住む方式が流行し始めた。これによって女性の人格や考え方が益々尊重されるようになってきた。

80 年代は漁村の生産請負制の実施で漁民収入の増加が顕著に現れた。財布が膨らんできた漁民がまず考えたのが住居の改善であった。この時期に建てられる住宅は以前より面積が広く、間取りも大きく改善されていた。応接間は１室だが、姑と嫁の台所（竈）は別々に分けられる。日本の二世代住宅のように入口も２つ設けられている。この間取りは姑と嫁のもめごとを避けるように工夫されていた。

近年、中国では結婚するとすぐに独立したいと願う人が増えてきた。Ｔ村も同様で結婚する前に、新郎か新郎の両親が住宅を用意するのが一般的である。虞萍は都市部の女性を考察して、女性たちは軽率に「結婚したい」と願わず、「自分の家屋がほしい」[虞萍 2008：87]と主張し、住宅を買うことを結婚前の１つの過程と考える。漁家に嫁ぐ女性も同じ考え方を持っている。1990 年代になると、嫁に行く前に、男性側が自分たちの新居となる住宅を用意してくれないと婚約を破棄する人も現れてきた。

90 年代後半には、Ｔ村の住居はさらに大幅に変化して、二階建ての「楼房」が流行ってきた。そのために結婚するとすぐに独立し、舅姑からの干渉を受けたくないという風潮が広がっている。しかし、「楼房」とはいえ伝統的なオンドル付きの寝室も残されているし、若者が好きな洋室も揃えている。姑と嫁が一緒に住む場合もあるし、息子のために新居を準備する漁家もある。結婚前に新婚夫婦の住宅を用意してもらうことは、一昔前の人たちは想像もできなかった。

Ｔ村では「草房」、「瓦房」、「楼房」の３種類の住居はただ様式が異なるのではなく、居住者の婚姻の様式も違っていることが語られてきた。「草房」時代には息子が結婚すると、部屋を振り分け、姑と

嫁が一緒に生活するのが一般的であった。「瓦房」時代には姑と嫁が同じ屋根で暮らしているが、竈が別々に分けられ、分家が主流になってきた。「楼房」時代は、男性の両親は住宅を用意するのが当たり前になり、用意してくれないと、結婚に応じない女性が増えてきた。結婚しても姑と一緒に暮らしたくないという考え方を持っている女性が増加しつつある。「分家」という過程がなくなって、メカニズムが崩れ始めていることがうかがえる。

4　婚姻変化の要因

婚姻変化の要因は、時代に応じて、時代背景やきっかけがあるが、幾つかの要素が同時に絡んでいる可能性もある。ここでは婚姻変化に影響をもたらす基本要因を探りたい。

a　婚姻法の改定

中国の伝統社会では「男尊女卑」の家族観が人々の心に深く浸透していた。「養児防老」という言葉が示すように、男の子なら両親の老後の世話を任せられるのに対して、女の子は結婚したら、親元から離れてしまい、何の頼りにもならないという考え方である。このような認識を抜本的に改革するため、1950 年に新中国成立後初の「婚姻法」が公布された。この中に「男尊女卑・子女の利益を無視する封建主義の婚姻制度を廃止する」などの規定が定められている。つまり男女平等・婚姻自由の社会をつくりあげようという主旨である。「婚姻法」実施後、女性の社会進出に伴い、女性の社会的な地位は徐々に改善されたが、「大男子主義」などの古い観念が根強く残っているので、家族内の暴力や女子・児童への虐待事件が多発した。これに対して、1980 年「婚姻法」の修正案が出され、家庭内暴力への救急措置と法律責任に関して詳しく規定された。2001 年には 2 回目の改正が行われた。主な改正点は夫婦相互に信頼し、相互に尊重するといった内容が盛り込まれたことである。このように「婚姻法」によって、弱い立場に立たされてきた女性の権利はある程度保護されるようになった。「婚姻法」を通して、現代社会における家庭内の男女平等の基盤が築かれ、調和的な婚姻が保たれるようになったと考えられる。

b　女性地位の変化

婚姻変化の要因を探る場合に、時代に応じて女性の地位が変化した状況を見逃してはならない。解放前に中国では「男子有德便是才，女子无才便是德（男子徳あれば即ち才、女子才なければ即ち徳）」の

考え方は一般的であった。知識や才能がないのは女性の徳と見なされていたので、女性の文盲率は非常に高く、女性は世間のことには一切に関わらず、当然自分の婚姻を決める権利もなかったのである。

解放後、女性は男性と同様に社会に進出するようになった。特に人民公社時代に女性は積極的に生産労働に参加するように呼びかけられていた。女性の労働が高く評価されるにつれ、女性の社会地位の向上や家庭に対する支配権が得られるようになった。さらに 1978 年末に始まった経済改革開放が女性に労働の機会を与え、女性が参政や執政に積極的に取り組む環境が整えられてきた。女性の社会への進出や経済的な地位の上昇に伴って、夫婦関係は伝統社会の「男尊女卑」から、お互いに尊敬し信頼できる関係を築くようになり、農村でも労働と家事を平等に分担する家庭が増えてきた。確かに一部の地域では、生産請負制を実施したため、夫が出稼ぎに行く結果、夫婦間の所得格差が顕在化する傾向も見られる。ただし漁村では夫婦が一緒に漁撈活動を行う場合が多いため、魚の販売に従事する女性のほうが家の財政権を握っているのが一般的であった。このように女性の社会的な地位が確立された結果、従来の婚姻に関する価値観が時代に合致しなくなったのはいうまでもない。

結び

経済改革開放政策を実施した数十年の間に漁村社会には激しい変化が起こっていた。本節では主に家族の変容や婚姻の変化に関して論じたが、変化の諸相を通して、漁村社会に特有な特徴が少しずつ見えてきた。その内容を再度まとめると、次のように集約できる。

第一に漁村社会の変化は日常生活によく反映されている。変化は物質面に留まらず、余暇などの非物質的な活動にも見受けられる。一般に余暇社会では、経済的「豊かさ」よりも精神的「ゆとり」が重視され、経済活動よりも文化運動や社会活動が尊敬される[前田 1995：108]。現在漁村社会の生活は精神面を取り込み以前より充実した。

第二に漁村社会の変化は儀礼や祖先祭祀にその一端がうかがえる。漁村社会の儀礼は漁撈活動に深く関わることが明らかで、儀礼は漁村の人々にとっては欠かせないもので、精神的な支えともなっているといえる。龍王廟をめぐる儀礼の復活に顕著に表れている。

第三に漁村社会の変化は婚姻の変化と連動しており、結婚式のような形式だけの変化ではなく、時代に応じた人々の観念やイデオロ

ギーの変化も含む。結婚相手への選定基準の変化からはその時代の風潮や動向がどのように変化したのかを垣間見ることができる。

第四に漁村社会の変化は、婚姻の拠点となる住宅に顕著に表れている。「草房」の時代は姑と嫁が共同に生活し、嫁は姑の指示に従わなければならない。「瓦房」の時代は嫁が姑としばらく一緒に生活していて、その後、「分家」の手段を選ぶのが一般的である。「楼房」の時代は結婚する前に住宅を用意する過程を設定し、住宅は結婚する前の条件として求められてくる。住宅の変化からも婚姻の変化が読み取れる。

第五に漁村社会の変化は婚姻の変化に表れている。その要因としては、主に時代に伴う女性の地位の変化と「婚姻法」成立が及ぼした影響を見て取れた。経済の発展や法律の公布は婚姻の変化を促すものであったことがわかった。漁村では女性の地位の上昇が著しい。

以上、漁村の家族と婚姻の変化の諸相を概観してみた。漁村は社会の一部でしかないが、この変化の過程は中国社会全体の家族の様式や婚姻の結果と連動していることが明らかであり、事例研究を積み重ねることで、社会全体の動きとの連動や漁村特有の性格を見極めることが出来るようになるであろう。

第Ⅱ部　観光推進における外部からのインパクト

第４章　観光推進の拡大と歴史文化の再認識―旅順・大連との連関

はじめに

第Ⅰ部では旅順周辺における漁村の生業や社会生活の変容を検討したが、本章以後は2000年代に注目された漁村の「三漁問題」に対する改善策として期待される観光産業の推進状況について議論する。観光の研究は、「当該社会だけに視野を閉ざすことができず、それをとりまいているマクロな社会体系―都市、国家，……をつねにその視界にとりこまなくてはならない」[山下 1996:10]との指摘がある。地域社会の観光産業や観光文化の考察では、隣接する都会の観光実態を把握して、農山漁村の地域と都会との関連性を研究すべきである。従って、旅順周辺の漁村地域の観光振興に触れる前に、先ず、旅順・大連の都市での観光実態の考察を通じて、都会変化の動きが周辺の地域社会に及ぼした働きを少しずつ見ていくことにする。

1978年以後、中国の経済改革開放が計画的に実施され、1980年に深圳や珠海、汕頭、厦門などの都市、1984年にさらに大連、天津、上海など14の沿海都市が開放され、旅順はその30年後の2009年11月にようやく開放を迎え、中国沿海都市がすべて開放された。旅順の対外開放は、旅順及びその周辺地域の観光産業を発展させる契機と見なされ、観光産業の推進に拍車をかけた。旅順の観光推進はほかの地域より遅れをとったが、戦跡や記念碑などが数多く残されているため、「負の観光資源」が目立ち、他の地域と異なる特徴を有していることに注目したい。今まで主に「愛国教育基地」とされてきた旅順の観光産業で、今後のイノベーションが起こるか否かが、旅順周辺地域の新たな観光商品の創出に影響を及ぼすと考える。また旅順の表玄関といわれる大連は対外開放の先頭に立つ都市として、観光開発に多いに力を入れ、特色ある国際的な観光都市に発展させることに成功した。現在毎年数百万人のツーリストが訪れ、観光産業は市の経済発展の重要な柱として位置づけられている。大連を訪れる観光客がいかに旅順にも関心を寄せ、同地に長く滞在してもらうかは観光開発の一つの課題である。周辺地域の観光推進は、旅順に限定した場合のダーク・ツーリズムの単一志向性を中和する効果がある。ダーク・ツーリズムは1990年代にジョン・レノンとマルコム・

フォーリイが提唱した概念で[Lennon & Malcolm Foley 2000]、観光を「楽しい」「愉快」ものと考えるのではなく、「学びの手段」として捉え、「死」「悲しみ」「災害」などつらい体験をあえて観光の対象とする新しい観光のカテゴリーである。旅順の戦跡はダーク・ツーリズムの対象となる。しかし、それだけに限定することは観光開発としては大きな賭けである。そこで旅順と大連に加えて周辺地域を組み合わせる観光を構想する動きが生じている。旅順と周辺地域との相互の影響の可能性を考慮した上で、改めて漁村地域での観光文化の可能性や特徴を検討したい。

第１節　植民地遺構への再認識

大連や旅順には植民地時代の建物や広場、公園が沢山残されている。これらの遺構は現在では、主として観光資源として活用され、教育的、保護的、記念的な価値を重視して、地域の人々が歴史を再確認する「場」として機能している。

１　ポストコロニアルという概念

旅順とその周辺の観光化の考察にはポストコロニアルの観点が重要である。ポストコロニアルは「植民地時代以後」という意味だが、植民地主義時代の「前か後か」という時系列的な区分に着目するのではない。植民地主義の放棄が叫ばれて久しい現代においてもなお、その時代に構築された数々の有形無形の体系が持続、温存されていることも意味を問うという問題意識をいう[安村他編 2006：62]。現在でも植民地時代の建築や施設、道路を使用していることが多く、完全に植民地時代の前と切り離して考えることは難しい。従って、ポストコロニアルの概念を理解するには、単なる「植民地主義以後」に焦点を当てるのではなく、植民地時代の遺構が後の社会にいかに影響を与えているのか、或いは現代の社会に遺構がいかに持続的に利用されているかに注目すべきである。現在も感知できる植民地主義の「名残」を、当時からの連続性の中で理解し把握するのがポストコロニアル研究の基本である[安村他編 2006:62]。従って、植民地の歴史的経験が植民地支配の終了後も当該社会の人々の社会や生活、思考様式への影響や刻印を問い直すことになる[坂部 2008:3]。

２　植民地遺構の「歴史性」

現代社会では、植民地時代の遺構が観光資源として保存や整備の

対象となり、地域社会での重要な歴史遺産として位置づけられてきた。その結果、観光客は観光活動を通じて、今までに身に付いた歴史知識をさらに具現化し、観光という活動の中で、その地のかつての歴史を再認識する機会が得られるのである。観光客が植民地時代の遺構を訪れる動機は様々かもしれないが、その中で共有されているのは、遺構に刻まれている「歴史」である。その「歴史性」に多くの観光客の興味が注がれて、その地で消費される真正性に満ちた「歴史性」が顕在化する。

3　観光と植民地遺構の関係

遺構の場所を観光客が訪れることによって遺構が存続し、遺構が存続することによって観光客が訪れるといった、植民地主義時代の遺産と今日の観光現象のあいだに見られる「相互作用」の存在にも注目したいとの指摘がある[安村他編 2006：64]。このような「相互作用」を通して、植民地時代の遺構がその地の「魅力的」な場所や対象物として徐々に表象されるようになったのである。

しかし、植民地時代の遺構を保存する方法は極めて難しい。2002年に中国国家文物局で発効した「中国文物古跡保護準則」の中で、文物遺跡は保護、保全の対象と定められており、植民地時代の遺跡は当然文物遺跡のカテゴリーに入るべきものである。政府が文物遺跡を保護するようと呼び掛けるが、近年は都市ではビルティング建築などの開発に伴い、文物遺跡を取り壊す現象が多発しており[23]植民地時代の遺跡や遺構の観光資源としての利用価値は未だに十分に認識されていない。植民地時代の遺構の保護や整備は観光による経済的な利益を追求するのみではなく、保護・保全活動を通して、過去の歴史を直視して、植民地時代の歴史を現代社会と有機に結びつける手掛かりを得る機会にすることが望ましいと筆者は考える。

4　植民地時代の遺構への認識

王艶平は植民地時代の遺構が遺産として保護される過程は次の四つの段階になるという[王艶平 2008]。まず、反省と批判を通して歴史を正しく認識することは避けられない第一歩である。第二歩は、

---

[23]于躍洲は黒龍江省の事例を取り上げて、戦争遺跡の破壊およびその原因を詳しく考察した。破壊原因は歴史的要因、現実的要因と経済利益を追求する要因が挙げられる[于躍洲　2009]。

中日両国民が平和を求める段階である。第三歩は、戦争の陰影を歴史的に過去のものとして扱うことである。最後の第四歩は、歴史の中から重要なものを選択し、遺産として博物館や記念館に保存すべきであると指摘している（図 7)。

歴史を認め→平和を求め→歴史の先送り→遺産とする

図 7　［王艶平 2008］

植民地時代の遺構を重要な観光対象として取り入れる可能性が十分にある。遺構がその土地の独特な価値として認められ、観光化された成功例は沢山あり、上海の外灘やシンガポールのラッフルズホテルは代表的な事例である。この事例は、観光客がその地に訪れる価値を生み出すとともに、当該地域の観光資源としての利用価値を上昇させる可能性が大きいのである。ダーク・ツーリズムの対象とされる戦跡のワーテルローや旅順、戦争の記念物の原爆ドームやひめゆりの塔などと比べれば植民地時代の遺構は「悲惨さ」の感情は薄いが、過去の経験から「悲しみ」を想起する人もいるであろう。しかし、世間に一般的に認められる価値が見出されていることが何よりも重要であり、その価値が地域の表象として集積され、地域の「魅力のある」観光資源に生まれ変わることが期待されつつある。

第 2 節　政治主導期の集合的「記憶」

新中国成立後に、観光事業を担当する部門としては国際旅行社が中心的役割を果たした。その後、上海や広州など全国大都市に支社が設けられた。大連にも 1954 年に中国国際旅行社大連支社が設立された。中国国内では土地改革や、初級合作社、高級合作社などの組織の再編があり、大躍進（1958－1960)、文化大革命（1966－1976)などの政治運動が続き、国民生活に大きなダメージを与えていたため、観光は一般庶民の日常生活とは無縁で身近に感じられなかった。1978 年以前の中国において人々の観光とは革命記念館や烈士陵園[24]を訪問するか、幹部が会議や公務、療養などを名目にして風光明媚な場所を訪れる接待であった[長谷川 2001：112]。政治主導期には農業、工業、教育など各分野が「政治」を第一の理念とするので、観光はレジャーというよりは、愛国教育の手段としてよく利用され、

[24]烈士とは革命に命を捧げた人々である。

政治的な目標を達成するための補完的な役割が期待されていた。特に海外からの旅行者には警戒心を抱き、案内する場所も限られ、観光事業は国の対外看板として、社会主義イデオロギーを宣伝する窓口であった。高山陽子は観光対象を歴史的な正しさと政治的な正しさに分類されるとして、「政治的正しさ」を有している革命文化には、主に革命記念館や烈士陵園、交通博物館など愛国教育基地が該当すると指摘した[高山 2007]。確かに革命記念館や烈士陵園は政治的な正しさを反映する「正面」教材として知られている一方、植民地遺構のような負の側面を持つ「反面」的な教材もよく愛国主義教育に用いられ、政治的な正しさとは全く関連性のないものとはいえない。旅順には民族英雄を祀る烈士陵園もあるが、日清戦争や日露戦争の戦跡や遺構が最も特徴的であり、戦争に直接関わる遺構は現在殆ど博物館や記念碑などのコメモレイションの形で表象され、日本による植民地支配と解放戦争の記憶は、現在でも中国東北社会での集合的アイデンティティの基礎の一部を形成している[坂部 2008：139]。

旅順の戦跡や戦争の遺構は集合的記憶の表象として歴史的な変遷のもとで形成・維持されてきた。新中国建国後、旅順では「烈士墓」、「万忠墓」などの遺構を保存し、博物館を作って資料を展示するなど植民地遺構に関する整備が政府のプロジェクトとして進められてきた。万忠墓は日清戦争の旅順虐殺事件の遭難者の墓地で俗称は「万人坑」である。1948 年以降、旅順市政府は外来の侵略者に抵抗して殉死した将軍や兵士を祀る墓や記念碑を多く建てており、コメモレイションの象徴として機能している。

坂部は満州の植民地遺構を「烈士墓」の時代、「万人坑」の時代、博物館の時代の三つに分け、各時期は各々異なる特徴を持っていると論じた。「烈士墓」の時代は 1940 年代末～60 年代半ば、「万人坑」の時代は 1960 年代半ば～70 年代、「博物館」時代は 1980 年以降だという。旅順の場合も、「烈士墓」、「万忠墓」（万人坑）、「博物館」があるが、時間的区分がさほど明確でない。この三種類のコメモレイション施設はほぼ同時期に公開され、植民地支配による被害や戦争の凄惨さを強く表出する傾向が見てとれる（表 14）。他の地域と異なる旅順の独特な歴史的な背景にある。

旅順のコメモレイションの形成は主に 1948 年から 1955 年の間に集中している（表 14）。その背景には中国解放後、民族のナショナリズムの形成が国策として重視され、愛国主義教育は戦争に関わるコメモレイションによってそれを具現化しようとする政治的な意図

があるからである。

表 14　旅順での戦争に関わる記念物の一覧

	時　間	名　　称	内　　容
1	1948 年 12 月	万忠墓	1894 年の日清戦争時に亡くなった人々の墓碑で、「万忠墓」と刻んだ。1948 年に修復工事が行われた。
2	1949 年 9 月	解放記念塔	1949 年 9 月 8 日の旅順解放を記念するために建てられた。
3	1954 年 4 月	旅順博物館	1945 年 8 月ソ連に接収され、旅順東北文化博物館となった。1954 年 4 月、中国政府が旅順博物館に改称した。
4	1955 年 5 月	八一烈士陵園	1955 年 5 月にソ連軍烈士陵園の隣に建設した。1980 年 10 月に烈士金伯陽烈士の墓碑を建てた。
5	1971 年 7 月	日俄監獄博物館	1902 年帝政ロシアが建設し、1907 年日本が増設した。1945 年 8 月ソ連紅軍が解体した。1971 年 7 月に監獄の修復工事が完了した。

『旅順口区志』1999 により筆者が作成

ベネディクト・アンダーソンが指摘するように、近代のナショナリズムの形成は無名戦士の墓と墓碑から始まっている[アンダーソン 1983]。国家のために犠牲になった無数の無名な個々人の経験は「烈士墓」「万忠墓」「博物館」などのコメモレイションの施設に収斂され、後世に戦争の悲しさ、虚しさを伝え、戦争の具体的な出来事を集合的な記憶の物語として再構築したのである。また、旅順のコメモレイションの表象は、これらをめぐる祭典など儀礼を通じて重要な意味付けを与えられる。旅順ではコメモレイションの施設を公開するたびに、必ず祭典が行われ、新聞やニュースにも大きく取り上げられている。例えば、1948 年 12 月 10 日に旅順「万忠墓」の修復工事の祭典式が行われ、新聞に報道されただけではなく、旅順の大きな出来事として地方誌にも載せられた。森村は祭典式の働きについて次のように指摘している。祭典への参加は人々が共通して自己同一化しうる「過去」を創造し、同じ記憶を担い、同じ歴史を

共有する存在としてのアイデンティティを一時的にせよ付与する[森村 1999：226]。旅順の「集団的記憶」の象徴であるコメモレイションの施設は維持され、表象されている。旅順には日清戦争、日露戦争の戦跡や遺跡が多数あり、コメモレイションの施設と同様に歴史の語り手となる。特定のコメモレイションは、植民地支配を経験した旅順地域の人々にとっては植民地支配による巨大な被害を伝達、記憶する装置として可視化され、地域的アイデンティティの構築にも重要な役割を果たしている。

旅順の歴史の記憶は時間がたつとともに、当時のリアリティ性が薄れていくとはいえ、被植民者たちが共有する集合的記憶は、帝国主義的侵略とそれに対する民族的抵抗という一枚岩的な物語としてずっと語られてきた[坂部 2008：160]。旅順のコメモレイションの施設は過去の出来事を媒介として、歴史的な経験を人々の記憶として深く刻まれていいく装置として機能していくのである。

第３節　「観光資源」としての植民地遺構

ポストコロニアルの特徴の一つは歴史の「連続性」である。大連・旅順の観光推進は植民地時代の遺構をいかに利用するかにも影響される。時代の変化に伴い、植民地の「遺構」を見つめる視線も変わってきていると考えられ、現在大連・旅順に訪れるツーリストは日露戦争直後に訪れた人々とは心理的、感情的において時間的な「隔たり」があり、植民地時代の「遺構」に関する認識の変化も見られる。本節では先ず連続的な歴史の中に旅順・大連の植民地時代の「遺構」を観光資源としてどんな特徴を持っているのかを検討し、「観光資源」とされた植民地遺構を今後いかにバランスよく統合し、整備するか、その方法を模索する必要があると考えている。

１　観光化された愛国教育基地―旅順

旅順は「中国近代史の半分」といわれるように、数多くの戦跡や遺跡にこの地域の特徴が描かれている。前節ではコメモレイションの典型的なパターン「烈士墓」、「万忠墓」（万人坑）、「博物館」について検討したが、旅順の植民地遺構はすべてこのかたちに当てはまるとは限らない。于躍洲は植民地遺構の種類を明確に反映させるために、植民地遺構本来の用途による分類を試みた。第一は戦跡または戦争に用いられる遺跡や遺構、第二は植民侵略者が植民地に住んでいた建築遺跡や遺構、第三は地元民が侵略者への抵抗を示す、生

活の遺跡や遺構である[于躍洲 2009：197]。旅順は日清戦争と日露戦争の戦場であったので、戦跡に関わる遺構が多かった（表 15)。植民地時代に建てられた建築は言わずもがなで、地元民の侵略者への抵抗を象徴する烈士陵園もある(表 15)。これらの戦跡や遺跡は、新中国建国後、「集合的記憶」として伝達され、社会主義イデオロギーの宣伝、発揚にその重要性が位置づけられてきた。勿論、植民地遺構が「集合的記憶」として顕彰されたのは偶然のことではなく、そこにまつわる歴史の連続性が広く受容されてきたからである。一方、石田は「集合的記憶」が可塑性を持つと指摘するように、「集合的記憶」はある集団の組織を通して作り出されたものであり、その記憶の定着は徐々に強化される一面もある[石田 2000]。従って、新中国建国後、旅順の植民地遺構が「集合的記憶」の象徴としていかに宣伝され、いかに受容されたのかをさらに探る必要があると考えている。その受容の過程について以下の 3 点を指摘できる。

表 15　観光化された愛国教育基地

種類	名　　称	内　　容
戦争にかかわる戦跡	203 高地	1904 年に日本軍がロシア軍から奪還し、港を監視出来た軍事的要所である。
	水師営会見所	1905 年 1 月 15 日日露戦争の終戦後の 1905 年 1 月 15 日に日本とロシアが終戦に調印した場所である。
	日俄監獄博物館	ロシア軍が 1902 年に建設し、1907 年から日本軍が拡大工事をした。朝鮮民族義士の安重根もここで処刑された。
	東鶏冠山	1898 年にロシア軍が陸地を強化するために建設した軍事施設である。
	白玉山塔	旅順の白玉山の上に位置し、1909 年 11 月に完成した。当時は「表忠塔」と呼ばれていた。
	電岩砲台	清末に造られ、ロシアにより整備された。
	関東軍司令部	旅順太陽溝に位置し、1905 年に日本関東軍都督府陸軍部所在地であり、1919 年に関東軍司令部に改名された。
植民地時代に建設	旅順博物館	1917 年日本が帝政ロシア時代に建てられた将校集会所を改造し、「関東都督府満蒙物産館」に改称。1954 年中国政府が「旅順博物館」に改名した。

	大和（旅順）ホテル	旅順文化路に位置し、1931年9.18事件後、満州皇帝溥儀が105日間滞在した。
	旅順駅（汽車）	1903年に開業、1945年日本の敗戦により、ソ連軍が旅順駅を接収、中ソにて共同運営を開始する。1952年12月に中国政府の管理下に移管する。
	関東州庁旧址	帝政ロシアにより建設、1907年に日本に占領され関東都督府が設けられ、1934年に関東州庁と改称された。
地元民の犠牲者を記念する施設	万忠墓	1894年の日清戦争時に旅順大虐殺による遭難者の墓碑が建てられ、碑に「万忠墓」と刻まれている。1948年に万忠墓の修復工事が行われた。
	八一烈士陵園	1955年5月にソ連軍烈士陵園の隣に八一烈士陵園が建設された。中には烈士金伯陽烈士の墓碑が建てられている。
	金伯陽公園	1996年に造園。1997年7月1日に旅順政府が金伯陽烈士銅像の除幕式が行われた。

『旅順口区志』1999により筆者が作成

a　旅順の植民地遺構は、戦後、イデオロギーの構築や「愛国主義」教育の基地としての位置づけが明確であった。「集合的記憶」を作り出し、伝達・維持するために教育が果たす役割は、極めて大きい[25]。植民地遺構の「集合的記憶」は1950年代頃から植民地遺構の整備が進められると共に、植民地遺構への見学を学校教育の一環として取り入れるようになった。毎年、小・中・高等学校の見学旅行が行われ、烈士陵園や戦跡など植民地遺構を訪れて、歴史に関する価値の

[25]日本は満州旅行を国策として組織的に行った。最初は一般的な旅行で、その後は満州の修学旅行に拡大した。文部省は満州の修学旅行を積極的に推進し、学生の応募状況は随時に各新聞に取り上げられ、急速に日本全土に広まった。満洲旅行は旅行参加者だけでなく、大勢の日本人に、日露戦争に勝って高揚したナショナリズムをより強く意識させた。満洲旅行は当時の日本社会に広範囲に浸透し、組織化された旅行となった。日清・日露戦争の戦跡は、過去の栄光を懐旧する地であると同時に、日本が自己の勢力圏として拡大しつつある土地、膨張の最前線の様相を後世に伝える意図が読み取れる[有山 2002:45]。

共有が再確認されていった。植民地遺構の見学で、教科書で学んだ歴史知識が視覚化され、「集合的記憶」の形成を通じて、愛国心育成の役割を果たすことが期待された[石田 2000：273]。植民地遺構が歴史教育の構築に与えた働きは見落としてはならないし、教育が植民地遺構を「集合的記憶」に回収する役目は否定できないであろう。

b　植民地遺構の「集合的記憶」の形成にはマス・メディアの役割も無視できない。マス・メディアは「記憶の共同体」の強化の機能を果たし、集合的記憶の表象に有効な手段として注目されつつある。日露戦争後、日本は帝国のナショナリズムを高揚するために、満州への旅行を大がかりに推進した。最初の企画は旅行会社ではなく、朝日新聞社や読売新聞社などマス・メディアであった[26]。当時日本のマス・メディアは旅順という苦戦の跡を、単に軍事上の要所として捉えるのではなく、国民教育の道場として活用できる可能性が示されている[高媛 2008:209－210]。有山は情報メディアは国民に「国家」という共同性を実感させたと指摘した。国家への所属意識、国民の集団意識を強化させる役割をメディアは担っている。中国でも旅順の植民地遺構が「集合的記憶」として定着する過程では、メディアの影響力が大きい。例えば、1955 年 2 月 23 日旅順博物館の前で中ソ友誼記念塔の定礎式があげられ、当時の副総理の彭徳懐と賀龍、中ソ友好協会会長の宋慶齢など錚々たる要人が出席したことが大連日報などの新聞で大きく報じられた[『旅順口区志』1999]。著名人の来訪の報道は過去の歴史を蘇らせ、人々の間に連帯感を作り出す契機となった。マス・メディアは教育と並んで現代の大衆社会では集合的記憶の形成に重要な役割を果たした[石田 2000：274]。

---

[26]日露戦争後、日本では満州や朝鮮半島への旅行が帝国意識の確立の手段として大がかりに宣伝された。最初は 1906 年 6 月 22 日の「朝日新聞」に「空前の壮挙（満韓巡遊船の発向）」と題する大見出しがつけられ、満洲と韓半島への団体旅行募集が行われた。満韓巡遊旅行は日本最初の海外パック旅行で[有山 2002：22]、予想以上の大反響が引き起され、募集の数日後に直ちに満員となった。満韓巡遊船は約三十日の旅程で乗船料金は甲乙丙丁の四つのランクが設けられ、甲は 60 円、丁は 18 円であった[有山 2002：40]。値段に三倍位の差があり富裕層から一般庶民まで広範囲の募集をした。満韓旅行は大きなブームを呼び起こし、参加者の満韓への強い関心は広く社会に共有された[有山 2002:33]。海外旅行の大衆化への第一歩であった。

c　旅順の植民地遺構が「集合的記憶」として表象され続けたのは観光政策と関連している。1994 年に中国共産党中央宣伝部は「愛国主義教育実施綱要」を公布し、祖国を愛することが国民の義務とされ、「愛国主義教育」が制度化されて国策となった。その後、1997 年、2001 年、2005 年、2009 年の 4 回に分けて、「愛国主義教育模範基地」が公表された。革命の聖地、民族の伝統文化、帝国主義侵略への抵抗などに関する有名な場所が含まれる。旅順では「旅順万忠墓記念館」（1997 年公布）と「旅順日ロ監獄旧址博物館」（2005 年公布）が「愛国主義教育模範基地」に選ばれた。旅順の「愛国主義教育」の展開は全国の動きと連動して、知名度が一層高まってきた。2005 年の観光年の主題は「赤いツーリズム」（紅色旅游）と定められ、「愛国主義教育」は観光推進に結びつけられた。「赤」は、プロレタリア革命、共産主義、社会主義的なイデオロギーを象徴する色として知られている[高媛 2002：47]。そこで、毛沢東の生家のような革命の聖地をはじめ、歴史伝統文化や植民地時代の遺構なども「赤いツーリズム」の観光対象となった。植民地遺構が観光の「商品化」にされて「集合的記憶」は従来の政治的巡礼や学校教育などの形式から、観光を媒介するナショナリズムへの再構築にシフトしてきた。植民地遺構は観光資源として新しい価値を生み出す可能性がある。ツーリズムは所与のナショナリズムを浸透させる装置ではなく、国家権力と観光市場との多様な交渉(negotiation)を通じて、ナショナリズムの創出、変形、溶解を含む多様な政治的実践を生み出す場で[高媛 2002：45]、観光化された植民地遺構は政治と観光を織込んだ空間の中でナショナリズムを強化し新しい形で促進した。

旅順の植民地遺構は政治主導期を経て、現在では重要な観光文化資源として扱われるようになったが、ここ数十年の間に、植民地遺構の政治的な働きは多少の変異があるとしても、「集団的記憶」への表象やナショナリズムの構築などに果たす役割は全く変わりがない。これはおそらく統治の正統性の確保という政治的意図を実現する場として位置づけられたからである[永渕 1996：35]。しかし、観光推進においては政治的な一面を強調しすぎると観光文化創出の妨げになる可能性がある。旅順の観光を考える時には、国家、民族、ポストコロニアル、歴史の構築にかかわる政治的要素を見落としてはならないが、観光の主体である旅行者が求めるのは「変化の経験」であり[山下 1996：8]、戦跡など植民地遺構を主とする観光資源だけでなく、魅力的な観光資源を新たに切り開く必要があった。旅順の

観光は、「負」のイメージが強く、観光客に悲しみやネガティブな体験を与えていた。この結果、旅順では「観光客の高い関心と低いリピート率」という捻れた現象[李・謝 2009：45]が起こった。この現象を一日も早く改善しなければ、旅順の観光推進はうまくいかない可能性があるので、観光資源を複合化、多様化するために、植民地遺構以外に、沿海の自然景観や地域社会の伝統文化も観光資源として取り入れ、「負の観光資源」と「正の観光資源」を組み合わせるべきであるという考えが生まれてきた（図 8)。要するに、旅順周辺地域に眠っている観光資源を掘り起し、「独自性」のある観光商品を数多く生み出すことが何よりも重要とされたのである（第 6 章、第 7 章、第 8 章で詳論)。

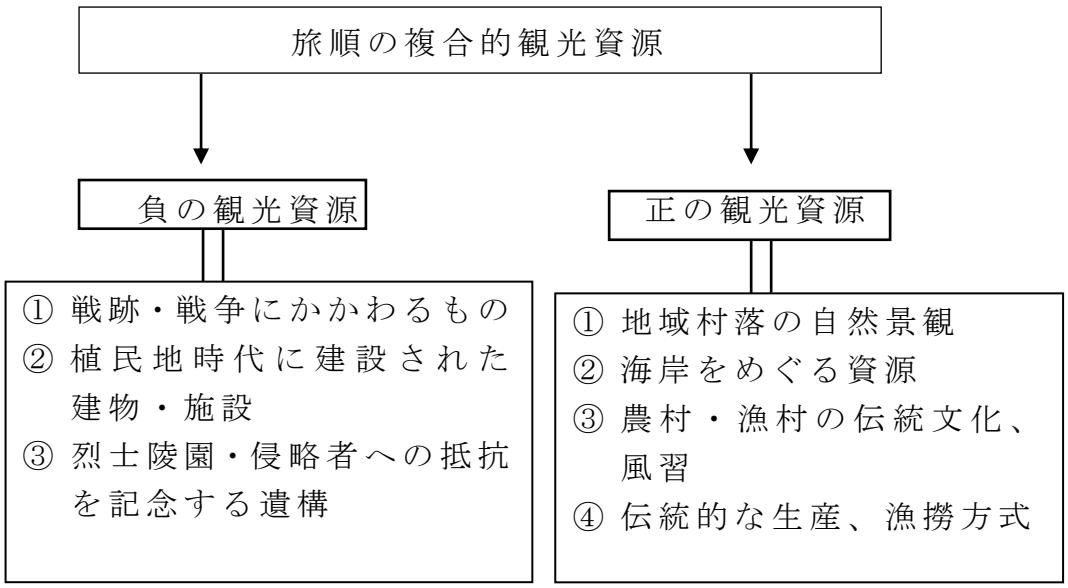


図 8　旅順の複合的観光資源の構想図

2　観光の拡大による地域活性化―大連

大連と旅順はどちらも日露戦争の被害を受けた場所として有名である。しかし、大連の植民地遺構は旅順と異なる特徴が見られる。大連は直接の戦場ではなかったために、戦跡のような植民地遺構より、植民地時代に造られた建物や広場が多く残されていることが特徴である。例えば中山広場近くには日本植民地時代に建てられた「大和ホテル」があり、西南の海辺には星ヶ浦公園、ロシア時代に造られた「ロシア街」など、すべて植民地時代から遺存されている施設である（表 16)。これらの植民地遺構は現在殆ど修復あるいは拡張

工事を施され、観光地としての利用価値が注目されてきた。

表 16　大連の植民地遺構

名　　称	内　　容
中山広場	ロシアが建設し、帝政ロシア時代に「二コラヤフ広場」、日本時代には「大広場」と呼ばれた。
ロシア風情町	ロシア植民地時代に造られた町で、2000 年に新ためて修復された。
大和ホテル	1909 年の施行から 5 年の歳月をかけて建てられ、南満州鉄道[株]が経営していた高級ホテルで現在も使われている。
日本人南山風情町	日本植民地時代の日本人住宅街である。
星ヶ浦公園	1909 年に 人工海岸の星ヶ浦として造営され、総合リゾート地のひとつである。
大連駅	1903 年に建てられ、1937 年に新駅舎が落成した。

筆者が現地の情報により作成

大連は中国改革開放後､最初に開放された 14 個の沿海都市の一つで、都市の交通整備やインフラの建設が急速に進められ、経済の発展が急成長を遂げた。大連は「北方香港」と呼ばれるように北方地域の夏の避暑地、観光地として広く知られている。改革開放後は大連市政府は観光産業を推進するため「ロマンチックな都」というキャッチコピーを打ち出し、地域イメージづくりに力点を置いた。特に 1980 年以来、当市は「観光資源開発十ヶ年計画（草案)」を制定し、観光資源開発指導小組を設置して、単純な接待でなく、接待と観光資源の開発の同時進行に転換した[董志正編 1988：515]。つまり、観光推進を物見遊山に留めず、観光商品の開発にも力を入れたのである。その結果、大連政府は植民地遺構以外に、様々な観光スポットを新たに作り出した。例えば大連老虎灘海洋公園や金石灘観光リゾートや白雲山荘公園など新しい観光地が次から次へと建設された。現在の大連には植民地時代に造られた建築や広場や公園などの歴史的文化遺産が点在する一方、新しく造りあげたロマンチックな観光スポットが出来て人気を集めている。ジョン・アーリは観光地の特徴に関して以下のように指摘した。観光地は三つの二項的対

立に基づき、①観光地がロマン主義的まなざしの対象であるか、集合的まなざしの対象であるか、②歴史的であるか現代のものであるか、③〈本物〉（真正）であるか〈まがい物〉であるか、に分けられる[アーリ 1995：186]。この分類は全ての観光地の特徴に当てはまるとはいい難いが、大連のような複合的観光資源が備えている地域の差異性は、この分類によってある程度は浮き彫りにすることが出来る。大連の観光資源の特徴をあえて言えば、歴史的かつ現代的な物が共存しつつ融合している中で、ロマン主義的まなざしの観光対象を中心的なものとする。真正性(authenticity)については植民地遺構の継続性を重視すれば「本物」であり、この観点を中軸にすえる観光を展開しようとしている。

大連の観光資源の歴史性とロマンチック性が観光産業を通じて商品化されることで、内外の観光客に魅力を感じさせたのであろう。特に近年外国の観光者数は年々に増えている。1984 年大連が開放されたばかりの頃、同地を訪れる外国人観光者数は 1.6 万人[27]であったが、30 年後には、128.8 万人の大台を突破し、約 80 倍以上に増加した。その中では日本人が最も多く、次はロシア人、韓国人の順であった。アジア諸国からの観光者数が多いことは大連の観光資源の中に植民地遺構の歴史的な連続性があるからであろう。場所が持つる「旧植民地」という歴史性に観光客の関心が集まった。ジャルパックの宣伝パンフレットには､「旧時代の街並みに郷愁とロマン漂う大陸の街。今世紀前半の重厚な建造物と街並みに、かつての大陸の面影を感じる大連の大広場。人々のやさしさに感激するノスタルジックな港町」とある。現在の風景がかつての満州への記憶を浮上させたのである。大連の観光の根底にはノスタルジーやエキゾティシズムがある[荒川 2001:13]ことが統計からも新た推定できる(表 17)。

大連の観光資源のロマンチック性は旧植民地時代の遺構のみならず、現代でも地域資源を中心とする観光対象に見られる。大連には長い海岸線があり、以前は主に漁港、商港として利用され、観光資源としての価値は十分見出されなかった。改革開放後、観光産業の推進とともに、海浜リゾートの建設が大規模に進められた。最も有

[27]『大連・解放四十年史』（1988）によれば、1982 年の外国人観光客は 1 万人の大台を突破し、83 年には 1 万 5 千人、84 年には 1 万 6 千人に増加した。1984 年の国内観光客数は延べ 200 万人であった。

名なのは大連金石灘観光リゾートや棒槌島リゾート及び老虎灘海洋公園などで、リゾート地はすべて海辺にあり、海岸の景色や海水浴が内陸からの観光客にとっては魅力に富むと感じられるのである。

表 17　外国人観光者数及び外貨収入

年　　次	国際観光収入［単位：万ドル］	外国人観光者数［万人］	日本人観光者数［万人］
2005 年	40,000	52.5	30.3
2006 年	46,500	61.6	34.4
2007 年	58,100	75.0	41.1
2008 年	65,835	85.6	46.8
2009 年	72,748	94.7	51.6
2010 年	80,386	104.7	56.0
2011 年	81,000	117	51.5
2012 年	？	128.8	？

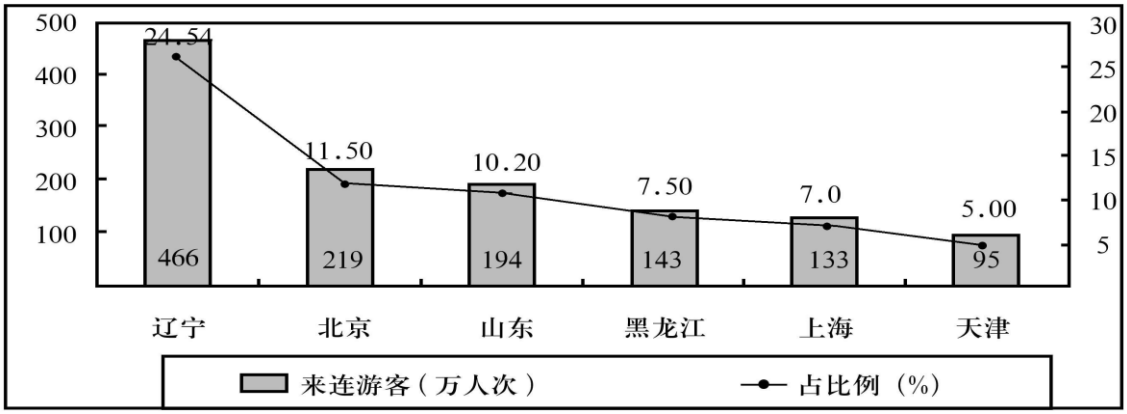
出典：『大連統計年鑑』（2006 年～2012 年）

ジョン・アーリは十八世紀末から十九世紀初頭の英国の大衆観光とロマン主義の関係を論じる際に、ロマン主義の効能は、人は誰でも自然界に対して感動できるのだという暗示を与えればよいと述べる。「風景は喜びをもってまなざしをむけることができる〈何ものか〉であるという暗示を与えたことである。……ロマン主義のおかげで『物見遊山』が発展しただけでなく海岸線の延長のすばらしさの観賞も進歩した」とした[アーリ 1995：36 - 37]。大連の観光は当時の英国と同じく、長い海岸線が地域の「個性」を演出し、そのロマンチック性が大連の観光促進の力になると大いに期待された。特に近年大連を訪れる観光客は外国人よりも国内観光客の伸びが顕著で、大衆的なレクリエーションの需要が飛躍的に増加した。2012 年に大連に訪れた観光者は 4943.1 万人であったが、そのうち、国内観光者は 4814.48 万人であった[28]。地域別にみると、遼寧省、北京市が最も多く、観光者数の 30%以上を占めていた（図 9）。こういった国内

[28] 大連海島旅游ウェブサイト http://yiriyou.0411hd.com に拠る。最終アクセス：2013 年 12 月 30 日。

観光客の増加は大連の観光市場成長の牽引力となっている。

図 9　2005 年大連市国内観光客の主要地域分布図及びその比例



出典：[羅光華 2008]

一方、東北や内陸からの観光客が多いことには、経済成長による国民の可処分収入の増加や休暇制度改革の影響がある。また、大連海浜の景色や海水浴を最も魅力的と感じさせて、観光に出かける直接な動機となっていると考えられる。大連の観光資源には、植民地時代の遺構と、海浜などの自然景観があるが、これらの既存の資源を有効に利用するだけでなく、観光者の多様な志向に応じて、1990 年代には地域に固有の生活文化やそれを基盤にした民俗や伝統を求める観光活動の開発も進められ、地域文化の創出に活発に取り組んできた。年中行事がイベントに活用され（表18)、「民俗観光節」と呼ばれ、日常生活の中に浸透するようになった[周作明2011]。観光行事は本来は民間で行われるのが一般であったが、「民俗観光節」は観光を沸き立たせる宣伝効果があるので、徐々に政府主導の下で行われるようになった[周2011：188]。

毎年大連では「民俗観光節」の期間中に、観光イベントが開催され、伝統文化を宣伝する場として重視されてきた。民間の年中行事の「年」「節」「会」にあたる行事は、観光イベントに接合させられて巨大化した（表18)。民俗文化を中心とした地域観光を地域の「魅力づくり」とすることへの大きな期待感が寄せられている。

表 18　大連の観光推進の年間行事

日付	テーマ	内容
2011 年 4 月	大連国際桜花節（第 3 届）	2011 年 4 月 26 日に大連医科大学で開幕式が行われていた。
2011 年 5 月	大連国際マラソン大会（第 9 届）	2011 年 5 月 21～22 に星海公園で開催された。
2011 年 5 月	大連槐樹観賞会（第 22 届）	2011 年 5 月 25 日に老虎灘漁人港で行われた。
2011 年 6 月	大連国際さくらんぼ節	2011 年 6 月 6 日金州新区で開幕式が開催され、旅順などにも会場が設けられた。
2011 年 8 月	大連国際砂浜節	2004 年 7 月 24 日～8 月 28 まで砂浜節と指定されたが、2011 年は 5 月 26 日～8 月 20 に拡大した。
2011 年 9 月	大連旅順美食文化節（第 3 届）	2011 年 9 月 13 日旅順大華商店街で開催された。
2011 年 9 月	大連国際ファッション節（第 22 届）	2011 年 9 月 3 日～8 日に行われた。

出典：大連観光ウェブサイト[http://yiriyou.0411hd.com]

大連観光の推進に伴い、観光のジャンルが伝統的な「物見遊山」から温泉旅行、潮干狩りツアー、さくらんぼ狩りツアー、食の旅、医療観光など様々な種類の観光スタイルに生まれ変わった。これは土地に根差した豊富な観光資源があって多様な変容が可能になったからだと考えられる。大連の観光拡大は当然その周辺地域にも影響を与え、観光の経済的な波及効果が大きい。大連の観光拡大は 2009 年全面に開放された旅順には絶好の機会であるが、大連と旅順の連続性の強化をどのように行うのか、各々の地域に特色ある観光資源の発掘を如何に推進するかなど直面の課題も抱えている。

結び

中国の観光産業の展開は南方の経済発展地域のみならず、北方地域にもその効果が現れつつある。観光推進にあたって南と北はそれぞれ全く異なる特徴がみられる。南方の沿海地域は経済発展が進ん

でおり、観光地として市場性が高いが、交流性は低いのに対し、北方の東北地区は市場性が低いが交流性が高い。観光の効果を考える場合、その交流性を重視すべきである。人口が多く、歴史的に日本との関係が深くて長い東北地区は､最良の観光地と評価されてきた。特に遼寧省は適地との指摘がある[王艶平 2008：9]。東北地方では観光の適地として最も相応しいのは大連である。大連は対外開放の先頭に立つ都市として、観光を中心とする都市の開発に大いに力を入れたので、特色のある国際的な観光都市に変貌した。一方、旅順は対外開放が遅れたために、観光産業の推進はまだ模索し続けている段階である。植民地遺跡を巡る観光を考える場合、未来志向に基づく取り組みが必要であるが、植民地遺跡の「歴史性」と現代の観光開発をいかに調和させるかは当該地域の観光推進の成否にもかかわる問題である。従って、植民地であった旅順が今後植民地遺構をいかに保存し、利用するかは極めて重要なことであるし、旅順がその周辺地域と連携して観光を共同開発する必要性にも迫られてきた。農山漁村の風景や海浜の自然景観及び民俗的な生活風習、民間信仰など、視点を変えることで多様な観光資源を見つけ、それらを上手く活用することで観光を成り立たせることができる[堂下 2008：91]。観光の関係者は、旅順及びその周辺地域には景観や環境、伝統や風習など様々な観光資源があり、まだ探り続ける余地があると考えている。

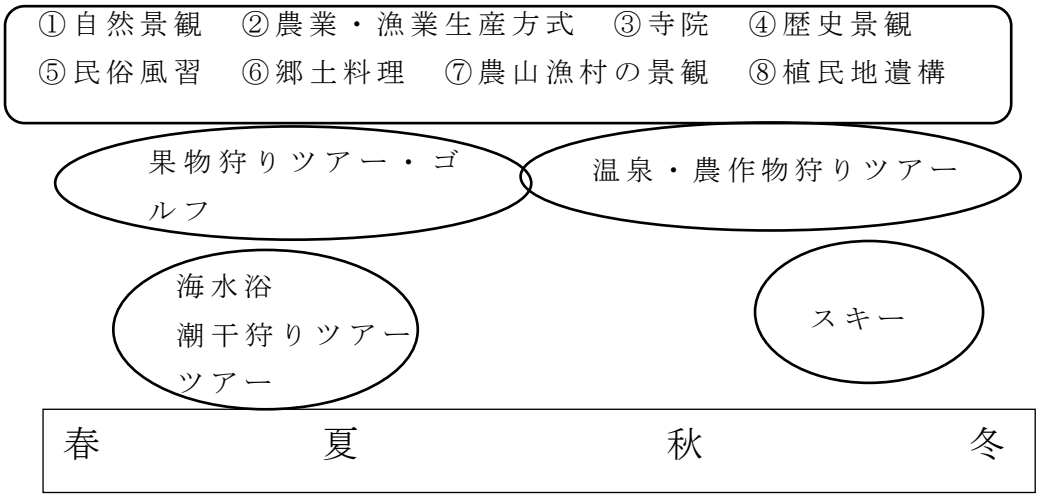


図 10 大連・旅順利用可能の観光資

今後大連と旅順に連続性のある観光資源を生み出すために、観光客のニーズに合わせ付加価値の高い観光ルートを開発することが画

策されていて、大連と旅順の利用可能の観光資源が提示されている（図 10)。現在、大連の周辺には、安波温泉スキー場、林海スキー場、銘湖国際温泉スキー場、歓楽雪世界スキー場の４つのスキー場があり、安波温泉、老鉄山温泉、竜門湯温泉、大黒山温泉、開発区温泉の五つの温泉がある。温泉とスキーといったレジャーの多様化は冬季における観光客の落ち込みへの挽回策として期待されているが、旅順にはレクリエーション観光施設がまだ充実しているとはいえない。

観光業者は、今後大連に訪れる観光客に対して旅順にも興味を持たせるような多効能の観光施設の建設や多様な観光ルートの織り込みが必要であり、四季を通して観光客のニーズに即した観光環境を提供するべきであると考えている。こういった新しい観光スポットの発掘は旅順の周辺地域に斬新な展開をもたらす可能性がある。ただし、現在のところは旅順とその周辺をめぐる観光は試行錯誤の段階にあり、大連との有機的なつながりの確立は今後の課題である。

第５章　郷村観光と文化の創出―外部社会との交流

はじめ

中国の観光は改革開放以後に、飛躍的に成長を遂げた。特に 2001 年に世界貿易機関（WTO）への加盟を契機に、国民の収入が以前より大幅に増え、ライフスタイルの変化も見せてきた。生活スタイルの変化は国民の消費意識の変化に遡る。以前はテレビや冷蔵庫など物質を追求するのが一般的であったが、収入の増加や長期休暇制度の導入などに伴い、精神的な「癒し」を求め、余暇生活の充実への期待が高まってきた。このような背景に、今までイデオロギー強化と外交の補助手段として位置づけられていた観光が新たに注目されるようになった[韓敏 2007：59]。観光は国民の間で大反響を引き起こし、人々のライフスタイルに占めたウエイトも大きくなってきた。「無烟産業」(煙の出ない産業）といわれる観光は第三次産業として全国的に展開し、その経済的な効果も注目されつつある。

観光産業の振興に当たっては、いかなる観光政策を推進するのかの決定がきわめて重要である。経済の改革開放の実施以後、1980 年代は観光は未だ十分に発展していなかったが、1992 年から中国政府は観光を大がかりに推進するために、毎年特定なテーマを定め、大規模な観光プロモーションを展開し､それによって様相が変化した。これがきっかけで、中国情勢に相応しい様々な観光形態が誕生してきた。エスニック・ツーリズム、「赤いツーリズム」、文化遺産旧跡観光、生態環境保護観光、宗教文化観光、郷村観光などがあげられる。各観光形態が単独に推進される地域もあるが、同じ地域では数種類の観光形態が絡み合いながら、同時に推進される地域も数多くある。本章では経済発展の恩恵を受けるのが遅かった旅順周辺の漁村地域が新しい観光形態である｢郷村観光｣をいかに推進したのか、また外部社会にどのように影響されたのかを検討し､「郷村観光」の特徴及び種類などを明らかにした上で、農村地域の既存の伝統文化を観光資源として活用する可能性を提示したいと考えている。

第１節　　郷村観光推進の背景

19 世紀末頃から､欧米主要国では鉄道などの交通手段の発達をもたらすとともに観光客を積極的に受け入れ、その消費を通して外貨の獲得を目指した政策をとるようになった。これを契機に、世界各国では観光を新しい産業として様々な政策を施し、経済の復興の手

段として活用されていた。戦後、日本はまず外国客誘致政策から観光政策を開始するが、高度経済成長と共に拡大した国民の観光需要を受けて、各省庁が観光政策に関心を寄せ始め、地域開発にも活用されて大きな成果をあげてきたと前田勇は指摘する[前田 1995：39]。日本を含め先進国の事例を見ていくと、高度経済成長期に政府が打ち出した観光政策が観光産業の隆盛に関わる重要な鍵でとなったことがわかる。中国の場合、観光政策は時代と対応して変化してきた。松本嘉久と辻本雄紀は、①政治主導期（1949～1978)、②政治・経済並行期（1978～1985)、③経済優先期（1986～1991)、④経済主導期（1992～1999）と 4 つの時期に分けた[松本・辻本 1999]。しかし、その後の 2000 年～2013 年の経済の隆盛期は前の四つ時期と異なる特徴がある。2000 年代に入ってからは経済の高度成長とともに、観光の推進は都会の名勝地や歴史の名所旧跡のみならず、これまで観光と無縁であった農山漁村も観光促進の対象となった。そして、観光の主体は限定された階層のみならず、一般国民まで広く浸透し、いわゆるマス・ツーリズムの時代を迎えた。

ここ十数年間に観光産業が高度な成長を遂げたのは、政府が各時期の経済状況に応じて観光政策を実施したことが主な原因である。特に 1992 年以降、中国旅游局は観光産業を推進するために、毎年主題を設定して、観光推進に工夫を凝らしてきた。1992 年から 2013 年に至る 20 年間の観光の主題は以下の通りである。

表 19　経済改革開放後の観光の主題一覧

	中国語	日本語訳
1992 年	中国友好観光年	中国友好観光年
1993 年	中国山水風光游	中国山水景観観光
1994 年	中国文物古跡游	中国文化遺産旧跡観光
1995 年	中国民族風情游	中国民族風土観光
1996 年	中国休閑度暇游	中国レジャーリゾート観光
1997 年	中国旅游年	中国観光年
1998 年	中国華夏城郷游	中国華夏都会郷村観光
1999 年	中国生態環境游	中国生態環境保護観光
2000 年	中国神州世紀游	中国ミレニアム観光
2001 年	中国体育健身游	中国スポーツ健康観光
2002 年	中国民間芸術游	中国民間芸術観光

2003 年	中国烹飪王国游	中国グルメ王国観光
2004 年	中国百姓生活游	中国民衆生活観光
2005 年	中国紅色旅游年	中国の赤いツーリズム
2006 年	中国郷村旅游年	中国郷村観光年
2007 年	中国和諧城郷游	中国調和社会郷村観光
2008 年	中国奥運旅游年	中国オリンピック観光年
2009 年	中国生態旅游年	中国エコツーリズム観光年
2010 年	中国世博旅游年	中国世界博覧観光年
2011 年	中華文化游	中華文化観光
2012 年	中国歓楽健康游	中国歓楽健康観光
2013 年	中国海洋旅游年	中国海洋観光年

出典：中国国家旅游局ウェブサイト[http://www.cnta.com.cn]

この一覧を見て気づくことは、その時々の世界情勢や注目される話題と連関していることである。21世紀の到来（神州世紀）、健康やスポーツのブーム、生態や環境への配慮、中国での催事（北京オリンピックや世界博覧会）、政治スローガン（紅色、和諧、海洋）などとも関連付けられている。たとえば2002年にユネスコは「国際エコ・ツーリズム年」を設定したが、それに先立つ1999年が「中国生態環境游」であった。エコ・ツーリズムは1992年にリオデジャネイロで行われた地球サミットで、21世紀の地球環境保護のために取り決められた「アジェンダ21」の中にも盛り込まれていた。「持続可能な開発」に観光を利用とする世界での動きが、中国での1992年以来の観光年設定に影響したと考えられる。しかし、海洋権益を守ろうとする姿勢を強めている2013年を海洋旅游年と名付けたことには政治的な動きに影響されることが読みとれる[王慧琴2013：：102]。このうちでも、2006年の中国全体の観光の主題は「中国郷村旅游年」とされており、「新農村、新観光、新体験、新風習」（新しい農村、新しい観光、新しい体験、新しい流行）などの内容が盛り込まれていた。さらに2007年に「中国和詣城郷游」を主題とされ、この年に「魅力郷村、活力都市、和諧中国」（魅力ある農村、活力ある都市、調和がとれた中国）というキャッチコピーが定められ、都会と農村は調和的なムードの中に観光の促進を図るように期待されている。これらはすべて1998年に引き続いて再度「郷村観光」の大キャンペーンを展開し、現地滞在型の観光を積極的に推奨した。こうした動きは、

都市と農村の経済格差が広がり、農村の経済的向上を観光と結びつける意図があると見られる。農村（漁村）で、自然環境や農業（漁業）、景観、文化などの地域資源を活用して行う観光が始まった。地域住民が主体となって、農山漁村の豊かな自然環境や美しい景観を観光の対象として活用する動きが活発化したのは、1998年の地域の観光開発をを契機としている[王慧琴2013：102]。「郷村観光」は第一次産業に止まらず、第二次産業、第三次産業にも関わる観光活動である。

「郷村観光」の政策を打ち出したのは時代の反映だと考えられる。中国は約 70%が農村地域で、そこを観光資源とすれば、農村地域の観光開発は大きな潜在的可能性を秘めている[王文亮 2008：83]。農山漁村での観光産業の推進は経済生活を豊かにするためには当然であり、郷村観光の振興により地域社会の経済発展を促す契機とすることが期待されていた。中国では 90 年代から「三農問題」が顕著に現れ、2003 年に政府報告書の中に書きこまれて「三農問題」の解決方法を探り始めた[林光紀 2010]。「三農問題」とは農民の貧困状態、農業の低生産性、農村の非合理性のことである。従って、農民収入の増加、農業生産性の伸び、農村安定性の強化などで題を解決しない限り、農村地域の経済発展が大きく阻害される可能性がある。また「三農問題」の後に、2000 年代半ば頃から、「三漁問題」も大きく取り上げられ、「三農問題」と同様に社会問題として注目された。中国では漁業も農業の中に含まれていて時に「農林牧漁」と呼ばれて「農村地域」には当然漁村地域も内包されて、同様な問題点が指摘された。第２章で述べたように「三漁問題」は所謂「漁撈資源の枯渇、漁民生活の貧困化、漁村経済基盤の脆弱」[于立、孫康、徐斌 2007]という漁村地域に特有な問題である。この問題を解決するには、農村や漁村の豊富な資源を有効に利用することが何よりも効果的であり、経済的であることは政府にも徐々に認識されるようになった。その背景には、ユネスコが 2002 年を国際エコ・ツーリズム年と定めたことの影響が大きい。世界規模でのエコ・ツーリズムによる持続可能な発展を目指す動きに反応して、その促進を国策として取り入れたのである。都会のみならず、自然景観が豊富な農山漁村もその視野に入れてきた。エコ・ツーリズムと併せて、農山漁村を舞台とする「郷村観光」を導入して、地域社会の経済振興をもたらし、都会と農村の格差を縮小しようとする政府の狙いがうかがえる。

「郷村観光」は中国語で言えば「郷村旅游」にあたるが、この言

葉は 1980 年代に提唱され、1989 年 4 月に「中国農民旅游協会」を「中国郷村旅游協会」に改名したことがきっかけで、「郷村旅游」という言葉が初めてメディアで取り上げられた。しかし、その時には明確な推進方針がなかったので、観光産業の興隆までには至らなかった。なお、その後、中国郷村旅游協会は「中国国内旅游協会」に変更された。それは 1997 に設立された「中国旅行社協会」の前身である。

2003 年の第十六回大会三中全会では都市農村の発展，地域の発展，経済社会の発展，国内の発展と対外開放，人と自然との調和のとれた発展という五つの発展[張紀潯・夏占友・張虹 2011：102]を「生態観光」(エコ・ツーリズム)を推進する基本方針として打ち出した。その後に、「郷村観光」は「生態観光」の一環として政府指導の下で進められるようになった。各省・市・区及びその所轄する市・県・郷（鎮）は中央政府の方針に従い，観光業を重点産業，先導産業，先駆産業，支柱産業等と定め，地域経済の牽引役を担う産業として優先順位をつけた[陳波　2012：2]。また 2004 年は「中国百姓生活游」を主題と定め、全国各地の特徴ある伝統文化を掘り起こし、「観光村」を設定して地域のブランド化を図る取り組みが始まった。2006 年の「中国郷村旅游年」、2007 年に「中国和諧城郷游」の大がかりな推進により、「郷村観光」の本格的な隆盛期を迎えた。「和諧」とは中国共産党が 2004 年に発表した階層間での調和の取れた社会を目指すという「和諧社会」のスローガンを展開し、観光もその手段とされた。時代の動きと観光は連動している。

一方、「郷村観光」の展開は都会住民の生活様式の変化とも深く関わっている。経済改革開放後、経済発展が好調で、国民の収入も徐々に増えてきた。『中国年鑑』によると 1978 年に都市郷鎮住民の世帯可処分収入は一人当たり 343 元であったが、2009 年になるといきなり 23088 元に増加した。国民収入の著しい変化はマス・ツーリズム隆盛が一因であると考えられる。特に都市部の収入の伸びが顕著であり、都市部での可処分所得の高い水準の上昇が可能となった[王文亮 2008：78]。観光は「平和のパスポート」といわれるように、国民の生活がある程度に安定的であれば、余暇に割り振る消費が増える可能性がある。余暇とは 1 日の生活時間のうち生活必要時間と社会生活時間を除いた自由活動時間とみなされる[前田 1995：104]。

また、観光促進は国民の休暇制度の改革にも影響されている。改革開放前、政府が週に 6 日間の勤務時間制を実施したため、日曜日

1 日の休暇で、家事をしたり、買い物をしたり、親戚や友人を訪問したりするなど時間に追われる日々であった。当時、都市住民は余暇を楽しむ余裕がなく、余暇の持つ意味は十分に理解されていなかった。1994 年 5 月から中国国務院が週に 5 日の勤務を実施した結果、余暇は労働と同様に重要な意味を持っていることを認識し始めた。余暇に関する認識の変化により、余暇活動の内容についても、従来の単なる息抜きや仕事からの離脱といった消極的な意味あいから、「ゆとり」「ふれあい」といった人間らしさの追求や、知識及び教養の高揚といった自己実現的な価値を求めるといった積極的な意味合いへと変わってきている[王文亮 2001：212]。物質的な面での豊かさを追求するよりも、心の豊かさや精神的な癒しを重視する都市住民はレクリエーションや観光への関心がますます高まってくる。

「郷村観光」は農山漁村の地域住民の期待と都市住民の観光への需要が合致した状況の中で誕生したのである。農山漁村の地域住民は「郷村観光」を通して、地域社会の第一次産業と第三次産業、つまり農業や漁業を観光産業と共に発展させて、地域社会の経済振興を促したいという地域住民の「期待」がある。他方、経済改革開放後、都市住民の収入増加やハードな仕事によるストレスの解消などの要因を契機に、労働と余暇を切り離して考えるべきだと認識されるようになった。観光客は余暇活動を通して心身をリラックスして、個人の知識や教養の蓄積の増大が期待されている。観光は余暇のあらゆる社会的機能[29]に対応し、個人の全ての欲求を充足する活動で[前田 1995：111]、余暇活動の理想像として広く利用され、余暇活動の最も理想的な形態は観光と言われる。観光への好調な「需要」は郷村観光の促進には必須の牽引力となっている[郭・韓 2010：598]。

第 2 節　郷村観光の概念と種類

中国の郷村観光は 1990 年代から勢力を増して広がっていった。著しい発展は農村や漁村の地域社会に経済の活性化がもたらされたことが背景にある。これを契機に郷村観光への関心は地域住民、観光客だけでなく、多くの研究者も目を向けるようになった。郷村観光の概念に関しては、様々な先行研究があるが、発展の方向やモデル

[29]前田は、デュマズディエによる、余暇には「休息」「気晴らし」「自己開発」という 3 つの社会的機能があるという議論を踏襲している。

は模索段階に留まっていて、定義は定まっていなかった。

90 年代初期に楊旭は「郷村観光は農業生物資源、農業経済資源、農村社会資源から構成された立体景観を対象とした観光活動である」[楊旭 1992]と論じ、王兵は「農業文化景観、農業生態環境、農事活動および伝統民俗を資源として、観賞、考察、学習、参加、娯楽、ショッピング、レジャーが一体となった観光活動」[王兵 1999]と定義した。2000 年代に入ると、何景明は郷村性の持つ自然と人文資源を観光の「目玉」商品とする観光活動であると定義し[何景明 2002]、肖佑興は「郷村空間の環境という名目のもとに、郷村独特な生産形態、民俗風土、生活様式、風景、家屋、郷村文化などを対象として、都市と郷村の相違を利用して、計画と設計と商品を組み合わせている。そして、主に観光、遊覧、娯楽、レジャー、長期休暇を過ごすことと、ショッピングが一体となった一観光形態である」[肖佑興 2001]と述べている。林剛は郷村地域を拠り所にして、郷村田園の風景を観光商品とし、農業生産活動を観光商品とし、民俗文化を観光商品とし、農家の日常生活の体験を観光商品とするレジャー型の観光活動であると論じた[林剛 2006]。これらの先行研究から、郷村観光に関する定義は時代の変化とともに徐々に変わってきたことがわかる。90 年代の郷村観光の開始期には「農業」「農村」を強調していたが、2000 年代には「郷村」を中心に取り上げるようになった。「農業」から「郷村」へと範囲は一層広がった。観光対象は農業の経済資源、農村の社会資源、農事活動に留まらず、郷村の生活様式、郷村の建築、伝統文化、農家の日常生活の体験なども観光対象に組み込まれるようになった。郷村観光は rural tourism に対応し必ずしも生業中心ではないし、郷村性があれば農村に限らず都市でも展開できることが農業観光との違いである。農業観光 agricultural tourism は、郷村観光の下位概念で、農業を資源として活用する収穫や農産物の食体験、農家の民宿を含む観光である。農業観光は農場観光 farm tourism ともいわれている。

郷村観光の定義は現在も統一されていないが、「郷村」地域で行われる余暇活動という点は特に異議がないであろう。従って、郷村観光は郷村を拠り所にして、農業・漁業などの生産活動を観光対象とするだけでなく、郷村の田園風景を楽しんで散策し、郷村の伝統建築、民俗文化に触れるなど、農家や漁家の広い日常生活の体験を観光対象とし、「郷村」文化の創出を目標として行動する活動である。

郷村観光では観光客と地域住民など立場の違いによって、観光対

象への認識は異なる（図 11)。観光地を訪れる観光客が自分の日常生活と異なる人々の暮らしぶりを目のあたりにして、異文化と感じることを動機に組み込み、観光地の人々の暮らしぶり自体が観光客には魅力的な材料となりうる。しかし、近年になって観光客を集めようとして、地域住民が伝統的生活様式を大きく変え、独自性を喪失した事例が増えてきている。地域住民が観光客の要望を充分に理解できなければ、理想的な観光像を描くことはできないかもしれない。郷村観光の推進にあたっては、農村や漁村の「郷村性」をより鮮明に浮かび上がらせる必要がある。

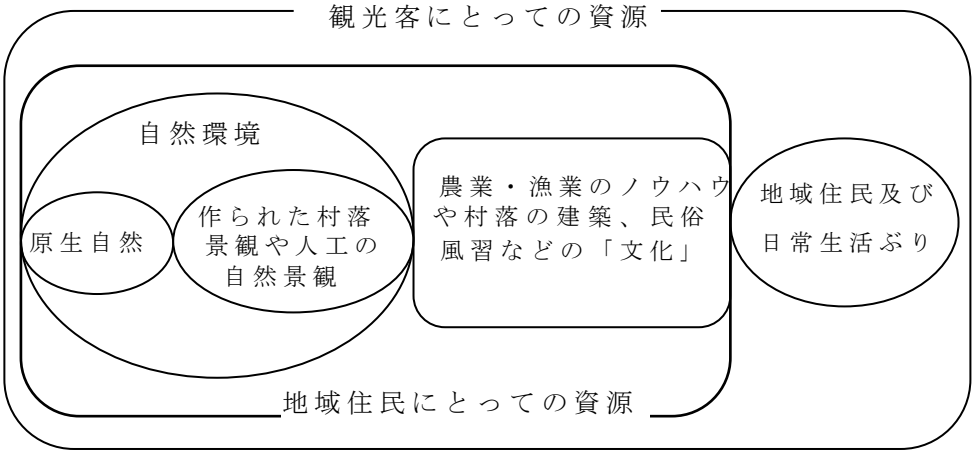


図 11　観光客と地域住民の立場による観光対象への認識

出典：[敷田・森重 2011]により作成

近年の全国の郷村観光の実例から見ると、観光商品の種類を多く揃えて多様性を作り出し、観光客の様々な需要に充分に対応できるような試みが行われてきた。「三農問題」への対応としての観光産業の在り方が鮮明になった。王文亮は「三農問題」の改善策としての郷村観光の形態を整理して、「郷村度暇休閑型」（農村レジャー型)、「依托景区発展型」(観光地をより所にして発展する型)、「旅游城鎮建設型」（観光開発で都市化を目指す型)、「原生態文化村寨型」（原生態重視の文化集落型)、「民族風情委託型」(民族文化を拠り所にして発展する型)、「特色産業帯動型」(特産品の開発販売を主力とする型)、「現代農村展示型」(近代農業を目玉商品とする型)、「農業観光開発型」（農業と観光の結合を重視する型)、「生態環境示範型」（生態環境保護型)、「紅色旅游結合型」（革命史跡観光型）などとしている[王文亮 2008：83]。各郷村の地域社会ごとにこれらの型は組み合

わさって数書類の観光形態が同時に進行するが、その過程で各地域の「目玉」観光商品も生み出される。近年の郷村観光の推進で最も注目されているのは「農家楽」である。「農家楽」とは、農業と観光業を結びつけて、農村地域の経済活性化を目指す観光形態で、具体的には、農家で食事をする、家屋に住んで農業を体験する、農家の風景を楽しむ、農業の生産物を購入することなどで、郷村観光の初期段階とされる[緒方 2009]。観光客の滞在状況から見ると、「農家楽」は値段の手頃さがあり、数種類の観光商品を同時に楽しめる可能性もあるので、観光客の利用が増加する傾向が見られる。「農家楽」の漁村での展開が「漁家楽」である。筆者は原型となった郷村観光の対象に焦点を当てて、種類に応じて分類を試みた（表 20)。

表 20　郷村観光と類似概念の整理

観光名	対　象	キーワード
郷村観光	農村・漁村の景観、生産様式、日常生活ぶり	郷村の自然景観、生態景観
農業観光	農業活動に関わるもの	イチゴ狩り、さくらんぼ狩りなどの体験観光型
漁業観光	漁業活動に関わるもの	漁撈体験、潮干狩り、海鮮料理、海岸レジャー活動など
伝統文化観光	伝統文化として伝承されるもの	伝統文芸、伝説、民俗風習、民族文化、伝統郷土料など
宗教文化観光	宗教信仰、民間信仰	神への祭祀儀礼や寺院への観光
農家楽・漁家楽	農家・漁家を主とする観光対象	民俗風習、農家または漁家の伝統的な建築への観光、郷土料理など

出典：現地調査の資料により筆者が作成

郷村観光は表 20 からわかるように、既に萌芽期の段階を過ぎて、農業や農村を主とする観光形態から多種多様な形態に移行した。特に自然保護を意識して楽しむ観光となれば「生態観光」となる。現代の中国では「生態観光」は動植物の生態観察だけでなく「郷村観

光」に組み込まれているという特徴がある[緒方 2009]。郷村地域の住民は観光客が都市で体験できない観光商品を生み出すことをモットーとして、観光客が満足できるように、「郷村性」に溢れる観光商品を数多く作り出してきたのである。

郷村観光を推進する目的は農村や漁村の地域経済を活性化することにある。特に農業の停滞、農村の空洞化、農民所得の低下などの三農問題を改善する最も有効な手段とされた。郷村観光の展開においては、「三農観光」という表現も使われる。「三農観光」と「郷村観光」は両方とも農山漁村で推進される観光であるが、「三農観光」と「郷村観光」は強調する側面が異なり、全く同じ概念とは言い難い。「三農観光」は主に農村や漁村を中心として、「三農問題」や「三漁問題」の解決に焦点が当てられるのに対し、「郷村観光」は都市部以外の地域で行われる観光形態で、都会と郷村という地域的境界への認識が強く、都会と農山漁村の経済格差を縮めることが主な目的で、「都市郷鎮一体化」を促進する観光形態であると考えられる。現在では「郷村観光」が「三農問題」を解決するのに大きく寄与しているので、「三農観光」または「農村観光」は、「郷村観光」の類似表現として頻繁に使われる傾向がある。

第３節　郷村観光の特徴

中国の郷村観光は他の先進国と比べると、政府の積極的な指導のもとで進められることに特色がある。観光地の開発・経営の主体は観光業者ではなく、地元政府と地域住民の協力で推進されることが多い。観光商品の開発モデルとしては、農民個人の経営モデル、政府が投資する公有モデル、政府の指導と協力の下での旅游企業の独資モデル、政府主導の下での旅游企業と地元農民との合作モデル、地元政府と外来投資商との合作開発モデルなどがあげられる[蘆楊 2005]。政府が地域の郷村観光をより広範に促進するために、毎年表彰するなどの評価措置も取られている。例えば、2011 年の遼寧省の郷村観光での「優秀」商品として、「旅順さくらんぼの生産地」が選ばれた。2010 年以来、大連市郷村旅游協会は毎年「星級農(漁)家楽」の選抜活動を行っている。また、政府が収入の低い「農(漁)家楽」などに対し、資金の援助や税金の減免など措置が講じられ、郷村観光の推進をバックアップする役割を果たしている。このような定期的な評価活動を通して、政府は郷村観光の推進による業績を宣伝すると同時に、郷村観光の進捗状況を把握しようとする狙いもある。

政府が積極的に関与する背景としては、中国の土地の国家所有制度と土地の使用権に対する地元政府の支配が関係している。土地の使用権を持つ地元民と観光商品を営む経営側が異なる場合、収益分配などのもめごとを防ぐために、政府によるある程度の監督が欠かせない。こうして、中国では地域観光の開発主体が、観光業者や外来資本ではなく、地元の政府と地元住人である。観光開発に関して地域が自律性をもつ点は中国の郷村観光の顕著な特徴ともいえる。同じ傾向は韓敏が考察した毛沢東観光にも見られる[韓敏 2007]。

国土の広い中国の郷村観光は、地域によって様々な観光商品が生まれ、各々が全く異なる特徴を有しているため、一括りにするは難しい。しかし、郷村観光は一般的なツーリズムと比べて、観光地や観光商品の独自性がとりわけ顕著であることから、他のツーリズムとは違う視点で検討する必要がある。郷村観光を一つの「客体」として考察すれば、共通点が少しずつ浮かび上がるので、各地域における郷村観光の特徴をまとめておきたい。

① 郷村性

郷村観光の一番の特徴は「郷村性」である。都市と異なる風情をもつ郷村の観光商品としての「郷村性」が都市住民にとっては、最も魅力的である。ところが、現在の中国では、「社会主義新農村建設」による農村の都市化が進んでおり、農村と都市の違いが判然しない[張広帥 2010：85]地域がある。特に近年になって、「都市郷鎮一体化」を実現するために、農山漁村の自然景観や村落の町並みが大規模な開発によって、大きく変わりつつあり、伝統文化や風土、伝統的な建造物が多かれ少なかれ喪失していく傾向にある。郷村観光は、農山漁村の素朴な人柄、方言、郷土料理、伝統芸能などの「その土地らしさ」、つまり「郷村性」を体感できることが魅力であり、人々の暮らしと、それらを基盤とした民俗や伝統に重要な価値を与えることで展開してきた[前田 1995：130]。しかし、その大切な「郷村性」が失われれば、魅力的な観光対象として活用する可能性はなくなるであろう。

② 真正性

郷村観光は都市住民を対象とする観光客が日常生活からのストレス発散や精神的な「癒し」を求めるために、農山漁村を訪れることが特徴である。特に近代社会で生活する人々は自らの生活の断片性、皮相性、非人格化などを感じており、そうした感情から逃れて、リ

アルなもの、現地の人々の生き生きとした生活を体験したいという動機がある。郷村観光に付与される「真正性」への追求は何よりも際立っている。「真正性」はツーリズムを研究する際の重要なキーワードである。郷村観光の「真正性」は農山漁村の民俗風土や伝統的な建造物、伝統的な生産様式、伝統的な郷土料理などを含む伝統文化のオリジナル性が求められる。観光客は農家や漁家の実際の生活様式の体験を通して、観光商品が持つ「真正性」を吟味するのが本来の目的である。しかし、近年郷村観光の中に偽物や疑似的な体験、人工的な「虚構」のものを観光客に提供するケースもしばしばある。近代の均質性を浸透させつつある現代社会においては、観光を通しての非日常体験が得がたくなる傾向がある[須藤・遠藤 2005：172]。「疑似性」に対抗する「真正性」の欠落が観光商品に付与される価値を低下する可能性があるので、郷村観光の推進は地域の特色のある観光商品の「真正性」をいかに維持するかが重要である。ただし、「真正性」とは何かという問いは残り続ける。

③ 多様性

中国は土地が広く、地域ごとにその風土や信仰は異なり、複数の民族から構成されることから、生活習慣や培われた文化も様々様々である。一般的に、人々が容易に観光に参加できる条件が整ってくると、観光対象の種類は無限といってもよいほど多様なものとなる[前田 1995：122]。郷村観光の定義にも表れるように、生産形態、民俗風習、生活様式、郷村景観、郷村建築など郷村の文化の全てが郷村観光の対象となりうるのである。このような多様な地域文化は数多くの観光商品を生み出し、観光客に魅力と感じさせるのである。

一方、郷村観光の多様性は都市から訪れる観光客の需要にも応える。観光行動の対象は、単に観光産業が経済的価値の追求の一環として供給するものばかりではない。観光者の興味・関心は多様であり、観光者の多様な志向に応じて観光行動の対象も大きな広がりをもっている[前田 1995：134]。要するに、観光対象は観光客の要望に沿ってアレンジされたものも数多くある。これら多数の観光対象を通して、観光客が各々の観光体験が得られる。観光客は普段の都市の日常生活に蓄積された倦怠感から開放される願望が切実である。従って、単一的な観光商品は、多くの観光客に魅力的と感じさせることは難しく、観光客の千差万別の期待を満たすのも不可能である。観光客の多様な目的に応えるには、多種多様な観光資源が不可欠のであり、人々に観光行動を生起させる誘引力となっている。

④ 文化性

郷村観光は観光客の日常生活と差異化された「異なる世界」の特徴を際たたせることが重要である。農山漁村と都会との風土や文化の違いが郷村観光の「文化性」を作り出す原点ともいえる。観光客は「観光地」の「異なる」自然、住民の「異なる」生き方を目にし、体験することで、自分たちの「生」を活性化させる[須藤・遠藤 2005：172]。言い換えれば、観光客が農山漁村で消費するのは地域的な文化の「表象」である。日常の生活文化が観光対象となる現代社会では、生活様式、郷土料理、伝統芸能なども地域を象徴する文化としての役割が大きい。農山漁村の伝統的「文化性」をもつ観光対象の幾つかは文化財や文化遺産として保護され、ユネスコの世界遺産に指定されるなど観光の価値が高められ観光資源として利用されている[30]。「文化性」の高い観光資源は、現代人の様々な観光欲求の充足を満たすには必須の存在である。郷村観光の推進は、観光客に「異なる世界」の文化を体験させ、「観光地」の住民は、「異なる」文化をもった「観光客」を迎えて自然と文化を紹介する[須藤・遠藤 2005：172]。観光地の住民は、「異なる」文化と接触する機会を通じて、体験による知見を利用して地域観光産業の改善にも役立てることが出来る。観光客と地域住民が郷村観光という「交流の場」を通じて、双方の持つ「文化」を相互に浸透させるのである。

⑤ 地域性

90 年代から郷村観光は全国的に広がり、各地域の特色ある観光商品が多く創出されるようになった。例えば、成都の国際博覧会の花祭や舟山群島の「漁家楽」は全国的に有名である。地域主導の観光開発は、地域の中の素材作りから始まるが、地域が個性化していく上で重要な役割を果たすのが地域文化である[前田 1995：92]。地域性の強い観光資源には観光客の興味が注がれ、自律的な観光振興や観光町づくりに大きな期待が寄せられる。

⑥ 持続性

1992 年にブラジルのリオデジャネイロの「国連環境開発会議」において、持続可能な開発のための「アジェンダ 21」が採択された。

---

[30]安徽省西遞と宏村の民間建築は 2000 年に「安徽南部の古村落」として、福建省永定県の下洋鎮初渓土楼群などは 2008 年に「福建土楼」として世界遺産に登録された。

その後、各国は「持続可能な開発」や「持続可能な観光」などの言葉を頻繁に使用するようになった。中国の郷村観光の推進においても、「持続可能な発展」が重視され、地域振興と観光振興を同時に進めながら、自然環境の保全も目指している[大藪・大内 2008：68]。しかし、郷村観光による観光地作りは、環境の破壊や資源の過度開発などの現象が目立つ地域もある。郷村観光の推進にあたっては、経済効果に著しく偏重し、性急な変化を求める「ハイ・インパクト」な、そして域外から誘致・進出した企業に全面的に依存した「外来型」の開発を進める「ハード」な観光のあり方(hard tourism]ではなく、自然や歴史、文化など地域の恵みを大切に維持し、住民生活を尊重しながら地域社会に緩やかな変化をもたらす[東徹 2003]「内発的」な観光が理想的である。この点に関して、自然環境と地域振興と観光振興は相互依存の関係であるという生態観光、エコ・ツーリズムのモデルは示唆的である[大藪・大内 2008：69]（図 12)。

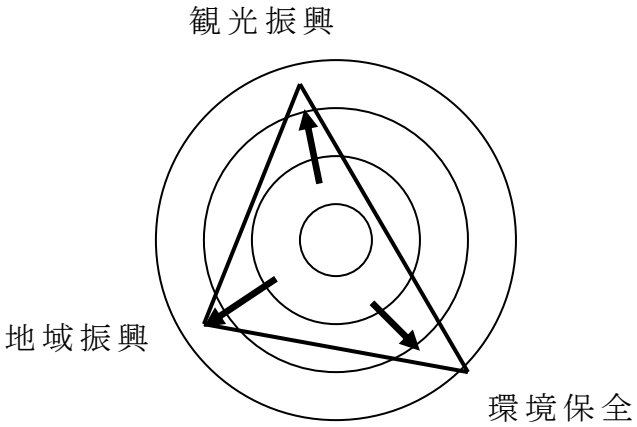


図 12　郷村観光の特性

出典：[大藪・大内 2008：69]

郷村観光は、観光振興を進めると同時に、自然環境の保全も視野に入れるエコ・ツーリズムの性格を強く持つ。特に自然環境の持続的な利用が可能であれば、観光振興による地域経済の活性化が図られ、長期的観点からの地域振興につながる。従って、自然環境と地域振興と観光振興の均衡の維持が、今後の観光推進の成否にかかわる。

第４節　旅順周辺の郷村観光と文化の創出

旅順は現在では大連の「奥座敷」と呼ばれており、自然観光資源も人文観光資源も豊富なところである。第１章でも紹介したように、旅順は温帯海洋性気候なので、冬は厳冬がなく、夏は残暑がなく、四季の移り変わりがはっきりしている。このような穏やかな気候のもと、数多くの美しい自然景観や観光名所が形成されている。更に旅順は歴史的・人文的な由緒があり、歴史遺跡や戦跡が多数残されている。自然景観や観光名所及び歴史遺跡や戦跡などは郷村観光の貴重な観光資源として活用する可能性が提示されている。本節では主に郷村観光の視点から、旅順周辺地域の観光資源の特徴や位置づけを考察する。

１　旅順周辺における「郷村観光」資源

① 自然景観の再発見

旅順は三面が海に囲まれ、その最南端に渤海と黄海の境界線という珍しい景観が特に有名である。渤海と黄海の境界線の近くに「鳥の旅館」と呼ばれるように渡り鳥の宝庫で、「老鉄山自然保護区」は人気の高い観光スポットである。また旅順の陸地で沖合７キロ離れた蛇島や３キロ離れた鳥島も昔からその名を馳せており、多くの観光客の関心を寄せている。

② 歴史遺跡の掘り起し

旅順は美しい自然景観に恵まれる一方、歴史遺跡も数多くある。悠久の歴史を感じさせる郭家村新石器遺跡がその一つで、旅順の最古の発祥地といわれる。近年には清朝時代の住宅を復元し、郭家村郷村博物館として利用されている。郭家村遺跡の外には于家村遺跡、牧羊城遺跡、大塢崖遺跡などがある。近年の郷村観光の推進に伴い、歴史遺跡も貴重な文化観光資源として掘り起こされてきた。

③ 戦跡の再利用

日清戦争、日露戦争の主戦場である旅順には人々の記憶に残る戦跡が相次い存在する。旅順博物館、二〇三高地、東鶏冠山の北遺跡、旅順監獄、万忠墓などの戦跡が特に有名であり、大連市に指定された人文観光スポットは 64 か所ある。旅順は「中国半部近代史博物館」といわれるように、これらの戦跡はかけがえのない文化資源となる。

④ 温泉施設の新設

郷村観光の推進に伴い、観光資源となる観光商品の開発が急速に進められている。今まで目を向けられなかったものが資源として掘

り起こされ、観光客の人気を集めるようになった。旅順老鉄山温泉はその典型的な例で、2002年に日中の共同開発で作られ、最近では観光の付加価値が上昇しつつある。温泉は中国の国内観光客だけでなく、日本人観光客をあてこんで開発したのであり、近くの「老鉄山自然保護区」と連携して観光の相乗効果が期待されている。

⑤ 海産品や農産品の創出

旅順周辺の沿海は海産物が豊富な地域として知られている。最も有名なのはナマコ（刺参)、アワビ、蟹、サザエ、ハマグリなどである。この付近のナマコ（海鼠）は棘があるので、「刺参」や「棘参」と呼ばれる。海産品は旅順の重要な観光資源となり、観光客から高い評価を得た。特にナマコは旅順地域のブランドとして位置づけられ、地域経済の発展と活性化に大いに貢献した。2009年に旅順で第一回美食文化祭が開催され、海産品を中心とする郷土料理「順菜」の魅力を宣伝した。「順菜」とは旅順の料理の意味で2009年に作った新しい名称である。海産品は今後も地域の郷土料理や土産に盛り込まれ、観光客誘致の材料として一層の活用が見込まれるという。

旅順周辺の地域では毎年様々な農産物を収穫して観光客に好評であったものを地域の名産物として発展させたものもある。老鉄山のさくらんぼの「鉄山紅」と、龍王塘のリンゴの「桜花」がそれで、「中華名果」に選ばれたので、観光客の間で人気を博している。近年では「農家楽」「漁家楽」の展開により、さくらんぼ狩りツアーやイチゴ狩りツアーなどの観光商品が注目されつつある。

⑥ 寺院と廟の再生

旅順は明清時代に山東省からの移民が多かったため、旅順への移住に伴い、様々な信仰が同時に旅順に伝えられてきた。旅順周辺の寺院や廟に関する記録は豊富だが、その大半は戦争や文化大革命で大きな損害を被った。改革開放後、民間信仰や宗教信仰が徐々に復興し、新しい寺院や廟に建て替えられるようになった。例えば、真泉寺や横山寺、媽祖廟や龍王廟などは有名である。寺院や廟は地域コミュニティ活動の場として活用され、観光対象の役割も果たす。

⑦ 地域特有の民間節句の創造

2000年代に入ってから、旅順口区政府が観光資源を宣伝するために、民間行事を祭日として設定し、地域社会に浸透させ、イベントの催事を大幅に増やした。2005年から4月下旬から5月中旬まで「桜花節」という「桜」の花見を主題とするイベントが行われるようになった。同じく2005年から毎年6月下旬のさくらんぼの収穫時期に

合わせ、「さくらんぼ節」が開催されるようになった。2009 年からは九月下旬の「海鮮節」に合わせて「美食文化節」を行うなど食文化を焦点とするイベントが設定された。旧暦正月 13 日には媽祖を祀る「海灯節」が行われ、2004 年以後に旧暦 6 月 13 日を「漁人節」と決めて龍王を祀るようになった。いずれも海の神の祭りとして、地元の信仰を再生し、併せて観光客の関心を呼び起こし、環境保護の宣伝にも力を入れるようにした。海に関する祭りが多く、漁村の伝統文化を掘り起こしたと言える（表 21)。これらの民間の節句の独自性を宣伝し、観光イベントを企画し、地域の知名度を高めて、観光客の関心を引くようにしようと考えたのである。

表 21　旅順周辺の主な民間節句

時　間	名　　称	内　　容
旧暦正月 13 日	海灯節	媽祖を祀る
4 月下旬～5 月上旬	桜花節	桜の花見
6 月下旬	さくらんぼ節	さくらんぼの収穫
旧暦 6 月 13 日	漁人節	龍王を祀る
9 月下旬	海鮮節	海鮮料理を賞味する
9 月下旬	美食文化祭	旅順の伝統料理を楽しむ

現地の情報により筆者が作成

２「郷村観光」と文化の創出

「郷村観光」の推進で、旅順と組み合わせで従来の戦跡地としての旅順のイメージが大きく変わることが期待されている。「郷村観光」を促進する過程では、従来は価値を意識せずに暮らしの中で何気なく伝えていた地域の伝統文化を観光化し、新たな地域文化を創造したと言える。言い換えれば、観光が土着文化を形骸化させるのではなく、伝統文化の保存、改革、再創造を促進し強化していると言える[前田 1995：136]。近年、旅順周辺地域の都市化が進行する中で、漁撈生産に携わる人口が益々減少する傾向にあり、漁民の信仰を継承する若者も減る一方である。「郷村観光」を通して、地域の民間信仰を伝統文化として価値を見出して、経済的な効果のみではなく、文化の再構築も行う。地域の人々が自分自身のアイデンティティを問い直すよい機会でもある(第 7 章で詳論)。また、いつも食べている地元の海産品を「郷土料理」として外部の人々に宣伝して、

地域を象徴する食文化を生み出した。ただし、これは2009年以後の新しい施策であるので、まだ成熟しているとは言えないが、今後魅力のある観光資源になることが期待される。そして、日本植民地時代の名残である龍王塘桜花園を再開発して、桜の花見を地域の新しい文化として売り出した。いずれも地域経済の活性化に繋げようとする観光資源の開発である（第6章・第9章で詳論）。郷村観光の展開は、地域の歴史や風土等に培われた伝統文化を継承・発展させ、新しい文化活動を創造し発信していく。個性ある地域文化の振興はブランド形成にも寄与する。

伝統文化を観光の対象として扱う際には、常に変化が余儀なくされる。それゆえに、観光が土着の伝統文化を破壊すると考える者もおり、観光開発がもたらした負の面を強調する者もいる。しかし、現代社会において外界からの影響を全く受けず、固有の伝統文化にのみ立脚して生活を営む人々はほとんど存在しない[前田 1995：136]。伝統文化は時代と共に常に再構成され変化する。従って、郷村観光と地域文化の関係を論じる際には、郷村観光による負の作用に焦点を当てるよりも、郷村観光で地域の伝統文化が新たに調整され、新しい文化が生成される正の反応の作用にも注目しなければならない。

結び

郷村観光は投資金額が少なくてすみ、環境保全にもよいという利点があるため、近年になって農山漁村や旅行業者から熱い視線が注がれるようになった。特に「三農問題」「三漁問題」の解決や「町づくり」「村おこし」の手段として大いに期待されている。勿論、郷村観光が地域社会にもたらしたものは、経済的、社会的な効果に止どまらず、地域文化の表象形成にも大きな影響を与えた。郷村観光の展開は、主に供給と需要の二つの要因による。それは農村産業構造の調整という供給側の需要と、都市化の急進化による市場側の需要がある[周玲強・黄祖輝　2004]。従って、郷村観光は農山漁村の地域社会のみではなく、観光地を訪れる観光客にも様々な刺激を与えたことも事実である。次に観光地化される地域社会側と観光客側について各々違う視点から見て郷村観光の効能を考察し、多様多種な観光効果をまとめて、郷村観光の推進に関する問題点を明らかにしたい。

１郷村観光の効能

ａ　観光地側

2000 年半ばごろから顕在化した中国の「三農問題」「三漁問題」は、農漁村の持続的発展を脅かす不安定な要因だとみなされるようになった。特にこの問題の中心は、農民（漁民）所得の伸び悩みとそれによる都市部と農村部の所得格差の拡大にある。例えば、改革開放が始まったばかりの 1978 年における都市住民の一人当たり可処分所得は 343 元、農村の一人当たり純収入は 134 元で格差は 2.55:1 倍であったが、2005 年には都市住民の一人当たり賃金は 10,493 元であるのに、農村の一人当たり純収入は 3,255 元に過ぎず、格差は 3.22：1 と広がった[31]。農村と都市部の収入格差は拡大する一方である。背景には、2002 年から政府が「農業の総合生産能力の向上」や「税金の免除」及び「新農村の建設」などの政策を実施したことが挙げられる。特に農村が第 2 次産業や第 3 次産業の発展に力を入れ、農業や漁業以外の収入を増やす方策への認識が高まった。郷村観光は実践の事例として大いに推進されてきた。その結果、2010 年の農民 1 人当たりの収入増加幅が、1998 年以来初めて都市住民を上回った[32]。郷村観光は農村と都市部の格差社会を縮める有効な手段として大きな貢献を果たしたといえる。

郷村観光の効果が経済面はもとより、社会的文化的な効果にも期待が寄せられる。郷村観光の促進のために各地域では村落景観や道路などの整備工事が進められ、環境保全への意識が高まるようになった。地域住民は自然を資源と認識し、環境を保護して育成する動きが盛んになった。また、経済改革や近代化を進める中で、地域社会の連携感が弱まり、住民が伝統文化や民間信仰への関心を失う傾向がある。郷村観光の展開で、地域文化を再認識し、伝統文化を観光資源としてその魅力を生かし、失われた地域社会のアイデンティティへの再構築に繋がることも期待される。

ｂ　観光客側

観光客が観光地を訪れる動機は様々である。気晴らしやストレス解消を得るための観光もあるし、自然に触れ合い、自然環境から知

---

[31]中華人民共和国国家統計局『中国統計年鑑』2006 を参照されたい。

[32]2011 年 2 月 3 日付『人民日報』は 2010 年の農民 1 人当たりの収入は前年比 14．9％増の 5919 元（約 73000 円）に達したと報道した。

識が得たいと考える人もいる。E・コーエンは観光経験を「気晴らしモード」「レクリエーション・モード」「経験モード」「体験モード」「実存モード」の五つに分けている[Cohen 1979]。「気晴らしモード」「レクリエーション・モード」は一般的にストレス解消を主とするが、「経験モード」は観光者が観光地の真正性や価値観に好奇心をもつことになる。「体験モード」は観光地の実際の生活を体験し、「実存モード」は旅で得られた経験を自分の日常生活の中に取り入れる。郷村観光は自然景観や生態科学園などへの見物型から、「農家楽」「漁家楽」のような体験型まで種類が豊富で、観光客の多様な要望に応える可能性が充分あると思われる。郷村観光は都会から訪れる観光客に「癒しの場」を提供することで、需要も高まると思われる。

２郷村観光の問題点

中国の郷村観光は 2000 年代から徐々に軌道に乗ってきたが、観光商品の独自性、持続性や郷村観光を実施する地域に対する政府機関の監督においては、改善すべき点が多く、郷村観光の規範モデルの確立が求められている。改善点は以下のようにまとめられる。

a　政府監督の不行き届き

郷村観光を推進するために、政府は様々な政策を実施した。しかし、観光地が破壊された場合の賠償や観光客が騙された場合の対応などの問題を解決する専門機関がなく、地域社会と観光客の信頼関係の構築に不利な影響を与えることがある。観光産業は様々な部門に絡んでいるが、政府の適切な監督がなければ、今後は郷村観光の発展を阻害する可能性がある。

b　観光商品の「独自性」の欠落

中国政府は 2010 年までに、社会主義新農村を建設するために、「農村旅游特色県」を 100 ヶ所、「農村旅游特色郷鎮」を 1000 ヶ所、「農村旅游特色村」を 10000 ヶ所創出するという目標が打ち出され[33]、郷村観光を全国的に広げようとしている。しかし、数多くの郷村観光地が成立するには、観光商品の独自性が何よりも重要であるが、近年の観光地は模倣が増加する一方である。郷村観光の特徴の一つは観光客から求められる「真正性」への対応で、観光商品の「真正

[33]2006 年 7 月 18 日新華社報道。政府門戸サイト www.gov.cn。最終アクセス 2013 年 12 月 10 日。

性」が地域の独特の目玉商品となる可能性が高い。今後は各地域で独自の観光商品を創出しなければならないが、困難も予想される。

c　郷村観光ソフト面の問題

2000年代になって、各地域では郷村観光を促進するための施設建設や道路舗装などの工事が進められた。しかし、サービスなどソフト面への投資が少なく、郷村観光に詳しい人材が不足している。このような現状の問題を解決しなければ、今後は郷村観光のイメージ作りに大きな影響が出てくるであろう。

d　季節性の制限

郷村観光は自然景観を鑑賞し、農作物の栽培時期に連動して体験をする観光であるので、「自然」からの影響が大きい。郷村観光は主に春夏秋に集中し、冬に利用できる観光商品は限られている。今後は年間を通して利用できる観光商品の開発への取り組みが急務となっている。

以上のように郷村観光の効果と問題点に関して検討したが、郷村観光は国の長期的政策として進められてきているので、今後は時間をかけて充実した計画を立てる必要があると政府も観光業者も考えている。

第Ⅲ部　地域社会で創出された観光文化

第６章　地域エコ・ツーリズム風情の創出

はじめに

中国では 1990 年代以降、全土で観光が展開し、観光産業は国の「支柱産業」として急速に発展を遂げている。本章ではこれまで研究がなかった遼東半島での観光、特に旅順を中心とした生態観光の現状と課題について考察し、旅順周辺の漁村と戦跡の事例を取り上げて考察する。遼東半島は日清戦争や日露戦争の舞台となり、大連は日本の大陸進出の拠点で戦前には約２万人の日本人が住み、現在でも経済的に強い結びつきを持っている。しかし、旅順は日清戦争と日露戦争の古戦場であり、植民地時代の記憶を生々しく想起されることもあり外国人への開放は遅れた。旅順には戦争の遺跡や記念碑が沢山残されているが、「愛国教育基地」として活用されてきた。

しかし、旅順は 2009 年外国人向けに開放され、今後は観光資源として利用されて、日本、ロシア、韓国などの観光客が増えて大きく変化することが予想される。旅順は国家級風景名勝区に指定され、国家級自然保護区であり、観光開発の拠点として整備されつつある。こうした状況の中で、旅順とその周辺が観光地として開発され、地域ツーリズムの展開に伴って、地元の人々の意識がどのように変容していくかを考察する。特に旅順周辺の漁村地域の観光振興の実態に注目して地域住民の意識変化や、観光スポットの宣伝への取り組みを論じる。また観光産業の展開にあたって自然環境の保全を重視するエコ・ツーリズムの思想との矛盾が生じた状況や、新たな観光商品の開発過程にも注目する。漁村社会に観光がもたらした社会的・経済的効果と戦跡ツーリズムとの関連についても考察する。

第１節　エコ・ツーリズム推進の背景

1978 年の改革開放後、中国の観光は試行錯誤の時代であったが、1986 年頃から雲南省や貴州省の少数民族地区を手始めとして、貧困克服・経済発展の起爆力として国家や地方政府が観光推進に力を入れるようになった。第５章で述べたように、1992 年以降、中国旅游局は毎年定められた主題を設定して、観光産業の促進に力を入れてきた。都会のみならず、農山漁村でも観光資源の掘り起しを進め、地域に潜んでいる「個性」を魅力のある観光資源に生まれ変わらせ

る動きが出始めた。日本では普通の農山漁村の日常生活に価値を見出し、観光客が地元に滞在して住民が交流し、農山漁村の自然や環境や景観を楽しむ滞在型の余暇活動は、グリーン・ツーリズムと呼ばれている[佐々木 2008：112]。島嶼部や沿海部の漁村に滞在して海辺の生活を体験する余暇活動は特別にブルー・ツーリズムと名づけられた。こうした運動の先駆的形態は、欧米での 1960 年代の高度経済成長に対抗する、カウンター・カルチャーを志向する人々の間で始まった。農家に滞在して休暇を過し、農業、農家生活、地域文化及び農業景観を楽しむ滞在型の観光が流行となった[王楽平 2000：23]。これは 1960 年代に盛んになったマス・ツーリズムに対する批判でもある。グリーン・ツーリズムに続いて、世界各地で自然環境の保全を目的とするエコ・ツーリズムが展開され、中国では「生態旅游」として普及し、現在は「生態旅游」の看板を至る所で見ることが出来る。「生態観光」は自然保護を意識して、自然環境に配慮して楽しむ観光形態で、村全体をエコ・ミュージアム、つまり生態博物館とする動きが少数民族居住区に出現して[34]、生態観光は一層盛んになってきた。

中国では余暇を過す場所として農山漁村が脚光を浴びたのは 2000 年代である。直接の要因としては政府の政策があげられるが、近年では経済の高成長で、国民の収入増加、自家用車の普及、休日制度の改善、特に「黄金週間」と呼ばれる大型連休の導入などによる国内の旅行客の増大が後押しの一因になっている。激しい競争にさらされる現代社会では、ストレス解消のために、人々は農山漁村の大自然にふれ合い、自然の働きについて学びたいという気持ちが自然と高まってきたようだ。従来は観光と言えば、名所旧跡や遺跡などの見学が典型的なスタイルであったが、現在の内容は徐々に変容しつつある。資源が豊かで広大な面積を持つ農村地域は今後は観光地となる大きな潜在的可能性がある。しかし、中国の農山漁村を観光地とするツーリズムの推進は数年前から全国的に広がったが、まだ初級段階に止まっている。

他方、農村に比べて漁村地域の観光化は遅れて始まった。漁村では近年海洋資源の枯渇による収入の減少や都市化の進行の影響による地域の過疎化など様々な問題を抱え、この問題状況からの脱却が地域の発展を大きく左右すると考えられるようになった。地域の豊

[34]貴州省のミャオ族やトン族の村に顕著である[鈴木 2012]。

かな自然を観光資源として活用出来れば、地域経済の活性化が期待できると感じられている。

農山漁村のツーリズムの隆盛に伴い、研究も徐々に蓄積されてきた。その内容は主として観光政策や郷村観光の特徴について述べ、今後の持続可能な発展への対策の在り方を考察している[呉 2006、王文亮 2008、鄒 2005、郭・韓 2010]。ただし、従来の研究では、農山漁村のツーリズムの構築にあたって、観光商品が如何にして生まれ、地域住民が観光商品の開発にどう関わってきたのかに関して、政府や観光業者の視点での研究はあるが、「在地の側」からの実践的な事例による研究は見当たらない。本節では先行研究の不備を補って、漁村のツーリズムに焦点をあてると共に、戦跡などダーク・ツーリズム（dark tourism）の事例を取り込んで考察する。

本節では、最初に漁村の観光産業の促進について検討する。筆者は 2003 年から旅順周辺の幾つかの漁村に関して継続的に調査を行ってきたが、ここ数年の間に漁村の生々しい変化を目の当たりにし、変化の激しさや問題点の増加を実感した。1978 年の経済改革開放後、この地域では 1980 年代初期に人民公社が解体され、生産請負政策を実施し、個人単位の漁撈活動に携わる人が多くなってきた。1980 年代は漁撈資源が豊富であったため、漁民の収入は一気に上がったが、その後は内陸から大勢の外来者がきて漁撈活動に参入し、競争が激化した。従って、現在漁撈に従事しながら、水産業や農業、観光業などに関わる仕事を兼業する人が増加してきた。こうした変化の状況の中で漁村地域を考察してきた筆者も視点を大きく変えて、観光開発に注目した。本論は主として 2011 年 8 月から 9 月中旬までと、2012 年 2 月下旬から 3 月までの 2 回の現地調査に基づいている。

観光に関して地元の人々が最初に目を向けたのは豊かな自然と独特な環境であった。2000 年代に入ると観光開発が大規模に推進され、観光ブームは旅順市内だけではなく、周辺の漁村地域にも広がってきた。特に 2000 年代半ば以降は、「漁撈資源の枯渇、漁民生活の貧困化、漁村経済基盤の脆弱」といった「三漁問題」が顕著に現れ、漁民の生活が大打撃を受け、身の回りの自然環境を観光資源として開発できれば、村の経済の活性化に繋がると考え始めた。地域の人々が精力的に観光開発に取り組んだ。旅行会社は旅順の観光を宣伝する際に、歴史遺跡以外の観光商品を掘り起し、観光資源に取り入れてきた。例えば、老鉄山自然保護区ツアー、老鉄山温泉健身ツアー、龍王塘桜観光ツアー、東北民俗風情ツアー、イチゴ狩りツアー、さ

くらんぼ狩りツアーなどがあげられる。これらの観光商品を生み出した背景には、試行錯誤を続けてきた地元民の努力があった。どうすれば観光客にその魅力を感じさせ、長く逗留して貰えるかが地元民にとって大きな課題となっている。既存の歴史遺跡以外に、観光資源を更に開発しなければならないという意識が浮上した。

第２節　桜と自然保護区

１　龍王塘桜花園の観光

旅順での地域観光の展開において、観光商品の開発や観光客への宣伝に積極的に取り組んできた龍王塘桜花園の事例を考察したい。龍王塘は大連と旅順の真中に位置し、南側は黄海に臨んでいる。大連市内から旅順南路に沿って西に 30ｋｍの所に位置し、大連市内よりバスで 40 分ほどで比較的交通が便利である。漁村の海岸線は 31 ㎞あり、漁撈が盛んな土地である。年間平均温度は 10.6 度で、林檎やさくらんぼなど果物の産地で、龍王塘鎮官房村に「桜花園」があり、近年は観光地として有名になった。

毎年春になると、龍王塘桜花園には大連や東北地方の観光客が大勢集まってくる。中国国内で最も多くの桜が植えられ 1500 本ほどあり、ピンク、白、黄、緑などの色彩豊かな様々な樹木が総計 8000 本ほど植樹され、「中国第一桜園」と称されている。1950 年代から、周恩来、朱徳、宋慶齢など著名な政界人が訪れていて有名であった。近年になって龍王塘桜花園を訪れる観光客は、20 年前の十数倍にもなった。2009 年に旅順の対外開放によって戦跡ツーリズムを推進し、龍王塘桜花園と組み合わせて以来、外国観光客も年々増加傾向にある。特に 4 月下旬から始まる黄金週間には、2011 年には一日平均 2 万人以上の観光客が訪れ、花の香りが漂う龍王塘桜花園の中で、昼食をとりながら花見を楽しむ人々で賑わった。

ただし、近年はマイカーで花見に行く人が徐々に増加し、桜の満開の時期には渋滞が続く。交通の利便性を図るために、大連市内から電車の延長工事が進められている。龍王塘桜花園は龍王塘ダムの反対側に位置し、「龍王塘ダム公園」とも呼ばれている。実は龍王塘ダムは日本植民地時代の 1920 年 8 月に当時の関東庁が主体となって、当時の工事費用で 190 万円余り[35]を投じて 1924 年 3 月に落成した（旧

[35]1924 年頃の人件費は大工 80～2.00 円/日、瓦職 80～2.50 円/日、石工 80～2.50 円/日、土工 60～1.50 円/日であった[遠藤 1932]。

名：官房水庫、現名：龍王塘水庫)。堤防は石とコンクリートで造られ、全長は 326.2m、高さは 37.9m、ダムの面積は 37.65 ㎢、最大の蓄積量は 1578 万㎥である[36]。龍王塘桜花園の始まりはダム湖に隣接して作られた広大な日本式庭園に遡る。1926 年に日本から 4000 本の八重桜が移植され、ピンク、白、黄、緑、藍など色とりどりの美しさであったという。長い年月が経過して、当時の樹木は 10 本ほどになってしまった。現在、龍王塘桜花園で最も観光客の目を惹くのは樹齢百年以上の白木蓮(写真 16) 、中国名では「星花玉蘭」で、約 18 枚の花弁があり、花は菊のような姿で、毎年春一番に咲き「望春花」ともいう。1988 年 7 月に中国国務院環境保護部が「珍稀瀕危保護植物名録」に登録した。この木は 1926 年に東京から大阪経由で龍王塘桜花園に移植されたもので、植民地時代の名残である。ポストコロニアルの遺構を再生させて観光地に仕立てたのである。

ダム公園は戦争後は荒廃していたが、1990 年に観光地として活用するために、貴重な樹木を 8000 本植えて整備した。そのうち最も多いのが桜木で 1500 本、その他は、杏、辛夷、連翹、桃、梅から構成され、特に春に開花する樹木が多い。有名な白木蓮の隣にも若樹が二本植樹された。ダム公園は龍王塘桜花園として有名になり、その後は毎年たくさんの観光客が訪れ、人気が高まってきた。しかし、「桜花園」の名称は桜を焦点化したキャンペーン実施後の 1998 年以降に広まった新しいものである。こうして地域観光化の推進のために、植民地時代に造られた場所を新たに整備の対象として魅力ある

---

[36]龍王塘ダム公園は 1920 年代の日本統治時代に造られた植民地遺産である。ダムの設計者は福岡出身の倉塚良夫で、北海道大学に勤務し、日本近代土木建築界の大物であった。藤井肇男編『土木人物事典』2004 に氏の写真や業績やデザイン図などが掲載されている[王艶平 2008：22]。龍王塘桜花園での現地調査では、龍王塘ダムの反対側の真中は無水の河で、東側は桜花園と日本村、西側は植物園と中国庄となっていた。この配置の構図は、周恩来元総理が日中関係を喩えた時に言った「一衣帯水」が想い起こされる[王　艶平 2008：23]。桜花園にはこの言葉の含意がうまく反映されているようである。桜花園は全てが完成するには至っていない。構図通りに実現できれば、中国と日本の交流を象徴するとして観光資源化による経済的効果が期待される。

観光資源に変貌させた。現在、ダムの堤防から眺めると綺麗な龍王塘桜花園の風景が視界に飛び込み、赤松で造られたオリンピックの五輪を表す立派な造型(写真 17)が人目を引く。ここには「平和」の願いが籠められている。実はこの公園は、中国と日本は「無水の河」を「一衣帯水」の海に見立てて対峙し、共に仲良くするというメッセージが籠められていた（図 13)。

写真 16　百年白木蓮

写真 17　龍王塘のオリンピック五輪の造型

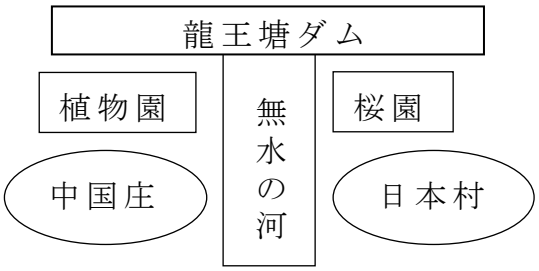


図 13　龍王塘桜花園の「一衣帯水」配置の構想図

出典：[大藪・大内 2008]

大連や旅順などは植民地や戦争に関わる土地であるからこそ、友好の場所として新たに観光地として生まれ変わらせる必要性があったと土地の人々は言う。この地に籠められたメッセージは「平和」であり、観光は平和を前提としなければ成り立たない。

観光開発のために龍王塘の人々は色々なアイディアを試してきた。1989 年に旅順口区の人民政府は、4 月 20 日前後の桜の花の満開時に合わせて、第一回目の「桜の旅」のキャンペーンを実施したが、当時の龍王塘桜花園には桜木が少なく、観光が一般国民の間にまだ普

及していない時代だったので、個人の観光客の数はほとんどなく、来訪者は主に会社などの団体旅行者であった。経済的な効果も余り生み出せなかった。この教訓を生かし、1990 年に管理部門は龍王塘龍王塘桜花園に新たに 8000 本ほどの植樹を行ったが、効果は徐々に表れた。1998 年に旅順と龍王塘の人民政府は、全国の観光年のキャンペーンであった「華夏城郷游」に合わせて、「大連華夏城郷游」とし、地域の特色として「旅順口の桜の旅」を加えた。「98 大連華夏城游と農村遊―旅順口桜の旅―」で、桜の開花状況に応じて 4 月 25 日から 5 月 10 日までの間に観光客を誘致する企画を打ち出した。この地の観光化は 1998 年に本格的に始まったと言える。目的は都会の観光に農村の観光、「郷村観光」を加え、主に地元の資源を用いて、都会と農村の特徴となる民俗風情に価値を見出し、観光客を誘致して旅順の経済発展を促進することであった。この年に大連の他、瀋陽、本溪、鞍山、丹東など都市でも「桜の旅」のキャンペーンが繰り広げられ、数万人の観光客が来園し、地元に大きな経済効果がもたらされた。

表 22　旅順・大連の観光キャンペーン

西暦	主題名
1998	98 大連華夏城游と農村遊―旅順口桜の旅
1999～2004	旅順口区「桜の旅」
2005～2008	旅順口区「桜花節」
2009～現在	中国大連(旅順)国際桜花節

出典：龍王塘街道委員会『龍王塘概況』により筆者が作成

これに味を占めた観光局は、桜の「花見」が重要だと考え、1999 年には「旅順口区『桜の旅』」というキャンペーンを展開し、2004 年に至るまで、毎年 4 月下旬から 5 月上旬に「桜の旅」のキャンペーンが継続して行われた(表 22)。2005 年は、旅順口政府は「桜の旅」を「桜花節」、つまり「桜祭り」の名称に変更した。「旅」を「祭り」に改名し、年中行事に組み込んで一層の拡大化を図ったのである。

2005 年は第一回「桜花節」で、龍王塘桜花園は賑わった。また 2008 年は「桜でオリンピックを迎える遊園大会」と「春の旅特色遊」を同時に宣伝するキャンペーンが行われた。中国国家旅游局は 2008 年を「中国オリンピック観光年」と定めており、これに関連させた

企画で、見事に成功した。龍王塘桜花園の影響は各地に広がり、大連市内の各地にも桜が植樹され、大連市内の桜花園も開園してオープニング・イベントが開催された。2005 年のイベント開催にあたっては「広、新、好、穏」の四文字でその趣旨が表された。「広」は広範囲に宣伝すること、「新」は観光資源に新機軸を導入し、龍王塘桜花園の以外の新しい桜花園にも重きをおいて宣伝すること、「好」は観光スポットのサービスなどソフトの面にも力を入れること、「穏」は観光中の安全が第一であることを意味する。この新しい理念のもと、2008 年には龍王塘桜花園を訪れた観光客は 10 万人以上に上り、観光収入は百万元以上に達した。桜を焦点にした観光開発は見事に成功したのである。

２　2009 年以後の旅順観光

2009 年 11 月、旅順口区が全面的に外国人に開放され、軍事禁区以外は自由に入れるようになった。ここには中国海軍の関連施設があり、これ以前は「二〇三高地」と「水師営」の 2 ケ所以外は一般公開がされておらず、市街にも入れなかったのである。2009 年 3 月 20 日に開催された開放にあたっての説明会では、2008 年の区の GDP は対前年比 24%以上の伸びを示し、外資企業 230 社が進出し日系も 76 社含まれるとし、今後の更なる投資を呼びかけた。観光開発もその中に組み込まれ、大連市政府は外国人観光客を誘致するために、大連市旅游局は、2009 年には「旅順口区桜花節」を第一回「中国大連(旅順)国際桜花節」に変更し、外国への宣伝にも力を入れるようになった。期間は桜の開花に合わせて 4 月 26 日から 5 月 11 日までであった。つまり、旅順と大連の双方の「桜」を強調し、「旅」ではなく「祭り」(節）として祝祭色を強めたのである。そこには日中友好の象徴として「桜」を設定し、「花見」好きの日本人観光客を呼び込もうという意図もあった。「国際桜花節」の主会場は、日露戦争の激戦地であった「二〇三高地」の南面山麓にある旅順口国家森林公園内の「旅順桜花園」であった。ここは、旅順口区人民政府の管理下にあり、既に 1993 年には、植民地時代の旅順の小学校と中学校のＯＢを中心とする旅順児童教育後援会が、日中友好の象徴として桜 1200 本を寄贈していた。さらに株式会社ジャルパックが 2009 年に「中日友好桜林」造成に乗り出し、日本航空と協力し、旅順二〇三景区内の 23.3 万㎡の敷地に 2,000 本の桜を植樹した。日中友好のために中国屈指の「桜花園」を建造し、大連市旅順への観光客の呼び

込みの起爆剤となることを目指した。2009 年 8 月 8 日には、大連日航ホテルで旅順口区人民政府の恵区長立会いの下に、大連旅順旅遊集団と、日本航空、ジャルパック、大連東北国際旅行社、大連ライオンズクラブの間で、建造に関する合意が締結された。ジャルパックは、2009 年の 10 月～2011 年 4 月の期間に 2000 名の送客を目指したとされる。かつての戦跡の負のイメージを逆転し、観光客による経済発展につなげる試みであった。これに先立って、大連では旅順の戦跡を「世界遺産」に登録申請する動きもあり、様々な要因で申請はしなかったが、目的は観光開発である。龍王塘桜花園に始まった「桜」キャンペーンは旅順の観光の在り方を大きく変えた。

2010 年の第二回「中国大連(旅順)国際桜花節」は、旅順市旅遊局、旅順口区人民政府と国際旅行中国執行委員会による共同主催で、二〇三景区に新しく整備された「旅順新桜花園」を主会場とした。50 万㎡の敷地に、世界各地から 100 数種類の樹木を集め、3000 本あまりの多数の種類の桜の木が植えられ、観光客を呼び寄せた。旅順口区政府はこのイベントのために 1000 万元を投資し、園内と外部の道路や駐車場を改修し、駐車場の周辺に演技区、購買区、料理区を開設し、観光客のために休み場所、買い物場所、特色ある料理などを提供した。料理には初めて桜を使用した食品を取り入れたという。第二回「中国大連国際桜花節」開幕式は、5 月 1 日に龍王塘支会場で開催された。この年は寒波のために通常は 4 月中旬から下旬に開花する桜が遅れて、5 月初旬にやっと咲きほころぶ状態であったが、日本航空協賛で、地元の歌舞団や留学生らの演出が華やかに行われた。今後は定期的に植樹を行って維持するという。日中友好の雰囲気が強くただよう。大連や旅順とその周辺には、大連星海桜花園、労働公園桜花園、中山公園桜花園など多くの「桜花園」があり、連動して観光地化を目指した。この時には、併せて“春の旅”シリーズツアー、老鉄山採茶温泉健身ツアー、東北民俗風情ツアー、科学普及教育ツアー、歴史文化街区ツアー、イチゴ狩りツアーが企画され、2011 年には伴い「ミス・国際旅行 2011 決勝」も開催された。

荒廃していた龍王塘桜花園は、桜を焦点とした観光開発が起爆剤となり、人気のある観光スポットに生まれ変わった。これには国家指導の政策の影響も否定できないが、地域住民が、あらゆる文化を吸収し、あらゆる資源を活用する積極性があったことで可能となった。また、観光産業の推進には適切な「宣伝」が巧みに活用された。中国にはなじみのない桜の「花見」は、日本の影響を受け、観光開

発の進展に伴い、中国にも定着し始めている。龍王塘桜花園は日本を含む外国からの観光客によい思い出を残すものであるだけでなく、中国人観光客の動員も可能にした。龍王塘の観光資源のブランドとして桜は評価されている。底流にある「平和」「友好」のメッセージは 2010 年以後の日中間の摩擦により陰りを見せているが、長い目で見れば、観光の効果は広く深く浸透していく可能性がある。

観光は社会、文化、経済、環境、情報、政治など様々な分野と絡み合っている。観光の推進過程には、国家政策の影響が大きいが、地域社会住民の協力や情報の伝達も見逃してはならない。観光化には来訪を可能にする契機が大事であるが、地元の長い視野を持った多様な要因の組み合わせ方が重要である[前田 1995]。

３、老鉄山自然保護区の観光

旅順近郊には別のツーリズムの展開がある。それは「中国大連（旅順）国際桜花節」に合わせて行われた「老鉄山採茶温泉健身ツアー」である。大連では 1998 年に始まった現地滞在型の「郷村観光」を旅順近郊の老鉄山自然保護区や老鉄山温泉を中心に展開した。郷村観光は既に述べたように英語の rural tourism の中国語訳で、1990 年代に始まり、2000 年代に入って本格化した。中国全体では 1998 年と 2006 年を「郷村観光」のキャンペーンの年とした。改革開放前は、農業や漁業を中心に生活を営んできた農山漁村は、1990 年代以降は観光産業に巻き込まれ、経済の波及的な効果が拡大した。この動きを意識的に推進した結果、従来は観光産業と無縁だった地域が観光地化し、観光に関する認識を変えた。老鉄山自然保護区は、観光資源の開発に積極的に力を入れた郷村の典型である。この地が観光地になったのは 2008 年からで、何の変哲もない日常の自然景観が突如、観光資源とされ、住民の意志とは別に地域経済の発展が優先された。

老鉄山自然保護区は遼東半島の最南端に位置し、蛇の保護区の蛇島と渡り鳥の保護区の老鉄山地域からなる。老鉄山は 1980 年に中国国務院に野生動物保護区と認定され、これ以後は地域の人々による野生動物保護への取り組みが始まった。現在では老鉄山は観光資源と把握され、地域観光産業の重要な柱となっている。

老鉄山は標高 465.6m、緑に包まれていて渡り鳥の重要な生息地で、「鳥の旅館」または「鳥のホテル」と呼ばれている。毎年秋になるとシベリアや興安嶺、モンゴル草原、及び東北地方から多くの鳥の群れが南方に渡る時に、途中の休憩地としてこの周辺で数日間休

み、その後に広い海を渡って南方で冬を過す。春には老鉄山を経由して北方に戻る。昔から老鉄山周辺の約 170 ㎢、中心の 40 ㎢の地域は全て鳥の生息地域で、春と秋には二百十数種類の鳥が一時的に集り、鳥の楽園のようである。その中には丹頂鶴、ソデグロ鶴、鴛鴦など国に保護されている十数種類の珍鳥も含まれる[鉄山街道委員会編 2010]。毎年数千万羽の鳥が老鉄山を訪れ、その後の旅のために体力を蓄えようとする。

この地域は、鳥と切っては切れない縁があり、鳥に関する民俗的な伝承や物語も沢山残されている。この地に伝わることわざに「寧吃飛禽四兩，不吃走獸一斤」（飛ぶ鳥類を 200ｇ食べるとしても、500ｇの獣も食べない）という言い回しがある。この地域では昔から鳥を食べる習慣があり「照雀」（鳥を捕獲する）の習俗が盛んであった。秋の夜に人々は灯火や捕獲用のネットと拳銃を用意して山に登り、夜中にネットで罠を作り、地面や松ノ木の枝にかけて待ち構えて捕獲する。春と秋の季節には、山のあちこちに鳥の捕獲用の灯火が見える。猟師は人間だけではなく、忙しいときには猫も動員し、鳥の捕獲に手伝わせた。ここでは鳥の数が多く容易に捕獲出来たのである。

しかし、80 年代に老鉄山が自然保護区に指定されると、旅順区政府は自然保護区管理部門を設置し、自然環境を破壊する行為を取り締まった。鳥の捕獲行為には罰金が課せられ、地域住民に鳥の保護を呼びかけた。また、小学校から高校まで鳥を保護するボランティアチームを結成し、民間にもボランティア活動を広げたので、昔のように鳥をやたらに捕獲する習慣はなくなった。現在では、鳥は地域繁栄のシンボルとされ、住民たちは「愛鳥護鳥」（鳥を愛し鳥を保護する）の意識を持っている。地域住民は鳥を保護し、観光客によりよい観光資源を提供し、それが全世界の鳥の生態系維持にも繋がると信じている。このような認識は「環境保護」という西欧由来の概念が、地域社会に受け入れられ、鳥は捕獲して食べるものから、一転して保護されて鑑賞の対象になるものへと認識の大転換が起こったのである。その結果、渡り鳥は観光資源となり、観光による地域経済の活性化に役立つことが、今後も大いに期待されている。

自然保護区の老鉄山には、さらにもう一つ「黄海・渤海境界線」という景勝地があり、観光客の関心をひきつけている。老鉄山の西南側が海に没する所は遼東半島南側の最先端で、「黄海・渤海境界線」の石碑（写真 18）が立ち、黄海と渤海が融合している。ここの景観は

「黄海不黄、渤海不藍」(黄海は黄色くなく、渤海は碧くはない)という珍しい景観になっている。空は青いのに、海を眺めると、少しぼんやりしていても、黄海と渤海の境界線ははっきりと見える。左側は黄海、右側は渤海である。風の日になると色が入り混じる。この絶景の描写には「一山観二海」(一つの山に二つの海が見える)という表現が使われる。

さらに老鉄山の海抜 86.7mの岬には百年灯台という清代に造られた灯台がある。百年以上の歴史を持ち、1894 年の日清戦争と 1904 年の日露戦争を経験したものの、依然として往来の船を誘導している。灯台は 1893 年にフランス人が内装の機械を製造し、イギリス人が据え付けの工事を担当して完成させた[鉄山街道委員会編 2010]。灯台の高さは 14m、全体は円柱体で、灯台の上から四方八方を見渡せる。1997 年に世界航路標識組織によって、「世界名塔」と指定され、現在では「中国第一灯台」と呼ばれている。2000 年に「黄海・渤海境界線」と、百年灯台(写真 19)は大連市新八景の一つに指定された。現在では、ここを訪れる数多くの観光客は大自然の雄大さに感動する。

写真 18　黄海・渤海境界線の石碑

写真 19　老鉄山百年灯台

観光資源は一般的に自然観光資源と人文観光資源に分けられるが、老鉄山自然保護区には自然観光資源と人文観光資源の双方が備わっている。「天下奇観」と称えられる「黄海・渤海境界線」と、原始の生態を保つとされる「鳥の楽園」は自然観光資源となり、悠久な歴史を感じさせる「百年灯台」は貴重な人文観光資源となっている。両者は観光客に自然景観の感銘を与えると同時に、歴史の豊かさも感じさせることになる。

しかし、2008 年頃まではこの場所はさほど有名ではなく、旅順の対外開放以後に、観光コースに組み入れられて「観光地」になったのであり、新しい観光資源である。2008 年に老鉄山地域は大連市に「特色のある観光郷鎮」に選ばれた。この場所に観光資源としての利用価値を見出したのは、2009 年の旅順の外国人への開放に伴い、地元の人々が老鉄山自然保護区を観光資源として開発すべきであると認識してからである。観光客を受け入れるのに相応しい大規模な修繕工事が始まり、自然保護区の入口に正門が建てられ、以前の泥道はアスファルトに舗装され、新しい道路が完成した。雨天でも観光できるように屋根のある見物台が建てられた。同時に地域の収入源を増やすため、観光客は無料とはせず、旅順区以外からの外来の観光客は一律に 20 元の入場券を払うことになった。2013 年現在では旅順を訪れる観光客で老鉄山自然保護区を観光しない人がいないほど有名な観光スポットとなっている。

老鉄山自然保護区の環境保全には、地域住民の全面的な協力がある。地域住民には全く理解不能な「環境保護」という概念が現れたことで、それまでの生活は大きく転換した。「環境保護」の概念が現れる前は、野鳥は自由にとることが出来たし、生活の一部であり、時には乱獲に至ることがあっても規制は緩かった。しかし、老鉄山地域は自然保護区に指定されて以来、一転して住民の間に環境保護の意識が高まり、自然保護区への破壊行為の防止が可能になった。しかし、住民にとっては不本意なこともあった。こうした規制は、観光化に伴う老鉄山自然保護区と旅順口区政府の宣伝と効果的な取締りの実施の結果であったからである。地域ツーリズムの構築においては、突然に外部から強制される新たな概念と制度化によって、大きな変化が現れる。ここでは地域住民の協力が不可欠であるが、当初は住民の意志は主導権がない。行政側との接点では様々の問題が浮かび上がる。老鉄山では二つの保護区のうち、蛇の保護区である蛇島は個人の自由観光は制限されて、観光開発の恩恵には預からなかった。「鳥の楽園」は開発の恩恵をこうむる場所になった。観光資源とは外部者の視点で、恣意的に選択され、その後は長期にわたる交渉が続き、経済の論理に押し負かされることが多いのである。

第３節　温泉と郷村

１　老鉄山温泉

2000 年代以降、特に 2009 年の外国人への旅順開放以降は、旅順

周辺の漁村は独特な観光資源に恵まれているという資源化の観点から見られるようになった。ユニークな観光資源を如何に活用し、魅力を引き出すかが、今後の地域のエコ・ツーリズムの推進にあたっての重要なポイントと見なされるようになった。国連は 1992 年にリオデジャネイロで開催された地球サミットで、21 世紀の地球環境保護のための「アジェンダ 21」で、2002 年を「国際エコ・ツーリズム年」と定めた。これは「持続可能な開発」(sustainable development)として、観光を組み込む試みで、エコ・ツーリズムの概念が中核に据えられた。エコ・ツーリズムは西欧で作られた概念で、地域の自然や文化を深く理解し、保全と活用を通じて観光を持続的に発展させる地域主体の開発として奨励された。その中核には地域の自然や文化を体験して理解を深めることで、地元の人々との交流が望ましいとされた。世界各地にエコ・ツーリズムは広がったが、中国では 1992 年以来、独自の形で、エコ・ツーリズムを取り込んできた。

前田勇は「観光対象」を「観光資源」と「観光施設」に分類し、観光資源を「自然観光資源」、「人文観光資源」、「複合型観光資源」に分けている[前田 1995：123]。人文観光資源は文化資源といってもよい。実際には、双方が相互作用しあって複合型観光資源が多い。エコ・ツーリズムでは自然観光資源が対象となる割合が高いが、単独というよりは実際には文化観光資源との相互作用の中でセットの観光資源になっていることが多い[敷田・森重 2011：30]。自然観光資源と人文観光資源は観光産業の主軸であるが、媒介的な機能が果たされている「観光施設」や「エコツアーガイド」も重視すべきである（図 14)。豊かな自然観光資源と独特な人文観光資源に富むとされる旅順は、今後は観光産業の展開の大きな可能性を秘めているが、同時に観光資源と観光客の媒介機能を果す「観光施設」が殆どないのも現実である。この状況を改善するために、地域の人々は様々な方法を模索している。本節では老鉄山温泉の事例を中心に、観光施設の建設及びその役割に関して考察してみたい。

老鉄山温泉は遼東半島の西南端の尹家村に位置し老鉄山自然保護区のすぐ近くにある。大連市内から 55 キロで、市内から老鉄山温泉までのシャトルバスが一日に二回往復している。大連市内の観光客もよく利用し、平日の料金は大人 128 元、子供は 78 元で、無料で一食が提供される（大連老鉄山温泉健身休閑有限公司発行のパンフレット)。団体や祭日の場合は割引する時もある。旅順から行く場合は路線バスが三本通っており、交通はかなり便利である。現在では中

国国内の観光客だけではなく、日本やロシア、韓国の観光客もよく利用する。老鉄山温泉は 2002 年に日本企業との共同開発で完成した。井戸掘り工程は殆ど日本側に任せ、施設の建設は中国側が担当していた。老鉄山温泉の正門は目立たないが、中に入ると 14 棟の建物が並べられ、結構広い空間である(写真 20)。温泉施設の敷地面積は 6 万㎡で中には和式温泉、露天風呂(写真 21)、室内大浴場、和式畳室、伝統中国室、温泉別荘などがある。温泉は地下 1500m 掘削した所で 30 種類の鉱物を含む天然温泉が湧出したという。

老鉄山温泉は弱アルカリ性の単純温泉で、温泉水は無色で透明度が高く処理を施さなくてもそのまま飲用できる。源泉の温度は摂氏 58 度で、一日当たりの湧出量は 300 トンぐらいである。温泉の質は柔らかく、刺激が小さいために美人湯と呼ばれ、女性には人気がある。さらにこの温泉水は料理に使用してもよく、鉱物が食材に溶け込めばご飯も柔らかくより美味しくなるとガイドサイトに紹介されている[37]。

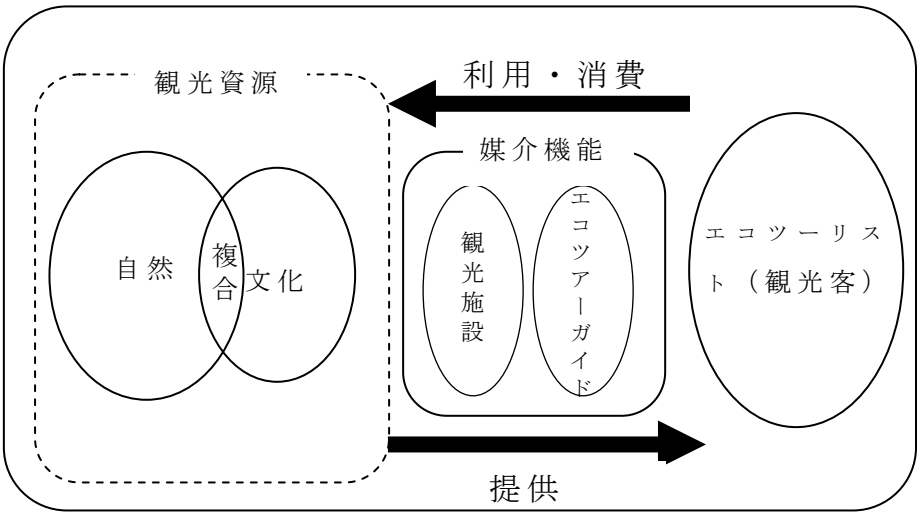


図 14 エコ・ツーリズムにおける観光資源と観光施設及びエコ観光客の関係

出典：[敷田・森重 2011]

[37]老鉄山ウェブサイト。http://www.ltswq.com.cn。最終アクセス。2013 年 12 月 30 日。

写真 20　老鉄山温泉全体風景

写真 21　老鉄山露天風呂

老鉄山温泉は他の温泉と同じく神経痛、筋肉痛、関節痛、肩こりなど様々な病気を治療する効果があるとされるが、観光客が温泉を訪れるのはそれだけの理由に留まらない。

旅順の観光は半日周遊コースを利用することが多く、大連の観光が中心であった。旅順には観光資源の魅力が欠けていたこと、2009 年以前は日清戦争と日露戦争の戦場遺跡としての過去の重みがあり、外国人が自由に観光できなかったという政策の影響も考えられる。旅順には戦跡や記念碑や歴史博物館が多く残されており、2009 年以降は多くが観光スポットとなった。しかし、旅順の観光は植民地や戦争の歴史に関わるものが多く、観光客は厳粛な雰囲気のなかで見物するので、心が痛むような「負の感情」が湧き起こり、旅行の印象が暗くなりがちであった。観光客の歴史遺跡に関する認識はばらばらで、「負の感情」への対応が十分でなく、旅順観光への「期待」は実際の体験と大きなズレが生じ、満足度が低く評判も悪くなった[李・謝 2009：45]。観光客の多くは半日で旅順を観光した後に、すぐ大連に戻って宿泊するのが一般的であった。旅順が観光客に与える印象を改善しなければ、観光客が二度と足を運ぶことはない。こうした危機意識の下、旅順と組になる気分転換の場として老鉄山温泉が誕生した。老鉄山温泉の社会的文化的な意味は単なる観光の手段としての温泉施設の場を遥かに越えていた。

現在、温泉は観光客のリラックスの場、気分転換や、観光客の間に交流を促す場として利用されている。また、中国人観光客と日本人観光客の相互に異文化を体験させ、相互に自国文化を再確認する場所となった。1990 年代以降、日本の観光のキーワードに「癒し」が登場した。海外の観光も、忙しく観光するものからのんびりとくつろぎ、心身を癒すものに変わりつつあると山下晋司が指摘してい

る[山下 2007：6]。老鉄山温泉はまさしく観光客の時代による変化に応じて造られた観光地で、「癒し」の要素が強い。今後も癒しのツーリズムが好調であれば、需要は大きく伸びることが見込まれている。老鉄山温泉は観光客に楽しい旅を提供することを狙いとした。旅順の観光も老鉄山温泉をはじめとして、食事や宿泊も旅順の周辺の施設を利用させて、出来るだけ長く滞在するような工夫を凝らしている。また、この地を観光する頻度が高いと予想される日本人観光客を満足させる桜の花見と温泉の寛ぎの場として適切だと考えている。近年では老鉄山温泉の知名度も徐々に高まってきた。老鉄山は特定の公共空間が同時に複数の機能や役割を果たす場として期待され、地域観光の象徴となった。観光施設は単なる食事と宿泊の対応に終始する接待の場だけではないことをこの事例は示している。

２「農家楽」と「漁家楽」

観光資源を観光客に提供する場合に、観光施設が果たす「橋渡し」の役割は重要である。観光地に立地するホテルや旅館はその担い手であるが、「郷村観光」の隆盛にともない、民家に宿泊することも重要な手法として登場してきた。1998 年に国家旅游局はこの年の旅行キャンペーンを「華夏城郷游」と定め、「吃農家飯、住農家院、做農家活、看農家景、享農家樂」（農家の料理を味わい、農家に宿泊、農作業に参与、農村の景色を見物、農家の楽しさを享楽する）というキャッチコピーが打ち出された。これがきっかけで、「中国郷村観光」という新しい産業がこの地でも推進されてきた。中国では観光客が農村や漁村を訪れ、地元料理を味わい、地元の人々と一緒に農産物の収穫や水産物を捕獲することを体験する観光がブームになってきた。観光客にとっては民家の宿泊は、農村や漁村の日常生活を体験するのみならず、地域文化に触れ合う貴重な機会である。これは「農家楽」または「漁家楽」と呼ばれ、農村や漁村の伝統文化への理解を深める新しい観光スタイルとして観光客の間で人気を博している。

「農家楽」や「漁家楽」はレクリエーション観光の一種で、「農家」「漁家」という普通の人々の家を「観光施設」とし、これを媒介として農山漁村のツーリズムの推進を目的とした。中国の「郷村観光」の内容は、欧米先進国で提唱されたグリーン・ツーリズム[green tourism]と類似しており、農山漁村の自然景観や人文景観を観光の対象として捉え直した[張広帥 2010]。英語の green Tourism は有機農法や環境に負荷の少ない宿泊施設、美しい自然環境、さらには環

境教育など、環境への配慮が強調された観光である[堂下 2007:115]。一方、中国の「農家楽」「漁家楽」は環境への配慮も強調するが、特に農家の素朴な生活環境を体験し、農山漁村の民宿に泊まって相互に交流を深め、農家や漁家の伝統的な生活習慣や文化をよりよく理解することが期待される。欧米のグリーン・ツーリズムと類似するが、現地での宿泊にこだわる中国型グリーン・ツーリズムへと変貌してきた。これと似た動きにエコ・ツーリズムがあり、「環境保全」を強く意識化する運動で、「生態観光」として根付いてきた。

中国で最初に「漁家楽」を推奨したのは舟山群島で、1999 年 7 月 31 日舟山群島の嵊泗地域で漁民が五隻の船で上海からの観光客を案内し、漁撈活動などを体験させるという観光内容が盛り込まれていた[黄薛艶・周寧 2007]。これ以後毎年の休業期に「一日漁民になる」というスローガンを掲げ、漁村への観光を呼びかけている。また 2005 年 9 月に舟山群島では東アジア国際釣り大会が行われ[黄薛艶・周寧 2007：32]、その反響は一気に大きくなり、その後は全国の漁村で徐々に「漁家楽」のブームが広がった。

しかし旅順周辺の漁村で「漁家楽」を取り入れたのはその数年後である。最初に流行ったのは「漁家楽」ではなく「農家楽」であった。2007 年に老鉄山郭家村は「農家楽」のキャンペーンを打ち出し、観光客に積極的に農家の魅力を宣伝し始めた。郭家村は老鉄山自然保護区の中心地に位置する約 500 人の小村である。1976 年に郭家村には 5000 年前の旅順最古の村落遺跡[38]が発見され、郭家村の周辺が旅順の発祥地といわれるほど重要な文化財となった。以後、その周辺は自然保護区と定められ、工場や病院などの建設が禁止された。現在でも郭家村の回りには工場が一軒もなく、昔のままの生態系を保っている。経済改革開放後、郭家村は周りのほかの村と比べ、経済的にはるかに遅れをとり、一人当たりの収入は旧旅順口区での最も低い村であった。近年は人口の過疎化も加速している。このような状況を早く改善しなければ、村の将来に危機感が募る一方であったので、2007 年から村人たちはさくらんぼなどの果物の栽培に力を入れ、その後も毎年さくらんぼ狩りツアーなどのイベントを継続して開催している。2009 年に村を訪れた観光客はほぼ四万人以上で「農家楽」による総収入は 165 万元程度であった。2010 年には村で

[38]郭家村遺跡が 1976 年に発見され、下層は 5000 年前の遺跡であり、中層は 4000 年前の遺跡であることが明らかになった。

「農家楽」を経営している４戸が大連市によって模範「農家楽」として表彰された[鉄山街道委員会編 2010]。郭家村のさくらんぼも旅順地域に広がり、地域の名産物になった。

「農家楽」の影響で旅順周辺の漁村でも「漁家楽」が流行るようになった。「漁家楽」は「農家楽」との共通点も相違点もある。内容は漁撈活動の体験や潮干狩り、魚釣り及び魚料理を味わうなど「海」に関わる内容を中心とする。漁家でしか体験できないことであり、特に夏には大勢の観光客が訪れる。「漁家楽」は観光客に漁家の日常生活を体験させ、漁村の伝統的な生活習慣や民俗文化などを理解してもらうことが何よりも重要である。また観光客に自然に包まれている漁村の素晴らしい風景を遊覧して、地域の独特な魅力を実感させる効果もある。近年「漁家楽」を運営している人々は漁村の伝統的な海鮮料理や独自性のある料理に着目し、観光誘致に利用している。その背景には最近では漁村の新鮮な海鮮料理を目当てとした観光客の増加の傾向があり、特に内陸からの観光客は海鮮料理を観光の目玉とする人が多いからである。従って観光客の需要や「食」への嗜好に応じて、新鮮な海鮮料理を提供するのが「漁家楽」の不可欠な条件となっている。例えば老鉄山にある「漁家楽」はフグ（河豚）料理で有名で市内からわざわざ食べに来る人もいる。またこの家では自ら飼育している豚や鹿を料理に使用し、観光客に新鮮な食材を提供するように心がけている。地域の人々は観光客が普段なかなか入手できない新鮮な海鮮品や地域の「郷土料理」を賞味することを通じて地域の食文化の特徴や自然環境の大切さを一層理解できると確信している。「郷土の味」を造ることが大切で、漁村の「体験」や「風景」「食」などがうまく融合すれば、相乗効果によって漁村全体のイメージアップにも繋がると考えている。

「農家楽」「漁家楽」の魅力は何といっても、滞在費の値段の安さである。季節の変動はあって毎月多少は値段が変わる。成都での滞在は一日 40 元～50 元、北京は一日 70 元～80 元であるが[鄒統钎 2005]、旅順周辺の「農家楽」「漁家楽」はシーズンオフには 40 元ぐらいで、最盛期でも 80 元程度である。他の地域の「農家楽」「漁家楽」の観光とはあまり差がない。また「農家楽」「漁家楽」は旅順の近郊に多く、大体市内から 30 分から 1 時間の距離であったので、観光客の往来は非常に便利な所である。値段の手頃さと場所の利便さは今後も「農家楽」「漁家楽」を促進する要因となるであろう。しかし、もっと重要なのは土地の人々との交流であり、お互いが学びの

精神を以て気持を和らげる効果が生まれることである。旅順周辺の「農家楽」「漁家楽」は他の地域よりスタートが遅かったため、経験不足など様々な問題に直面している。特に衛生や通信などは改善すべき点が多々あり、今後のツーリズムを「持続可能な開発」の視点に立って、問題点を克服することが求められている。「農家楽」「漁家楽」による観光ブームは観光産業の新しい出発点となり、今後も農山漁村のツーリズムを推進し、農山漁村の豊富な自然資源を活性化させるとして注目されている。大連・旅順の周辺は当初から「郷村観光」をキャッチフレーズとしていたが、試行錯誤を重ねて多様性に富むツーリズムを作り上げ、観光客の好奇心や要望を満たすように工夫を重ねてきている。

結び

旅順周辺での漁村の観光の事例を中心に述べてきたが、龍王塘桜花園、老鉄山自然保護区、老鉄山温泉の事例を通して、農山漁村の郷村観光、つまり地域ツーリズムの構築において必要なものは何かが少しずつわかってきた。三つの事例をしいて差異化して述べれば、桜花園は観光商品を推進する際の情報発信、「宣伝」や「イメージ造り」が重要であることを伝える。老鉄山自然保護区は「地域住民の協力」がなければ観光産業の推進は難しいことを示唆し、観光客の想いとはズレが発生することに注目した。老鉄山温泉の観光開発にあたっては、自然観光資源と人文観光資源のみならず、「地域交流の場」となる観光施設が担う役割が大きいことがわかった。

鄒統钎は郷村観光の成功の要点を以下の四点にまとめた。それは、①観光地を名目とする場所。②厚いもてなし、「家」の雰囲気がある。③観光客の分配は行政権力が行う。④交通の便が良い、つまり市内から1時間～2時間ぐらいの距離であること[鄒 2005]である。旅順周辺の郷村観光はほぼこの条件を満たしている。しかし、地域観光の展開において最も大切なのは地域の「独自性」のある観光商品を創出することである。「農家楽」「漁家楽」のように地元に滞在すれば、地域の伝統文化に触れる機会を得ると共に、新鮮な食材の個性を生かした食事が期待される。エコ・ツーリズムであれば、自然環境に関して新しい保護の形を考える。観光による地域振興を目指すならば、地域の誇りを見出だすこと、新たな交流の機会を創出すること、地域間の交流と協力を活性化することなどを目指している。魅力のある観光資源は観光客に忘れられない体験を提供し、地域社

会への貢献も大きい事は否定できない。

旅順とその周辺地域の観光振興は、2009年以後、大きく性格を変え、古戦跡見学などに偏っていた集客姿勢を大きく改善することが期待されている。ダーク・ツーリズムとの調整が旅順の課題である。観光産業が地域社会に与える経済的社会的な効果は、「持続可能な開発」という理想を造りだすのだろうか。政治情勢の変化に敏感な状況にある旅順や大連の観光は、不確実性も含み込んでいるので、その理想を見出すか否かはまだ不確定である。

最後に観光産業の推進が地域社会に齎した効果を以下にまとめた。

①自然観光資源の持続的な利用にあたっては、住民がこれまで持っていなかった自然環境を保護する意識を浸透させる必要がある。地域の人々が自然環境の保全に積極的に自覚的に取り組んだ結果、自然をあるがままの状態に保つことが可能となった。

②近年になって海洋資源の減少が顕著になり、地元の漁村に生きる人々の漁撈による収入は以前より少なくなってきた。しかし、これと代替・補完する形で漁村観光を資源とする視点を導入することで、漁村地域の開発は新たな局面に移行しつつあり、地域経済の活性化を促進し、漁撈以外の収入が増えてきた。

③観光産業の振興によって、地域雇用の問題を解決することは社会の安定にも繋がっていると考えられ、少しずつ雇用が安定化する方向に向かいつつある。

④観光目的で訪れる観光客は、漁村の新鮮な水産品や農産品に魅了され購入するときもある。観光客を通して地域の販売網も広げる可能性がある。漁民たちは商業民でもあり、経済の変化に関しては農山村の住民より敏感で巧みに対応する。

⑤大連や旅順市内への移住現象が近年になって顕著に現れている。地域観光の振興によって、地域人口の過疎化を阻止することは、これに対する最善な政策であろう。

旅順とその周辺は、2009年の外国人への開放によって、生活空間に新たな意味を見出し、観光資源として利用することを積極的に考えるようになった。地域社会の発展にあたっては、資源化できると考えた地元の独自性という宝物を、いかに探し、磨き、鍛え、傳え、誇るものに変えていくかが問われる。旅順における観光資源は、過去と切り離すことは出来ないが、新たな物語を育むことで、ゲストとホストの相互理解へと向かう。旅順は歴史と現在をよりよく理解するための重要な観光地になる可能性を持つ。

第７章　民間信仰の復興と観光化―媽祖と龍王と観音

はじめに

経済改革開放後、経済成長を追及する市場経済の導入に伴い、イデオロギー的な枠組みに影響を与える文化政策は徐々に緩和され、伝統文化や民間信仰などの復興事業が進められるようになった。特に筆者がフィールドを行った旅順周辺の漁村地域では漁撈信仰が雨後の竹の子のように復興し、再び活気が溢れるようになった。

漁村地域では漁撈活動が常に危険にさらされているため、漁民にとって漁撈信仰はとりわけ重要である。現在中国では神仏や祖先への崇拝は個人の自由活動だと認識されるが、人民公社時代、特に1963年の「破四旧」[39]運動が始まって以来、漁撈信仰はほかの民間信仰と同じように、すべて「牛鬼蛇神」（得体の知れない妖怪）として批判され、漁撈信仰に関わる活動は一切厳しく禁止された。神への祭祀や祖先祭祀の行動が発覚するとすぐ告発され、検挙に遭っていた。文化大革命の時代は、都市から農村までが一時的に「無神論」一色であった。しかし、漁民の心意を反映する漁撈信仰は簡単に根こそぎにすることはできない。代々伝承されてきた信仰は漁民の日常生活の中に深く浸透している。人民公社崩壊後、漁村の漁撈活動は再び盛んになり､漁撈活動は漁民の主な収入源となっているので、漁民たちはいつも大漁であるよう神や祖先への加護を求める心意は復活し、祭祀行動も顕著に見られる。特に近年、民間信仰を観光資源にする傾向があり、地域観光の推進によく取り上げられるようになった。漁撈信仰も脚光を浴び始めた。地域住民は漁撈信仰を漁民の信仰に留めず、より多くの人々に知ってもらうために、観光客への宣伝や観光による効果を重視するようになった。

漁撈信仰は地域ごとに、崇拝対象や内容が異なっている。遼東半島では漁撈に関わる信仰は様々であるが、その中で最も盛んなのは媽祖信仰と龍王信仰である。本稿ではこれらの民間信仰の歴史的な変遷及び復興の実態の考察を通して、漁民の日常生活に深く根付いた「媽祖」と「龍王」の特徴や位置づけを明らかにし、信仰と漁撈活動との結びつきを究明する。また漁撈活動に直接に影響を与えて

---

[39]「破四旧」は1963年に起こった、旧弊な思想、文化、風俗、および習慣を捨て去る運動を意味している。

いないものの、漁村社会の日常生活の中に広く信仰されている観音信仰に関しても考察を加えたい。数多くの民間信仰を通して宗教文化と観光産業の関連性を探り、民間信仰を観光資源とする持続的利用の可能性を論じたい。

第 1 節　宗教文化と「観光」

観光に関する研究は様々な視点から取り上げられる。観光学は勿論、経済学、社会学、文化人類学、心理学などが全て観光を研究対象とする可能性がある。しかし、中国では 90 年代までに宗教と観光に関する研究はあまり蓄積されてこなかったが 2000 年代には急速に増えた[宗暁蓮　2009]。他方、宗教学や宗教社会学は、中国での観光に関心を向けなかった。日本でも観光人類学、観光民俗学、観光社会学、観光地理学の研究領域はあっても、「観光宗教学」はない[桜井・三木 2007：170]。宗教学や宗教社会学には、観光を正面から考えるという問題意識は希薄であった[山中 2012：4]。しかし、聖地への巡礼は参詣と物見遊山と呼ばれて、観光的要素が色濃く見られる[中山 2012：4]。こうした動きの中で、観光と宗教の相互関係を明らかにする研究が近年盛んになってきた[山中 2012。駄田井 2012]。

旅と宗教の関わりは古代に遡る。人間が生活に必要な食料や物質を手に入れるために、「旅」は不可欠である。また精神的な向上を得るために、巡礼や参詣など信仰の「旅」も欠かせない。旅の最も古いものは「信仰」のためであったという説もある[前田 1995：19]。旅を観光の原型と見れば、長い歴史を持つと言っても過言ではない。移動する文化が近代になって観光として形成されたのである。

1990 年代にはヨーロッパの観光研究の中で、「宗教ツーリズム」という言葉が使われ、その動向やモデルに関する研究が盛んになった。注目されるのはスミスの宗教ツーリズムのモデルで（図 15)、観光客の巡礼動機に従って幾つかのパターンに分けた[Smith 1992:4]。「聖」の宗教と「俗」のツーリズムは一見矛盾しているように見えるが、信仰と行楽の両方の目的を持つ観光客が多数いるという観点から見直せば、ツーリズムと宗教がうまく融合していることが読みとれる。また、中国の場合は、社会主義の体制であることから、宗教文化を観光資源に取り入れる動きがあり、90 年代以後「宗教旅游」（宗教観光）や「宗教文化旅游」（宗教文化観光）と呼ぶ観光も現れるようになった。宗教文化を中心とする観光対象は、寺院・

彫刻、壁画など物質文化に関わるものと、経典・伝説・儀礼など精神文化に関わるものに分けられる。宗教文化を観光資源として観光市場に盛り込み、宗教をはじめとする伝統文化の魅力が多くの観光客に感受されるようになった。中国では 90 年代から寺廟の復興や民間信仰など伝統文化の再生が全国的に進められ、特に経済的に遅れをとった農村部や内陸部で伝統文化の復活が顕著であった[東 2001：33]。ホスト側から見れば、観光による地域社会の経済的活性化への期待感があり、伝統文化の復興による地域的アイデンティティの構築や地域の求心力を高める狙いも託された。他方、都市では仕事のストレスや人間関係の葛藤からの開放を宗教文化に求める傾向を強めたゲスト側からの要望もある。生活の断片化、皮相化、非人格化などの感情から逃れて、現地の人々の生き生きとした生活を体験したいという動機が宗教ツーリズムに向かわせるのである[山中 2012:17]。ホスト側の期待とゲスト側の願望がうまく合致して、宗教ツーリズムの展開が可能になったと言える。

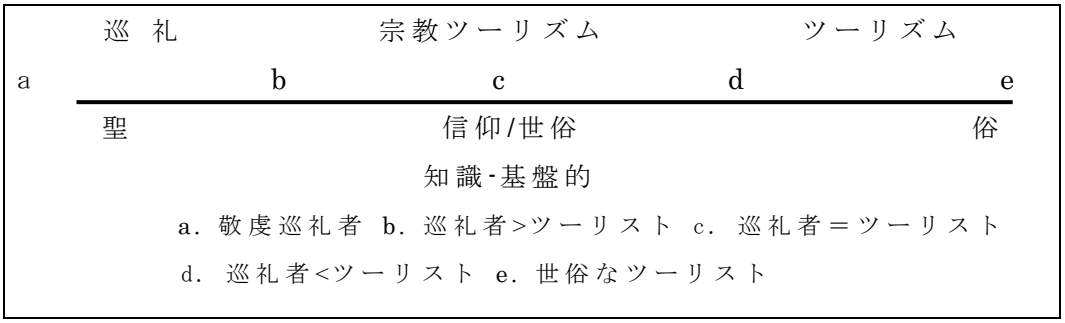


図 15　巡礼者－ツーリストの道[Smith 1992:4]

聖地を訪れる観光客は全てが誠実な求道者ではない。ただし、伝統文化に興味があり、精神的な癒しや解放感を得るために訪れる人が数多くいることも確かである。観光資源になる宗教文化は歴史性と精神性に体験を共有する場としての意味が加わり、宗教の内容に通じていなくとも観光客としての関心を満足させる[永渕 2007：106]。宗教文化が持つ性格を政府や観光業者は巧みに利用して観光に結び付けようとしている。

第 2 節　「伝統文化」観光推進の背景

1978 年の改革開放政策の実施以降、中国の観光産業は著しい発展を遂げ、様々な観光資源が見いだされ、創造・消費されるようにな

った。高山陽子は観光資源を以下のように分類した[高山 2007:20]。

表 23　中国観光の分類

名　　称	中国語	対　　象
歴史文化観光	人文旅游・歴史文化游	歴史文化遺産
民族観光	民族旅游・民族風情游	少数民族の風俗習慣
エコ・ツーリズム	自然旅游・生態旅游	自然環境
リクリエーション観光	度假游	リゾート・レジャー施設
革命観光	紅色旅游	愛国主義教育基地

出典：[高山陽子 2007]

この中では愛国主義教育を主とする「紅色旅游」、「赤いツーリズム」は中国の独自性を持つ観光で注目される。これは政権の担い手、中国共産党の革命の歴史に関わる遺跡の観光で社会主義の独自性が現れている[高媛 2002:45]。「赤いツーリズム」は毛沢東の生家・韶山や革命聖地などを訪問するツアーが有名である。他方で、「黄色いツーリズム」も提唱され、中華民族のルーツや伝統文化に因む遺跡の観光を意味する[高媛 2002：45]。ただし、黄色いツーリズムは赤いツーリズムほど使われていない。ここには中国の愛国主義の影響が加わっているが、実質的には「伝統文化観光」や「宗教文化観光」と呼ばれている。表 23 には「黄色いツーリズム」は表示されていないが、歴史文化観光に含まれると言える。「黄色いツーリズム」は、1992 年に始まった中国初の「観光年」キャンペーンが、「ルーツ探しと参拝の旅」と題されていたので極めて好都合であった。中国旅遊局の推奨テーマの首位は陝山省黄陵県にある「黄帝陵」への訪問であった[高媛 2002：52]。黄帝は中華民族の象徴として崇拝され、海外内の「中華民族」の精神的求心力となっている。黄帝陵の所在地である「橋山」を「龍」の形に見立て、黄帝陵が「龍」の舌の真ん中にあるとされ、黄帝と中華民族のトーテム「龍」を重ね合わせて神話化しようとしている[高媛 2002：54]。黄帝信仰と観光の結合の成功に続いて、別の信仰対象も観光資源として取り上げられた。地方で盛んな龍王信仰や媽祖信仰など様々な民間信仰が文化観光資源とされ、新たな装いを持って「宗教文化観光」として創出された。現在では「赤いツーリズム」と共存しながら、中国観光市場の独特な観光資源として観光客の注目を集めている。

「伝統文化観光」の中には宗教文化や民間信仰が含まれる。多くの観光者が伝統文化に興味を持ち、観光を通して豊富な知識を身につけようとする意欲を持っている。90 年代以降、政府は観光客の要望に合わせて宗教や民間信仰に関わる伝統文化観光の推進を全国的に展開した。その背景には 1992 年から中国旅游局が毎年行っている観光プロモーション（振興策）の影響もある[王慧琴 2013：103]。伝統文化に関わる観光プロモーションを抜出してみた（表 24)。

表 24　伝統文化に関わる観光プロモーション

年	主題	キャッチコピー 中国語	キャッチコピー 日本語
1994	中国文物古跡游	保護文物古跡,促進旅游発展 中国文物古跡,奉給世人共享。	文物古跡を保護し、観光の発展を促進。中国の文化財と古跡を世界の人々と共に享受する。
1998	中国華夏城郷游	中国改革開放二十年,現代城郷多彩生活。	中国改革開放 20 年、現代の都市と農村の多彩な生活
2002	中国民間芸術游	悠久的古国文明,神奇的民間芸術;展現民間芸術風采,促進旅游事業発展;民間芸術,華夏瑰宝。旅游-民間芸術走向世界的橋梁。	悠久な古い国の文明、貴重な民間芸術；民間芸術の魅力を披露、観光事業の発展を促進；民間芸術、華夏の珍貴な宝物。観光－民間芸術を世界に向けた掛橋。
2006	中国郷村旅游	新農村、新旅游、新体験、新風尚。	新農村、新観光、新体験、新流行。
2007	中国和諧城郷游	魅力郷村、活力城市、和諧中国。	魅力な郷村、活気のある都市、調和がとれる中国
2011	中華文化游	游中華，品文化。	中華観光、文化鑑賞。

出典：1994 年と 1998 年は[王文亮 2001:391]。以後は中国国家旅游局ウェブサイト[http://www.cnta.com]により作成。

毎年のプロモーションの主題として「伝統文化観光」や「宗教文化観光」は取り上げられていないが関連する主題はある。たとえば1994 年の「中国文物古跡游」（中国文化遺産旧跡観光）は世界遺産など名所旧跡は勿論のこと、宗教文化など広義の伝統文化も文化財として盛り込まれた。1998 年には「中国華夏城郷游」を主題として、改革開放後の 20 年間の郷村変化の全貌が主題化された。中国の豊かな観光資源の約 70%が広大な農村地域にあるとされ[王文亮 2008：83]、其の中に数多くの寺院や廟などの宗教施設や民間信仰に関わるも含まれる。2002 年は「中国民間芸術游」（中国民間芸術観光）は民間芸術を中心とし、寺院の彫刻や壁画、民間伝統芸術品の観光が人気を博した。更に 2011 年の「中華文化游」では伝統文化を観光資源に大いに活用し、物資文化遺産や非物資文化遺産の利用も行う。中国では宗教文化に関する観光資源が名所旧跡の約二分の一を占め[阮・余 2007：135]、観光産業の柱と位置づけられてきたのである。このように過去 20 年の間に、伝統文化を観光資源として利用する可能性があるキャンペーンをその都度ごとに強調してきた。文化資源が豊富な中国では、文化観光はすでに重要な地位にあり、中国観光業は数十年の間に迅速に成長してきた主要な観光資源となっている[宋振春・紀暁君・呂璐穎・李允強 2012]。

第 3 節　媽祖信仰の復興

媽祖信仰は外国貿易が盛んであった福建省では有名である。媽祖は宋代の建隆元年（960）陰暦 3 月 23 日に、福建省莆田県湄州島で生まれた林黙娘という女性で、18 歳で神通力を得て病気直しなどの奇蹟を起こしたが、28 歳で夭折した。生前から禍福の予見にたけていたので信仰され、死後には航海守護神となって祀られた[窪 1981：238]。福建商人の活動に伴って中国沿岸部に広がり、華僑華人の移住によって、東アジアから東南アジアにも広まった。

1 旅順周辺地域の媽祖信仰

媽祖信仰は宋代以後、商人の北上に伴い、山東半島を経由し、遼東半島に伝わったと推定される。山東半島長島県の「顕応宮」は華北の最古の媽祖廟で、「海神娘娘廟」とも呼ばれる。また旅順の「天妃廟」は現存する石碑（旅順博物館に保存）によれば永楽六年（1408）創建で（写真 22）、六百年以上の歴史があり、遼東半島では文字の記録がある媽祖廟としては、最古である。旅順は昔から海上交通の重

要な港として有名である。『新唐書』には「登州海行入高麗、渤海道」(登州から出発し、朝鮮半島に入る場合、渤海海峡を通る)という記録があり、南方の船が朝鮮半島に行く場合に、必ず渤海海峡、遼東半島を経由する。媽祖信仰は商人の船が交易によって北上し、徐々に北方地域に伝わってきた。北部では天津、煙台、青島などの港町に媽祖廟が残る。

写真 22 旅順博物館に保存された媽祖石碑

媽祖は地元漁民の守護神として受け入られ、環渤海地域の海神信仰の中で最も重要な女神となっている。媽祖信仰の伝播以前の遼東地域では「海神娘娘」が信仰を集めていたと思われるが、素性が明確でなかったので、具体的な人物の媽祖が受け入れられたのであろう。元代以降の歴代の皇帝も媽祖を信仰し、清の康熙 23 年 (1684) には天后に勅封され、国家級の海神となった。上流社会と文人らの文字文化の影響で、海神娘娘は媽祖信仰に統合されたと推定されている[曲金良 2004]。旅順周辺では、海神娘娘が地元の古い呼称と推定されるが、筆者の現地調査では、現在では海神娘娘は則ち媽祖と答えることがほとんどである。地域の海神信仰が、媽祖信仰に読み替えられて、遼東半島の海上安全の保護神として広く信仰されるようになった。旅順とその周辺の媽祖廟の状況は以下の通りで、祭日の多くは媽祖の生誕日である(表 25)。

媽祖信仰は明代以降に旅順地域に伝わり、上流社会から一般に広がったのであろう。在来の「海神娘娘」を祀る廟はなく媽祖に融合しているが、地域住民にとっては媽祖にせよ、海神娘娘にせよ、どちらも漁村地域の守護神であり、住民の信仰は篤い。

表 25　旅順周辺の媽祖廟一覧表

場　　所	名　称	建築時代	祭　日
白玉山	天妃廟	不明	不明
鉄山鎮楊家屯	娘娘廟	明	（旧暦）3 月 23 日
鉄山鎮羊頭洼	娘娘廟	明	（旧暦）3 月 23 日、6 月 17 日
水師営街道西南街	娘娘廟	明	（旧暦）4 月 18 日
艾子口	娘娘廟	明	（旧暦）3 月 23 日
双島鎮塩廠屯	天后宮	明	（旧暦）3 月 23 日
鉄山鎮単家屯	娘娘廟	清	（旧暦）3 月 23 日
北海鎮北海屯	娘娘廟	清	（旧暦）3 月 23 日
旅順口区市場街	天后宮	清	（旧暦）3 月 23 日

出典：[姜琨 2011:15]により筆者が作成。

2 海灯節

遼東半島の沿海漁村では毎年旧暦正月 13 日に「海神娘娘」を祀る「放海灯」の儀礼が行われている。媽祖信仰というよりは地元の海神信仰の祭りである。昔、大連地域では毎年の旧暦 3 月 23 日に媽祖の誕生日を祝う祭りが行われていたが、歴史的原因で媽祖廟が破壊され、祭日活動も中止になった（姜琨 2011:22)。ただし、山東省では旧暦正月 13 日に媽祖を祀る地域もあり、旅順は山東半島からの移民の影響を受けた可能性もある。媽祖廟の祭りは一般には誕生日の 3 月 23 日であるが、遼東半島の正月行事では媽祖というよりは、元々の信仰対象であった海神娘娘を祀る。旅順近くの龍王塘の正月 13 日の祭りは春節のように賑やかである。午後四時頃、漁村の人々は「海灯船」(写真 23) を海岸に持ってきて祭壇の机に供物を並べる。

写真 23 海灯節に作られた海灯船

供物は一般的に「三牲」(龍王塘では魚、豚、鶏)[40]、饅頭、果物、菓子、酒、煙草、花束などである。香炉で線香と香を焚き、海に向かって「海神娘娘」に安全保護を祈る。参拝が終わると、蝋燭を点した「海灯船」を海に流す。その後、村の人々は東北の伝統的なヤンコ踊りでその日を祝う。各家は正月 13 日には「上船餃子」と呼ばれる特別な形の餃子を作って供える。水の上に浮く船の形状で、年中「平安」という意味合いがあり、誠意をもって「海神娘娘」を送るともいう。漁民にとってはこの日が正月よりも重要である。

「放海灯」の儀礼は、「扎海灯」(海灯を作る)、「選三牲」(三牲を選ぶ)、「蒸礼膜」(儀礼に使われる饅頭を蒸す)、「放鞭炮」(爆竹を放つ)、「演秧歌」(ヤンコ踊りをする)、「放海灯」(海灯を流す)という過程を経る。具体的な内容は以下のようである。

① 「扎海灯」。海灯を作ることである。普通木の板と玉蜀黍などの茎で船を作り、また色とりとりどりの紙や旗を貼り付ける。家により様々なデザインの船を作る。

② 「選三牲」。「三牲」とは、魚、豚、鶏の三品である。祭祀する時にこの「三牲」はなくてはならない。昔は六品であったが、現在は三品に変わった。しかし、生活が貧しかった昔では、「三牲」を用意するのはそんなに簡単なことではなかった。

③ 「蒸礼膜」。儀礼に使われる饅頭を用意する。「礼膜」は祭祝日に使われる「饅頭」であり、普段の饅頭のデザインと違う。「礼膜」は魚や桃の形にした場合が多く、また饅頭の上に色々なデザインを入れ、「福」や「財」の文字を書くこともある。

④ 「放鞭炮」。爆竹を放ち、魔除けのために行う。

⑤ 「演秧歌」。東北地域で有名な田植え踊りで、衣装も鮮やかで、右手に黄色い絹の布を、左手に赤い提灯を持ち、歌いながら踊る。この踊りを通して神に自分の念願を表すのである。

⑥ 「放海灯」。灯を点した船を海に流す儀礼である。「船を流す」行為は重要な意味をもっている。前もって作られた「船」はすべての祭祀活動の終了時に、人間の日常生活を営む世界から送り出される。これらの「船」は神々の住む神界や死者の霊の住む「他界」へ送られる[黄 1998 : 123]。海灯節の「放海灯」はお正月に招いた「海神娘娘」をこの日に神界へ送るという意味意味合いである。

---

[40]「三牲」は元来は「猪」「羊」「鶏」で構成される[渡邊 1991 : 218]。龍王塘では羊の代わりに「魚」を供える。

人民公社が崩壊した後に、海灯節は毎年連続に賑やかに行われたが、文化大革命時代は海神娘娘が批判の対象となり、一時厳しく法度化された。それでも家の中でこっそり祀る人もいたという。海神娘娘信仰は「放海灯」から現在の「海灯節」になるまで、地元民の強い信念によって継続されてきた。現在では毎年の海灯節の儀礼はマスコミに大きく報道され、「放海灯」の由来も詳しく紹介され、多くの人々が「海灯節」に関心を寄せるようになった。地元の『大連晩報』(2013 年 3 月 23 日付け)によると、海灯節は海神娘娘から始まり、元代以降に媽祖信仰が福建省の莆田から大連に伝えられ、周辺の海神信仰と融合した。旧暦正月十三日の「放海灯」は南北の海神信仰の融合の結果だと紹介されている。解説としては全く普通のことしか書いていないが、マスコミの報道により、多くの人々が海灯節に関心を寄せるようになり、海灯節は旅順地域の伝統文化として位置づけられるようになった。

3 媽祖信仰の考察

1991 年に旅順区政府は正月十三日の「放海灯」を「海灯節」と改めて、この年以後は毎年、盛大なイベントにしたので、マスコミの宣伝によって地域の知名度が徐々に高まり、現在では漁村の住民だけではなく、大連市内から見物に行く人も年々増えてきた。在来の海神娘娘は航海や漁撈の安全を守る神であったが、「放海灯」という民俗風習を「海灯節」という大きな行事(「節」)に拡大し、海神娘娘の信仰は周辺地域の人々に共有されて、地域的アイデンティティの構築や確立にも寄与するようになった。また海神娘娘の信仰は、福建や台湾など南方地域を中心に信仰圏をもつ媽祖信仰と融合したとされる点も重要な意味を持つ。「媽祖」は実在の人物とされているので、その功徳や真正性が圧倒的な信頼を得て、社会的な反響を呼び起こす可能性があるからである。こうした動きには、民衆の行事を通して地域伝統文化の復興活動を推進し、地域社会の求心力を高めようとする政府の狙いも読みとれる。「放海灯」という民俗風習は現在では、遼寧省の非物質文化遺産(無形文化遺産)に登録されて、「伝統文化」としての際立ったアイコンとなっている。今後このような民間信仰による宗教ツーリズムの推進が期待されることで、媽祖信仰の社会的効能が益々注目されるようになる可能性もある。

第 4 節　　龍王信仰の復興

1　旅順周辺の龍王信仰

①　龍王信仰復興の背景

漁業の主な生業は漁撈活動である。漁村では漁撈活動に関わる人が多いため、海神からのご利益はほかの地域よりも重視されている[王慧琴 2010]。遼東半島では漁村で信仰されている海神がそれぞれ異なる。大体は媽祖信仰と龍王信仰に分けられるが、両方ともに信仰している地域もある。旅順の東側の漁村では媽祖信仰（海神娘娘）を中心に、西側の漁村では龍王信仰が盛んである。龍王塘では龍王と媽祖の両方が信仰されている。龍王塘の名前は龍王信仰に由来し、昔から「龍王」が信仰されている。明代・清代以後に媽祖信仰が流行して、現在は両方を信仰する人が多い。龍王は昔から広く信仰され、中国の道教及び民間伝説にも龍王を水の神として崇拝され、雨乞いする時に龍王を祀る風習は古くから残されている。龍王は雨水を司る大事な神として最初に農耕民に信仰され、その後、漁村でも受容された。現在では龍王は中国の民間信仰の代表と言ってもよい。

龍王信仰は龍の崇拝から発展し、定着したと考えられる。龍の原型や起源に関する認識は千差万別であるが[何：1999：57]、龍は水神であることが一般的である。龍王は漁撈活動に携わる漁民にも信仰され、日常生活の重要な一部となっていた。海上での漁撈は常に天候に左右され、大きな危険性をともなっているので、漁撈生活で最も重視されるのは海上の安全である。筆者が調査したＴ村では嘗て数回も海上の災害に直面し、地域住民に大きなダメージを与えた記憶がある。次は筆者が調査したＴ村の遭難状況を紹介する（表 26）。

表 26　Ｔ村遭難した状況

時間	原因	死者数
1964 年 8 月 25 日	龍巻による船の転覆事故	6 人
1988 年某日	暴風雨で船が遭難	10 数人
1999 年 11 月 24 日	船の衝突事故	3 人

出典：現地の調査情報により筆者が作成

このような荒れ狂う自然の猛威に直面した時に、人々が唯一できるのは神や祖先に加護を祈り、希望や念願を全て神に託すことだけである。龍王は出漁の安全と大漁を祈る漁民心意の反映である。龍

王信仰は文化大革命時代には厳しく禁止され、廟は破壊されるなど大きな被害を受けたが、改革開放の時代の流れの中で、龍王信仰の再興は悲願となり、龍王信仰の根拠地の龍王廟の復興事業が進められるようになった。こうした状況は漁民には自然の成り行きである。

② 龍王廟

龍王については民間伝承や物語が伝えられ、歴史上の龍王の御神徳を記録した碑文や龍王廟を修復した時の記念碑、功徳碑、及び祈祷する時の歌謡などが残されている。龍王廟は五龍を祀る。五龍とは、青龍、赤龍、黄龍、白龍と黒龍で、一般には雨乞いをする場合に祀られる。季節ごとに祀られる龍が異なる。唐代から既に五龍を祭る習慣があり[吉 2002：173]、宋代に五龍が宋の微宗によって正式に王に封じられ、それ以来龍神は龍王と呼ばれ、龍神廟は龍王廟と呼ばれるようになったとされる。

人民公社崩壊後、漁村地域では家族単位で漁撈活動に携わることが主流になり、龍王信仰や祭祀儀礼が各家族にとって何よりも重要な行事となっている。祭祀を行う龍王廟が地域住民には大きな存在であり、文化大革命時代に破壊された龍王廟の修復が地域住民の念願であった。生産請負制を実施した当初は、資金の工面が難航して、中々実現できなかったが、旅順近くの漁村は徐々に龍王廟の復興工事に着手し始めた。T村の場合は、2003年に村の人々と関係者から10万9998元の献金を集めて、遂に新しい龍王廟が落成した。龍王廟の場所は風水の適地で小山の上にあり、霊験がよく現れるという。龍王廟の完成にかけた漁村の人々の熱意は、彼らが祭祀儀礼の復興を望んでいた証しである。

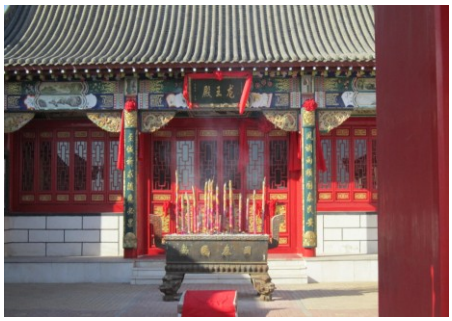


写真24 修復された龍王廟

写真25 龍王廟祭壇の石碑

昔T村の東北部の山の上には小さい龍王廟があったが、新しい龍王廟は古い場所に建てられた。龍王廟は雄大な山を背景として、西

側を渤海湾に臨んでいる。龍王廟の場所は風水思想が重視されているので、毎年の龍王の祭日や年中行事の節日になると、地域住民の信者だけでなく、大勢の観光客が訪れるようになった。龍王廟の復興活動に積極的に取り組んだのはＴ村だけではなく、その周辺のいくつかの村でも同様な動きが見られた。

２「漁人節」

中国では神は人間と同じく、各々の誕生日があると信じている。毎年旧暦の 6 月 13 日は海神の龍王の誕生日であり、龍王を祀るための盛大な儀礼が行われる。Ｔ村も同様に龍王の祭祀儀礼は村の一大事である。例えば 2005 年龍王誕生日の前日の旧暦 6 月 12 日に村人は豚や羊をつぶして、供物を用意する。内容は果物、鶏肉、羊肉、豚肉、魚、鮑、春雨、饅頭、酒などである。饅頭に赤い色をつけると、「掛彩」と呼ばれて、「発財」の発音と似ているので、豊かになる祈願が込められる。正月と同様に女性には一年で最も忙しい日である。旧暦 6 月 13 日の朝から各家は自分が用意した供物を龍王廟に持ち込み、祭祀儀礼を執り行う。用意した机の上に饅頭 9 個、料理 5 品、果物 3 品、そして勿論酒も供えなくてはならない。準備が終わると、線香に火をつけて祈願して爆竹を鳴らすのが一般的である。人々が龍王廟の前で自分の願いを祈願する儀礼が行われる。儀礼が終了するとその後で海岸でさらにもう一度祀る習慣がある。昔船で祭祀儀礼が行われていたが、今は各家は供物を籠に入れて、海岸で机の上に供物をあらためて並べて、同じ儀礼をもう一度行う。祭祀儀礼が終わると饅頭を少し海の中へ投げるしきたりがある。これは龍王にも食でさせるという意味合いである。それ以外の供物は家に持ち帰る。つまり漁民の祭祀場所は「廟祭」と「船祭」に分けられる。「船祭」は漁業の特徴を反映する祭祀方式であり、伝統な祭祀場所と比べてその特殊性がある[鄭 2011：167]。またその日に漁船の全てに赤い旗が掲げられ、海上の安全を祈る。

2004 年に旅順区政府は旧暦 6 月 13 日を「漁人節」と決め、毎年盛大なイベントが行われるようになった。2012 年 7 月 31 日には旅順北海街道で第 9 回目の漁人節のイベントが行われた。旅順区区長、副区長などが臨席し「海を大切にし、資源を保護する」という趣旨に基づき、10 万匹のヒラメの稚魚を海に放流する儀礼が行われた。漁人節は漁民の海上安全を祈願する以外に、漁民の漁撈収入も増えるように祈っている。また、近年漁人節の規模も拡大し、内容も豊

富になりイベント化の動きが進んでいる。このような民間祭日の再編成を通して、旅順の伝統文化を海洋文化に組み込み漁業の生産方式の転換と海洋文化産業の発展を大いに推進することが期待されている。さらに漁人節をきっかけに、地域住民に海洋資源の保護意識を高めさせ、海岸の景色や海産物などの郷土料理、マリンレジャーなどを中心とする新しい観光ブームを積極的に推進して、漁人節を機会として旅順や大連を観光用の海浜として地名度を際立たせようとするという狙いもある。漁人節に関しては、各マス・メディアで大きく報道されて一躍注目を集めた。その結果、元々は地域住民に信仰され地域性の強い龍王信仰が、政府主導の下でその信仰圏を徐々に拡大する傾向がある。政府や主催者側は龍王信仰を伝承する土壌が固まったと考えているかもしれないが、実質的には龍王信仰の内容は大きく変質した。

3　龍王信仰への考察

龍王信仰は航海の安全、漁撈の豊漁など祈願するための信仰で、昔から旅順周辺の漁村に根付いていた。人民公社崩壊後、龍王信仰は媽祖信仰と同じように、再び急速に復興されて、地域住民にとってはかけがえのできない存在となった。しかし、龍王信仰の儀礼はイベント化された「漁人節」に取り入れられることによって、漁民の信仰ではなくなった。龍王信仰は、政府や主催者側には社会的な意義を高める効果があり、外部社会との繋がりが強化される役割を担い、社会的、経済的な効能があるとされた。龍王信仰は文化資源として利用されるようになった。現在では、龍王信仰は媽祖信仰と同様に、地域社会に根ざした伝統文化と見なされ、地域住民が共有する文化として地域社会の連帯感を強める役割を果たすと考えられている。漁人節に関するマスコミの宣伝により、大連周辺のみならず全国的にも注目され、地域の知名度が一層高まった。その結果、旅順周辺の地域伝統文化として、漁撈産業、養殖業、水産品の加工業などへの宣伝活動も活発になり、政府が積極的に推進した「招商引資」(外部資金の導入）といった目標を成し遂げるよい機会となった。龍王信仰の経済的な効果は大きい。漁人節は毎年旧暦の 6 月 13 日に行われて 7 月中旬から下旬にあたり、旅順を訪れる観光客は多く、漁人節に関わる様々なイベントが行われ、観光商品も様々である。二つの観光ルートの設定（表 27)、三か所の釣り場の整備（表 28)、七つの海水浴場の展開（表 29）などが「漁人節」に関連づけ

て企画されている[旅順観光局 2004]。そこでは龍王信仰は影が薄い。

表 27　　漁人節観光主要ルート

ルート名称	場所	値段
蛇島生態観光	双島湾艾子口村港	60 元/人
旅順を見物する海上観光	鉄山柏嵐子村港	40 元/人

表 28　漁人節の期間に利用できる釣り場

釣り場名称	地　点	利用時間と値段
柏嵐子釣り場	柏嵐子	毎日 6 時間以内に、4 人/船、45 元/人。時間オーバーは別料金。
蛇島釣り場	アザラシステーション	宿泊、食事を含め、110 元/人。時間制限なし。
九頭山釣り場	北海漁人部落	食事を含め、120 元/人；宿泊、食事を含め 190 元/人。時間制限なし。

表 29　漁人節の期間に利用できる海水浴場

海水浴場名所	値　　段
卓越海洋楽園	入場料 59 元/人、69 元/人、99 元/人の三つコース。
塔河湾海水浴場	入場料 6 元/人[保険料を含む]、その他別料金。
黄金山海水浴場	入場料 5 元/人、その他別料金。
月亮湾海水浴場	入場料 50 元/人、その他別料金。
柏嵐子海水浴場	海上体験： 20 元/人；海岸見物：20 元/人。
西湖山庄海水浴場	入場料 2 元/人、休憩場所 100 元/天、プール 10 元/人。
九頭山海水浴場	入場料 8 元/人，その他別料金。

「漁人節」の場合は、最初は地域住民の意志で龍王信仰の復興が図られたが、2000 年代に入ると外部からの働きかけで、伝統文化として読み変えられ、観光資源として利用される動きが急激に進んだ。漁人節に関する経済的な資料については再検討の余地があるが、今後は更に観光地として整備が進み、観光産業の推進に利用されていくことになるのであろう。地域の住民の主体性は今後どのようになっていくのかを更に検討することが必要である。

第 5 節　観音信仰の復興と横山寺

1 旅順周辺の観音信仰

観音菩薩は中国の民間信仰の中で最も影響力があり、信者の数が最も多い。中国では「家家有彌陀、戸戸有観音」（各家には阿弥陀仏があり、各戸には観音がある）ということわざがある。観音菩薩は広く信仰されていることが語られている。観音菩薩は正式には「観世音」であるが、民間では「観音」が一般的であり、「拝観音」（観音に拝む）という言葉をよく耳にする。観音信仰が旅順地域に定着するまでには長い歴史があった。大連市営城子鎮の永興寺は観音を祀る古い寺院で、史料によれば、唐代の貞観年間（627～649）に創建され千年以上の歴史を持つという。遼南地域では最も歴史が長い観音寺院である。また『旅順口区志』（1999 年）によれば、清代には旅順に「在礼教」という組織があり、日本植民地時代に「悟善堂」と「慈善堂」の二つの拠点で活動し、「在礼教」の団員が皆観世音菩薩を信仰していたという記述がある。

2 横山寺

旅順近くの龍王塘大石洞村には横山寺があり、遼東半島地域の八大寺院の一つと言われる古刹である。旅順口区の横山の南側に位置し、寺院の総面積は約 2300 ㎡、横山は高さ 393.2m で、日本植民地時代には「剣山」と呼ばれた日露戦争時代の古戦場である。記念の石碑は現在では旅順日露監獄博物館に保管されている。横山寺は創建は不明で一説には漢代ともいうが明確ではない。1912 年に民間名医の張文平などにより修復された。当時は旅順や大連からの信者がよく訪れ、特に旧暦 4 月 8 日の廟の縁日は最も賑やかであったという。他の寺院と同様に文化大革命で破壊され、改革開放後、寺院の再建は多くの信者の悲願であったが、2003 年から卓越集団により復興作業が進められ、2004 年 8 月に落成式が行われ、2005 年 5 月 25 日に開眼供養の儀礼が挙行された。5 月 25 日は旧暦 4 月 18 日でこの日を観音の縁日とした。寺院には 2012 年現在で僧侶が 23 人、在俗信徒は 5 千人以上である。横山寺には高さ 18m の観音菩薩が祀られ、「四大天王」「地蔵菩薩」「関帝」など四十八尊が祀られて、寺院の縁日や正月を含めて、年間約 40 万人が訪れるという。

横山寺は大連市内から毎日 3 往復のバス[41]があり所要時間は約一

41大連駅北広場発 6：40、10：00、14：00 である（2012 年現在）。

時間、料金は5元である。夏の観光シーズンと正月は大体満員である。現在龍王塘の中心地から横山寺までの道路が狭いため、横山寺に通じるトンネル工事が行われる予定である。

横山寺は龍王塘桜花園の東北にあり、桜花園から徒歩でも行ける距離である。近年になって旅行会社は龍王塘桜花園と横山寺を一緒にして観光ツァーの人気商品として宣伝し、観光客の関心を集めている。これは、あるテーマに沿って複数の観光地を「線」で結びつけることで、魅力ある複数的観光資源としてアピールしようとする試みである[前田 1995：129]。2012年現在では横山寺は拝観料を取っていないが、今後の観光客が増加すれば拝観料を取る意向である

写真26　観音菩薩に拝む観光客

写真27　旅順横山寺の入り口

3　観音信仰への考察

媽祖と龍王は地域住民の間で、昔から代々に信仰され、人民公社崩壊後、地域住民の協力で復興したことで廟も外部資金により修復されるに至り、政府の観光産業を推進する構図の中に組み込まれたのである。これは2002年に中国政府が提唱された「中国民間芸術游」(中国民間芸術観光)の実践例(海灯節、漁人節など)とも言える。旅順には元来観音信仰が古くから地域に根付いた土壌がある一方、観音菩薩などを祭る寺院の建物、仏像、壁画などの芸術的な価値が新たに参拝者や観光客の関心を集めるキーワードとなっている。勿論各家に祭られるほどあまねく浸透されている観音信仰は地域社会のイデオロギーの構築作用も見落としてはならない。観音信仰は長い歴史の中に中国土着文化に融合され、中国民衆の心理に応じるような内容に変わりつつあった。観音菩薩の大慈大悲は人々が社会からの圧力や困難を乗り越える精神的な支えとなり、また、母性のイメージが強い観音信仰が母性を崇拝する中国民衆の間に共鳴を呼び起

こされ、信仰を共有する者の間で連帯感が高められる。現在、横山寺と桜花園は両方とも観光資源として活用され、観光客が移動しやすく連続性のある観光ルートを創出する工夫が凝らされている。

旅順地域の観音信仰の復活はまたローカルな需要性がある。横山寺の近くには有名な玉皇頂墓地公園があり、2004年に遼寧省一級墓地と選定され、地元民の間では評判もよく、正月や清明節など祭祀の日には、大勢の人が墓参りに訪れ、その帰りに横山寺を参詣する人もいる。墓参りからイベントに繋がるかどうかは不明であるが、地域住民の交流の場として発展していることは確かである。

結び

本章では観光推進の中に宗教文化が観光資源化にされた過程を検討した。宗教文化に関する観光プロモーションを通じて、その魅力が多くの観光客に知られ、寺院や廟のたたずまいや祭祀儀礼、独特の雰囲気を持つ「聖」の感覚などが重要な要因であった。中国では経済改革開放前とそれ以後では宗教文化は全く異なっている。1980年代前半までは宗教や信仰は厳しく取り締られ、宗教文化の大半は破壊されていたが、1980年代後半に、宗教文化は大衆の需要に応じて勢いよく復興された。「宗教」概念対比されて否定的に扱われてきた民間の祭祀や儀礼などの「迷信活動」も姿と形を変えて、次第に「文化」の中に組み込まれて再構築されるという新しい展開もあった[鈴木 2012：456]。その背景には政府が推進した政策の影響が大きいが、地元にとっては観光化は革命以前からの精神文化の伝統を公然と安全に復興させていく上で極めて有効な衣であった[東 2001：41]。宗教文化の復興は観光開発と無関係ではない。旅順周辺の龍王、媽祖、観音の信仰は元々は地域住民が生産、生活のために代々受け継いできたが、観光の推進を契機として伝統文化として再構築され、地域の表象として再認識の動きが高まり、再開発されるようになった。現代社会では、人々はノスタルジーに基づいて失われた伝統文化に基づいてアイデンティティを再構築する基盤が出来ていた。宗教文化は住民に広く浸透していたので、容易に観光資源になる道が開かれていた。他方で観光は宗教文化の復興、保護及び再構築への起爆剤となった。村でのローカルな文化を資源として発見し、意味付けと価値付けを新たに施しながら、各地域を結びつけてより広いネットワークを作り出す社会的な動きがこれと連動した。

旅順地区では2004年に多くの事業が新たな形で再出発した。しか

し、地域住民の意向が無視された上からの一方的な動きである事も多く、真の意味での持続的発展が成し遂げられるのかどうか、やや疑問な点も残る。性急な観光開発は地域社会の人間関係を破壊することも多く、地元住民の意向のくみ上げが今後の課題である。

第８章観光振興による養殖業の発展―グローバル化への道

はじめに

観光産業の推進において観光資源の開発や施設の整備などは人々に観光行動を動機づける重要な要因である。観光資源には自然観光資源、人文観光資源及び複合観光資源などが含まれる。魅力のある観光資源は観光客が旅行先を決定する直接な要因である。しかし、観光客の満足度は観光地の物見遊山だけでなく、その地域の特徴ある文化とのふれあいや、「特産品」を「土産物」として購入することも不可欠である[朴 1996：23]。地元にとっては「特産品」は経済活動の手段としての商品であるだけでなく、観光地の地域性や特徴を表象するものとなり、ガイドの語りも重要な役割を果たす[橋本 2011]。複数の担い手の思惑が交錯する中で「土産物」が生成され、観光地の魅力をアピールする有力な手段となる。本章では観光化された特産品と食文化の生成過程を中心に議論を展開し、旅順・大連周辺地域の「特産品」であるナマコのブランド化の過程やナマコ食文化の特徴を検討する。特に豊富な水産物に恵まれている旅順・大連地域で、なぜ多種多彩な水産物の中で、ナマコのみが特別に珍重されるのか、ナマコ食用の習慣が広がるアジアで、なぜ遼東半島のナマコブームが注目されるのかについて、筆者は疑問を抱いてきた。この疑問を解く鍵を求めて、現地調査に基づいて考察し、地元からの見解を入れて考察する。さらに近年はナマコ需要の高まりに伴い、ナマコの養殖業の発展も大きく伸びている。ナマコ需要の拡大をめぐる要因を究明し、今後のナマコ市場の行方も論じることにする。

第１節　観光地の「特産品」

１「特産品」の位置づけ

観光産業の推進にあたっては「特産品」の開拓が重要な地位を占めている。「特産品」は該当地域で生産され、当該地域の産品であることが人々によく知られているもので、農産物や海産物、海鮮加工品、菓子、惣菜などの食品、さらに衣服や玩具ないし工芸品など様々な種類がある。多様な「特産品」は観光の収入源を創出する働きと連動して、観光資源として重要である。特に「特産品」のうち食べ物に関しては古来の神事に由来することも多く、供物との関連が深い[栗田 1984]。「神餞はその地方でとれた最も新鮮な生鮮品」と指摘されるように、神前に供えた「特産品」には該当地域の人々の最

高の敬意と感謝の気持ちが籠められていた。日本語の「みやげ」は神事に由来する言葉で、中国語の「礼品」「礼物」も儀礼に由来する。「特産品」には地域での最高の味覚や独自性が凝結していた。

土産品の購入理由についてアンダーソンは「思い出のよすが」「家での実用」「贈り物」の三種類に分けている[アンダーソン 1995]。重要なことは「観光記念品」の意味合いがあり、土地固有のものと見なされ、観光客がその土地でこそ購入できた証しとして特別な意味を籠める[朴 1996：35]。また、贈り物は、「非日常的状況にいた旅行者が、日常的状況に残された人々のために“何か”がなくては帰れない」のであって[前田 2003：177]、現地を訪問していない人々に地域の文化や風情などを理解させるきっかけともなる。購入の際には「真正性」が求められる[橋本 2011：43]のが一般的で、観光客には「真正性」こそが観光の重要な要素なのである。

2　「特産品」と食文化観光

「特産品」のうち「食文化」の観光が重要である。通常は食べ物は、文化として意識されにくく、空気のような当たり前のものとして存在している[片上 2006：153]。しかし、「食」は地域特有な伝統に基づく味づけが施され、特別な採取、加工、料理などの技法が創出され、他地域からの観光客にとっては新鮮で魅力的なものにうつる[丹治 2007：126]。食文化は地域性と民間性が強く、地域の風土と密接な関係がある。「食」の風習は簡単に模倣ができない当該地域の独特なもので、「十里に異なる風土があり、百里に異なる風俗がある」[陳・鐘・蘇・林 2011：84]といわれ、地域間の「差異性」を明確に示す。橋本和也はフィジーの事例を通して、食べ物は首長と一般人の間に「差異性」があるのみならず、観光客が「神」として迎えられ、ゲストとホストの間に食の「差異性」があることを論じた[橋本 1999]。「食」は地域間の「差異性」を理解する象徴から、食文化観光へと展開したのである。

日本の JTB(財団法人日本交通公社)が 2004 年度に実施した「旅行者動向調査」で食事が「旅行中の大切な楽しみのひとつであるかどうか」を尋ねた結果、7 割以上の旅行者が食事を旅行の重要な楽しみと自覚していた[小磯 2008：188]。中国でも同様で 2003 年の観光プロモーションの主題は「グルメ大国観光」で、食事を観光推進の中核にした。観光客にとって食事は土地の風土や伝承を知り、土地の人々と交流する手段となり、観光者の満足度を高める[丹治

2007：126]。観光推進には宣伝活動が重要である[劉艶芳・劉於清・李平 2008：4]。本章では遼東半島のナマコの事例を取り上げ、時代に対応した食文化の変容や医食同源といった食文化形成の過程を提示したい。

第 2 節　ナマコ「特産品」のブランド化にむけて

1　ナマコ食文化の歴史

ナマコは、食用する地域と食用しない地域がある。食用にする地域は、東アジアでは中国・日本・朝鮮、更に南太平洋の島々、ヨーロッパではイタリア南部、アフリカの一部で食用にする。ナマコは、東洋では古書に記録され、ナマコに関する研究も数多くある。しかし、西洋の食文化にはナマコを食べる慣行がほとんどなかったので、考察も行われなかったと鶴見良行が指摘した[鶴見 1990：92]。本章ではナマコの歴史的背景を検討した後に、現在の遼東半島のナマコの消費実態を取り上げて、ナマコ食文化の定着過程と変化の背景を究明する。

遼東半島は昔からナマコの産地として有名である。中国では燕窩(ツバメの巣)、魚翅(フカヒレ)、海参(ナマコ)、鮑魚(アワビ)が“四大海味”といわれ、ナマコは中華料理に欠かせない海産食材である。清の時代には、ナマコはアワビやフカヒレ、ツバメの巣、熊の手などと共に、宮廷料理の「満漢全席」に組み込まれていた。満漢全席は清代の料理で、満州族と漢族の山東料理から選りすぐったメニューを取り揃えて宴席に出す様式で、山・陸・海の珍味を使用し、種類の多さ、規模の大きさ、華麗さ、盛大さなどを誇る。一般的にナマコは中国の伝統料理では必須であった。旅順の周辺では近年、ナマコを観光の「特産品」として開発し、地元の人々は勿論、観光客に愛用されている。ナマコの栄養価と薬効が注目され、市場は拡大する一方である。

ナマコは、中国では干しナマコとして保存されて食用に供される。日本では、乾燥したナマコをイリコ（煎海鼠、熬海鼠）やホシコ（干海鼠）と呼ぶ[42]。内臓を取り除き，薄い海水や食塩水で煮て乾燥さ

[42]日本の文献では、ナマコは『古事記』に海鼠として登場し、平安時代の『和名類聚抄』に老海鼠、虎海鼠と記され、『令義解(りょうぎのげ)』や『延喜式』にも記され、貢納品の食材であった。人見必大『本朝食鑑』(元禄 8 年。1695)には、丸くなると形が鼠に似るので海鼠とある。

せ、食用にするには茹でてもどす。炒物，煮物，酢の物などに用いられる。中国ではハイシェン（海参）という。朝鮮側の記録では、李睟文の『芝峯類説』(1613 年)に「海参」の記載があり、「海参」は、「海の人参」の意味で、朝鮮人参の薬効との類似性を意識して付けた名称で、中国と朝鮮との交流の過程で出現したと思われる。17 世紀初頭に朝鮮で使われ、当時の中国と朝鮮の海参の交流が頻繁だったことを示している[佐々木 2002：216]。また、ナマコの生産地の日本と朝鮮半島は、16 世紀から中国への輸出を始めていた。

江戸時代には、幕府はナマコとアワビの生売りを制限し、増産奨励と集荷に力を入れ、朝廷や伊勢神宮への御饌や藩侯への献上品を除いて、一般市場への出荷を禁じた[鶴見 1990：344]。干しナマコ、つまりイリコは、元禄 8 年(1695)頃から、清朝への輸出産品となり、幕府の通貨政策、物価政策の重要な柱とされた[鶴見 1990：328]。当時の日本は中国から生糸や絹織物を輸入して、中国に金銀銅を輸出しており[43]、金銀銅の流出を危惧した幕府が輸出品として眼をつけたのが「俵物三品」であった[小川 1973]。「俵物三品」とは、水産加工品のイリコ(煎海鼠、熬海鼠)、ホシアワビ(乾鮑)、フカヒレ(鱶鰭)をいう。その中でも最も大きな比重を占めたのが中華料理の食材として欠かせないイリコで日本経済の中核を担う輸出商品となった[鶴見 1990：328]。幕府はナマコを含む俵物の市場流出を厳しく取り締まり、禁令を発して自国での消費を禁じる施策を打ち出した[44]。

日本では保存用に乾燥させた干しナマコをイリコ（煎海鼠）やキ

---

[43]当時の輸出状況は、『唐船輸出入品数量一覧 1637～1833 年』で知ることができる[永積 1988]

[44]鶴見良行は、[小川 1973]に依拠して、「1812 年（文化九)、大阪の「三郷町中」へ奉行はこんな御触書を廻した。御触書は、今日でいうと行政指導の法律である。『(煎海鼠干鮑の儀）近来出方相劣り候に付き、去る巳年(1785)以来、多人数に及び吟味それぞれ御仕置申し付け候処、料理屋、煮売店、又は肴屋と唱え候者の内にも食用には常躾の魚類並みに取り交え、町家にても料理に取交えやり候うものもこれ有るやに相い聞え候』。幕府が俵物を輸出へふり向ける政策を採り始めて 120 年近く経ってなお、これを食する需要が市中に根強くあったことがわかる。幕府の眼からすると、俵物がこのように市中に出ることが即ち『抜荷』だったのである。」[鶴見 1990：344－345]。「抜荷」は密輸で、捕まったら処刑であった[山脇 1965]。

ンコ（金海鼠）と呼んできた。日本ではナマコは高級食材で、長崎を発祥の地とする卓袱(しっぽく)料理にフカヒレと共に使用され、大名や豪商しか食べられなかった[江後 2011：39]。日本では、ナマコは一般には生で食べることが多く、ナマコの刺身だけでなく、コノワタ(海鼠腸。ナマコの腸の塩辛)やクチコ(口子。ナマコの卵巣を塩漬けにして干したもの)など独特の食文化が今も残されている。日本から輸出したイリコは厦門、寧波、乍浦など中国南部の港で荷揚げされ、内陸に運搬されて、四川料理や北京料理に使われていたと推測できる。

中国ではナマコを海参(ハイシェン)と書く。これは「海の人参」の意味で、朝鮮人参からの連想で、中国側の名づけと推定されている。朝鮮人参と同じくナマコにも、滋養強壮、不老長寿、万病に効く薬効があると人々は信じていた。海参は朝鮮では「泥」と呼ばれた。朝鮮は 17 世紀初めに、中国と同様にイリコとナマコの双方の意味で「海参」を使用し、ヘーサムと呼ぶようになったが、漢字の音韻化と考えられる。

一方、中国では過去も現在も、ゆでて乾燥した干しナマコを使うことが多い。ナマコは、日本と中国、朝鮮半島では表す意味や食用方法が多少異なる。ナマコの産地は、中国の沿海部だけではなく、日本、朝鮮半島、東南アジアや南太平洋などに広がる。近年、南北アメリカ大陸やアフリカ大陸沿岸などでも捕獲されるようになった。しかし、これらの生産地の大半では、ナマコを捕獲して乾燥させた後に、再び戻して消費する食文化はなかった。つまり、各地の干しナマコは、中国に輸出するために生産されてきた[赤嶺 2010：17]。

中国でのナマコ食文化の中心は、山東省や遼寧省を中心とする遼東海域である[赤嶺 2010：176]。『本草綱目拾遺』に記載があり歴史も古い。干しナマコの利用の普及は 16 世紀末から 17 世紀初頭の明末清初と推定され、ナマコが高級料理として定着しはじめたのは清代の満漢全席である。満漢全席は、仔ブタの丸焼きをメイン・ディッシュとする焼烤席で、ツバメの巣を中心とする燕菜席、同じくフカヒレを中心とした魚翅席と続き、ナマコを主菜とする海参席は四番目の評価を得ていた[田中編 1997：454]。このようにナマコ料理は清代の宮廷ではすでに高く評価され、高級食材として愛用されていた。

一方、庶民の間ではナマコの薬効作用が知られつつも、普段はナマコを食用とする習慣はあまりなかったようである。『五雑組』

（1602）には、「山東濱海,水族亦繁,而人不知取。沿河淺渚,夏春間螺、蚌、蛤甚多，至饑荒時取之,而亦不知烹臛之法也。」［訳：山東の海浜は、水産物も大そう多いので、人は取ることを知らない。河沿いの浅い渚は、春夏の間、螺、蚌、蜆、蛤などが大そう多いが、飢饉のときになって、はじめてこれらを取るのであって、しかも烹たり吸い物を作ったりする方法も知らないのである。［『五雑組』1998：90］とある。文中ではナマコの記載はないが、螺、蚌、蛤ほど日常的な食物ではなかったのであろう。また同じ遼海地域[45]に属する遼東半島は山東半島と同じ状況であったと推定される。一方、ナマコを原始的な救荒食品として加工化が起こるのは東北アジアであると鶴見が指摘する［鶴見 1990：489］。遼東半島では干しナマコは漁民の「救荒食品」として利用されていた。中国では日本のようにナマコを生で食する習慣がなく、獲りたてのナマコを茹でて、乾燥して保存するのが一般的であった。交通手段が発達していなかった時代にはナマコを日持ちのよいイリコに加工したのは至極妥当な保存法であった。しかし、イリコを戻して料理するには大変手間がかかり、調理方法もあまりにも繁雑で高い調理技術が必要とされ、一般庶民の間には浸透していなかった。当時の人々はナマコを日常の食材とする意識は薄く、人参と同様に主に漢方薬として滋養強壮に用いてきた。ナマコの薬効に関しては、遼東半島では病気などで体が衰弱した時にナマコを食用すると徐々に回復すると伝えられ、栄養価の認識を経験的に蓄積してきたと思われる。

以上の歴史の流れからみると、中国と日本のナマコ食文化は、いずれも古代に遡り、宮廷料理の中で洗練されて、当初から高級食材とされてきた。ナマコの需要には、生産者と利用者の格差が明確に存在する。ナマコを採って加工したのは、日本の江戸時代では士農工商からはみだした浦方の漁民だった［鶴見 1990：353］。鶴見良行は、ナマコは支配層の食品で、海参料理は中国では高級料理であり、中国は世界中からナマコを買ったが、高価なナマコを賞味したのは、限られた王族や地主だけであったという［鶴見 1990：353］。

2　ナマコ食文化の変化

[45]遼海地域は主に遼河以東を指す。遼東半島と山東半島の広い範囲を含む地域である。

中国では料理を地域で系統に分け、各々を「菜系」[46]と呼ぶ。ナマコ料理の「菜系」は明確ではなく、各「菜系」の中にナマコ料理は入り込んでいる。地域によって、使用されるナマコの種類は異なり、調理の方法や味も一様ではない。上海では「大烏参」が有名で、蝦子大烏参という料理に使われて人気がある。これは、戻してふわふわ、とろとろになった大烏参に、黒くて甘酸っぱいソースをかけ、乾燥した海老の卵塊をちらした料理である[赤嶺 2010：177]。

本稿で取り上げる遼東半島のナマコは、刺のあるナマコで「刺参」である。北京料理は刺参を好み、味が染み込むまでナマコを煮込む。煮込んでも形が崩れないのが刺参の特徴である。広東料理では「光参」をよく使い、煮込むとナマコが溶けてしまうので、溶ける前に火を止めてとろみをつけるのが一般的である。遼東地域は刺参の産地で、北京料理と同様に人気がある。近年ナマコ料理を中心とした海鮮料理は有名になり、一番人気は「紅焼海参」で、それ以外には「生拌海参」や「海参撈飯」などがある。このようにかつて宮廷や貴族しか食べられなかったナマコ料理は庶民の間に浸透し、かつての珍味はいつでも味わえる庶民の食べ物になった。

ナマコ料理が中国で一般庶民の間に広がったのは、改革開放後のことで、1980 年代以降、特に 1990 年代に入ってからである。古くからナマコの薬効を信じていた人々は、栄養価に注目し、成分も徐々に解明されて、信頼される根拠となった。ナマコ製品を加工・研究する企業の資料では、ビタミンが豊富でコレステロール含有量がゼロ、栄養価が高く、現代人の健康飲食の需要に適し、癌や糖尿病の予防、美容に効果があるなど、薬効が詳細に説かれている。ナマコの栄養成分に関する宣伝手引には、「現代の生物学の研究では、なまこの体内には、たんぱく質などの多種類の微量元素及び活性物質が含まれることが明らかになった。アミノ酸、ムコ多糖、なまこサポニン、なまこポリペプチド、なまこコラーゲン、タウロリン、グルタチオン（GSH）、超氧化物质歧化酶（SOD）、カルシウム、鉄、亜鉛、セレンなどの多種微量の元素、そして五十種類以上の活性物質が含まれる」（暁琴『海参手引』）として、様々の効能が記されている。

遼寧半島の人々はナマコの薬効をある程度を知ってはいたが、具体的な栄養要素の知識はなかった。ナマコの成分が医学的に解明さ

[46]中国料理は、四大菜系、八大菜系、十大菜系などで、一般に川菜、魯菜、粤菜、蘇菜の四大菜系が基本である。

れたとなれば、薬効を信じて食用にする動きが加速する。ただし、栄養価については疑問を呈する学者もいて効能は不確定であるが、ナマコは健康によいという普遍的な認識が急速に広がっている。近年は、遼東半島ではナマコを料理に使うだけではなく、サプリメントのように毎日食べる方法も流行している。ナマコは冬の間に食用すると効果が高いと言われ、冬至から 81 日間、朝の空腹時にナマコを一つ食べると風邪を引かないと信じられ、実際に実践している人々もいるという[赤嶺 2010：201]。今まで主に料理の材料として使用されてきたナマコは、近年は健康保健品として食用する人が増えてきた。ナマコの栄養価が重視されると共に、食習慣も変わりつつあり、ナマコ食文化に関する認識も少しずつ変容してきた。

3　ナマコがブランド化された要因

2011 年にナマコ博物館が旅順に建てられた。ナマコは遼東半島、特に大連の特産品として確固な地位を得た。勿論加工方法の改善など技術進歩の一因もあるが、その以外に幾つかの要因が挙げられる。

①　「刺参」の銘柄

大連のデパートのナマコ売り場での販売品は、刺があるナマコ、「刺参」である。遼東半島は刺参の産地として有名で、薬効が古くから認められてきた。刺参は品質がよく、栄養価が最も高いという。明清時代の古書に刺参の効果に関する記録が幾つか残されている[47]。

---

[47]周亮工（1612～72）の『閩小記』には、福建の海域には白いナマコしかなく大きさは手の平ぐらいである。山東・遼寧の海域のナマコと異なり、味が薄く劣る。薬用には遼海産がよい。刺があるナマコを刺参、刺のないものを光参という。薬用には刺参が適している。ナマコの別称は海男子で、粳（粘りなし）と糯（粘りあり）があり、黒くて粘りのあるナマコが最もよい。強壮作用があり腎臓に効くとある。『百草鏡』は、中国南方の泥質の海底にもナマコはいて大きくて黄色い。刺がなく硬い肉質で食用にされていない。…薬用には遼海産のナマコがよく、膏薬に用いるのがよいと記す。杜文燮『薬鑑』（1598）には、遼寧のナマコが最もよい。色が黒くて、肉が粘り気があり刺が多いものを遼参や刺参という。広東のナマコは広参といい黄色い。福建産は白く肉は固くきめが荒くて厚く、刺もなく肥皂参や光参という。浙江や寧波近海のナマコは大きくて肉が柔らかく、刺がなく瓜皮参と呼ばれ、品質は更に劣る[赤嶺 2010：169]。

記録から見ると、福建のナマコは山東・遼寧の刺参に比べると味が劣り、刺参は他の種類のナマコより、色が黒くて粘り気があり、薬効もすぐれている。品質の良さが「刺参」のブランド化を生み出し、ナマコブームを呼んだ最大の理由ではないか。

②商品の販売と宣伝

赤嶺は大連のナマコブームについて、「街のいたるところにナマコの養殖・漁獲から各種の製品の製造販売までを一貫しておこなうメーカー各社の広告や専売店がならんでいる。看板やポスターはあたりまえで、市内を走るバスまでもがナマコの宣伝をしているではないか……」[赤嶺 2010：201]と述べている。ナマコを販売する各メーカーがナマコの宣伝に力をいれている様相がわかる。大連の中心街にはナマコの専売店が 20 軒以上あり、街のあちらこちらに「海参」の文字が見られる。産業の特色として、普通の商品は生産・加工・流通・販売を各業者に分担させるが、遼東半島ではナマコは生産・加工・販売まで一社で統一管理するのが一般的である。ナマコ売り場では、三山島、広鹿島、大洋島などで採り独自の加工方法で造ったと宣伝文句を並べ、生産地や加工方法について詳しく説明する。生産地や加工方法を消費者に知らしめることで、消費者の信頼向上に繋げる狙いがある。生産地から加工方法までアピールする販売と宣伝の方法はナマコブームを後押しした要因の一つと考えられる。

③「医食同源」の思想

中国では古くから「医食同源」という発想がある。つまり食と薬が一体になり、食物を食用すると同時に、体に薬効の作用があるものが最高である。特に近年は生活水準の改善で、「医食同源」の思想を追い求める人が増えてきた。ナマコは食物であるが薬効もあると信じられ、健康志向の人々には最適な食物である。大連では冬至から 81 日間、朝の空腹時にナマコを一つ食べる慣行があり、「医食同源」の実践と言える。サプリメントやドリンク剤などの健康保健品は、栄養素の割合が不明で信用出来ないが、ナマコは眼で量を確認できて安心だと考える人が大勢いる。地元の人たちは薬よりも食によって体に栄養をつけるほうが確実だと信じている。「医食同源」の発想もナマコがブームを呼んだ根本的な要因だと考えられる。

④儒教思想の影響

中国では儒教の孝行心は最も大切にするべき美徳として評価されている。儒教の倫理観の孝行心は各家庭の中に浸透している。大連でのナマコ調査に際して、ある店員がナマコを自分用にではなく、

親のために買う人ことが多いといったことを覚えている。特に近年は生活が豊かになり、親の健康を重んじる人が数多くいる。親が滅多に食べられない高価なナマコを贈り物にすることは一番の親孝行とされる。ナマコのコレステロール含有量はゼロのため、年配者に最適の栄養価の高い食材と信じる人が増加している。

⑤正月の贈答品としての利用

冬の間にナマコを食すると、健康に最も良いと信じる大連地域では、冬が商売の好適な季節である。この時期は中国の最大で最も大事な春節（正月）と重なることもあって、ナマコの販売量は一年中で最大になると言う。冬場のナマコ需要の拡大もナマコブームを後押しした直接の要因だと考えられる。

食文化は時代とともに常に変化する。変化をもたらした背景にはそれぞれの要因がある。ナマコ食文化も幾つかの要因の中で変化し、ブランド化されてゆくのが時代の趨勢である。

4　ブランド化されたナマコ食文化の特徴

榊原英資は、「食は文化であり、文化というのはある程度は富の集中がないと育たない面がある……」[榊原 2009:185]と述べている。ナマコ食文化は、古来宮廷料理として誕生し、現在は一般庶民の間でも膾炙した。その過程は富の集中と関係する。富の集まる所に、洗練されたナマコ文化あり、といった感がある。近年の大連では乾燥イリコから数種類のナマコ食品が開発されて、ナマコの利用層は一層拡大されつつある。利用の用途に応じて消費されることは当たり前であるが、利用用途を越えてブランド化されつつあるナマコ食文化の特徴は何かを、以下に列記しておく。

第一はもてなしである。ナマコ料理は古くから高級料理とされ、主に宴会などのもてなしに利用される。遼東地域では宴会にナマコ料理があるか否かで宴会が格付けされてきた。人間関係を潤滑にするための宴会がナマコの有無によるということは、ナマコが普通の食物ではなく文化記号として重要視されていることを意味する。

第二は贈答品としての役割である。日本ではイリコは古代から税金の貢納の租庸調のうちの「調」とされ、贄や神饌となるなど日常の食用ではなく貴人への贈答品ともなった[48]。イリコは、神饌、貢

[48] 天文７年（1537）に、能登の守護だった畠山重総は、将軍足利義晴へ太刀と共にコノワタを贈ったのを初めとして、数度にわたり、

納品、贈答品の性格を強く帯び、神霊、支配者、目上の者への捧げ物であった。近代では大きな変化があったが、高級食材のイメージは連続性を保っている。一方、中国では儀礼的要素はなく、清代の宮廷料理に使用され一部は贈答品へと変容していった。中華民国期に徐々に民衆化し、1949 年の社会主義政権への移行、文化大革命などの変動を経て、改革開放後に大きな変化を遂げて、高級食材の贈答品と自家消費用の日常品に分化した。前者は乾燥した「淡干ナマコ」で、綺麗な化粧箱に入れブランド化されたもの、後者は「即時ナマコ」や「半干ナマコ」で自宅の調理用である。

第三は儀礼の食べ物である。日本では江戸時代にナマコの形は米俵に類似してとされ豊作に通じた縁起物としてお正月の雑煮の具（上置）に用いられ[荒川 1990]、年中行事の中に組み込まれていた。中国では縁起物として供える習慣はないが、近年はナマコを食べると健康に良いといわれ、結婚式や誕生日などの慶事、つまり通過儀礼での食べ物になりつつある。遼東地域の名物料理「海参全家福」は、読んで字の如く、この料理を食べると一家全員が幸せになるという意味がこめられ、ナマコの高級イメージが再解釈されている。食物は儀礼の食べ物として、年中行事と通過儀礼の中で人々の心の願いを託すものとされる時、単純な食物の機能範囲を超えて一種の文化記号として存在し、人々の想いの象徴となる[何 2004：33]。ナマコは遼東地域の人々にとっては普通の食べ物ではなく、儀礼の食べ物で、願いを託す物であり、健康と富貴の象徴となっている。

第四は観光用の特産品である。近年の経済発展に伴い、大連の周辺ではエコ・ツーリズムが普及して、観光客は年々増加の傾向にある。大連を訪れる観光への特産品として、最初にあげられるのは海産物で、中でもナマコであり、多くの人々の人気を博している。ナマコは地元民だけではなく、他の中国東北部や内陸からの観光客にもよく販売されている。何彬が指摘するように、食事は民族や地域文化を示す記号の一つとなり、アイデンティティの指標の一つである[何 2004：33]。ナマコは大連のブランド（銘柄）として確固たる地位を確立し、地域の文化指標となっている。

ナマコの利用や用途は、加工の種類が多様化することで複雑化してきた。特徴としては、もてなし、贈答品、儀礼の食べ物、観光用の特産品などに分けられる。ナマコは現在では、健康食品として大

イリコやコノワタを贈っている[鶴見 1990：351]。

連の周辺及び遼東地域の人々の間に広まっており、単なる栄養価のよる評価を越えて、地域文化を象徴する食べ物となり、深層に隠れている文化的な要素が浮上してきている。

第 3 節　ナマコ養殖業の拡大

1　ナマコ養殖技術の進歩

ナマコの需要が日々に高まると共に、養殖事業も拡大した。ナマコ養殖の本格な始まりは 1980 年代からで、それ以前はナマコの価値は十分に認識されず、ナマコの需要も堅調ではなかった。90 年代に入るとナマコの値段が徐々に高騰し、ナマコの需要が急速に高まった。このような背景の下、拡大されたナマコ市場をいかに運営するかは、ナマコの養殖産業にとって大きな課題となった。特に 80 年代後半からナマコ養殖技術の進歩で、遼東半島では大規模な殖場が各地にちらに見られ、ナマコ養殖の隆盛期を迎えるようになった。

ナマコ養殖産業を長期的に順調に発展させるためには養殖区域及び海底の使用権に関しては明確な規則が定める必要があり、90 年代から個人や企業が漁業局から海面の使用権を貸与できるようになった。勿論使用料を支払うのであるが大体 1 ムー（亩。666 ㎡）あたり 20 元～50 元で使用年数は最長 15 年間である。許可された者は沖合 1～2km に及ぶ借地で養殖業や漁業を営むことが可能になった。

大連の特産品は刺立ちのよい「刺参」である。「刺参」の生存環境は大体東経 120° 58～123° 31、北緯 38° 43～40° 12 の間で、海水平均温度は 12.1℃、最高は 25℃の間最適である。2000 年代の中間までにナマコの養殖場は殆ど大連・旅順の近くに集中していたが、大連沿岸、つまり遼東半島南端の海岸の可使用海域が限られるため、近年、渤海湾の北部にもナマコの養殖が広がるようになった。大連のナマコ養殖はすでに 20 年以上の歴史があり、この間に養殖業及び水産研究所が様々な実験を行って、ナマコ増殖の技術開発の動きが進んだ。例えば、1985 年 11 月に遼寧省海洋水産研究院が平均で長さ 1.8cm の稚ナマコを 35.3 万個体養殖し、その後、海水のある水槽に入れて、船で海底に運び、稚ナマコを海に放流する実験が行われていた。勿論放流する前に海底の砂状況に関する調査も行われ、ナマコの育成に最も適している海底を選定したのである。その後、放流されたナマコの定期的サンプリングを行い、その成長の様子を周期的に記録する研究が行われていた。一年間半の調査結果によると放流されたナマコの体長は平均 11.9cm に伸び、体重は 46.4g/個

体に増えた。さらにこの実験により 55.3%といった高い生存率が確認された[隋 2010：173]ことが分かった。この実験を通して特に大連周辺の「刺参」の資源が既に後退した海域に稚ナマコを放流して、「刺参」資源の回復や増加が可能になる可能性が生まれた[李 2006：113]。現在では稚ナマコを放流する方法は養殖業者の間に人気があり、増殖の重要な手段として位置づけられてきた。

しかし、稚ナマコの放流は海底、餌、塩分含有量などの状況を正確に把握しなければならないので経験のない養殖業者にとってリスクも伴う方法である。筆者も旅順周辺での調査時に様々な失敗例を耳にした。例えばＴ村で長年ナマコの養殖を従事するＣ氏が最初に稚ナマコの放流を行ったのは 1999 年であった。当時は養殖の経験が無かったため、ナマコが付着する人工礁の投入が足りなかったために失敗してしまった。2003 年に堰堤での仕切った池での養殖を試みたが種苗の投入量や、海藻及び海底砂粒の状況は全て研究所の指導のもとで行われたという。その後、ナマコ養殖の経験を積み重ね、規模も徐々に拡大し、現在は 5000ha の養殖池を経営している。

80 年代以後、このような様々な試行錯誤の結果、幾つかの養殖方法が開発されるようになった。

写真 28 旅順近くのナマコ養殖の池

写真 29 ナマコ養殖場の開閉用の堰堤水門

現在よく行われる養殖方法は以下の通りである。

① 河口域など塩分濃度の低いところでの陸上池での養殖
② 潮干帯を堰堤での仕切った池での養殖（写真 28）
③ エビなど養殖池の改良地での養殖
④ 個人または企業の借地域内での放流養殖

①は普通の海水をポンプアップし池の海水を循環させる。②と③は月 2 回の潮にあわせ、堰堤の水門を開閉して海水を入れ換える（写真 29）。ナマコ養殖技術の開発による成果は徐々に現れたが、2000 年代以後のナマコ生産高の増加状況は以下の表 30 を参照されたい。

表 30　大連近年ナマコの生産状況

	面積（万 ha）	前年比（%）	生産高（万）	前　年　比（%）
2004	3.7	27.6	1.1	57.1
2005	5.0	35.1	1.5	36.4
2006	5.5	10.0	1.9	26.7
2007	5.7	3.4	2.5	25.0
2008	8.0	40.3	3.0	20.0
2009	9.7	21.2	3.7	23.3
2010	12.2	25.8	3.7	0
2011	7.81	-36.0	4.33	17.1

出典：『大連年鑑』（2005 年～2012 年）により筆者が作成

ナマコの生産高は年々増加し、現在では大連・旅順の周辺地域のみならず、山東省や福建省でも養殖の規模が拡大しつつある。特に福建省は海水温度が高く、ナマコの成長周期が短いため、低い値段で利益をあげられるというメリットがある一方、棘が短く、体壁の弾力が劣えるので、遼東半島の「刺参」に比べれば、値段は半分以下である。「刺参」ほどの人気はないが、拡大する市場へ供給できる。

2　ナマコ加工方法の改善

①　伝統的な加工方法

日本では、ナマコを生で食する習慣はあるが、中国では無いので、採ったナマコを乾燥食品に加工するイリコが一般的であった。乾燥イリコを保存食品として利用する発想は、産地から内陸までの運搬時間による品質の劣化を防ぐためで、加工法はシオセイとスミセイである。シオセイはナマコの内臓を取り出し、真水で 1 時間～2 時間ほど煮る。茹でたナマコを塩水の容器に漬け込み一週間ほど経ったら、もう一度真水で煮て、天日干しをする。地方によって塩水で煮る場合もある。いずれも塩漬けの後に乾燥ナマコは長期保存が可能になる。スミセイはナマコを茹でて、塩水に漬け込んだ後にまた炭をまぶして干す方法である。シオセイとスミセイへの加工によって沿海から離れた内陸でも、ナマコ料理を味わうことができる。中国では昔からイリコを含む乾燥食品をよく利用していたが、腐敗防止のためであった。水分を除いて味を凝縮させ、濃密な質感をもた

せて高度な味にする、生の時とは異なる味わいや触感を感じることができる点に、大きな存在価値があった[中山 1988：351]。特別な風味や触感はナマコ食文化が生まれた原点ともいえる。

ナマコが食卓にあがるまでには煩雑な工程が必要で、採集、加工、戻して調理がナマコ文化の三要素だと鶴見は指摘する[鶴見 1990：490]。加工された乾燥したイリコは調理前に戻す作業を行う必要がある。日本語では「戻す」という工程は、中国語では「发」（發）といい[49]英語では対応する言葉がないようである。イリコを戻す工程は相当な時間と手間がかかり、茹でる時の火の加減や入れる容器なども注意を要する。次に一般的な戻し方を紹介する。

最初にイリコを油気のない容器に入れ、真水で半日か一日ぐらい浸す。乾燥品の場合は二日間浸す場合もある。芯まで柔らかくしたら何度も綺麗に水洗いし、ハサミでタテの腹筋に 3 箇所か 4 箇所の切れ目を入れる（腹筋をこそぎ落とす方法もある）。切れ目を入れると、戻しやすく、よく戻るという。その後、ナマコを綺麗な鍋に入れ、適量の真水を加え、30 分から 40 分ほど煮る（二回に分けて煮る場合もある）。ナマコは小さく縮んで固くなる。茹でたナマコは完全に冷めたら、水が入る容器に丁寧に並べて冷蔵庫に入れて一日か二日ふやかし、ブヨブヨになったらそのまま食べるか料理の食材として利用する。冷蔵庫に保存したナマコは一週間以内に食べるのが最高であるが、毎日水を入れ替えなければならない。これがナマコの戻し工程の基本的方法であるが、乾燥イリコの戻し時間は、ナマコの種類や産地によって大きな差がある。

[49]中国語の「发」（發）は原型に戻すという意味以外に、ふやかすという意味も含まれていて、日本の「戻す」とは多少異なる。

写真 30 高級品淡干ナマコ

写真 31 戻されたナマコ

乾燥イリコを戻して調理するのは面倒な作業である。しかし、宮廷で洗練されたナマコ食文化の実態を、「戻す」工程を通して改めて実感できる。ナマコはあくまでも高級食材で、工程の全てで丁寧さが求められる。ナマコ料理は時間と金銭に余裕がある人々の家でしか作れない料理の一品であることは確かである。

② 現代加工方法の多様性

改革開放後の 1980 年代末頃、大連のナマコ売り場は大連商場というデパートの中に設けられていた小さなカウンターで販売されていた。当時のナマコ商品は乾燥イリコしかなかった。しかし、1990 年代末から 2000 年代に乾燥イリコや塩蔵ナマコ、即食ナマコ、冷凍ナマコ、淡干ナマコ、凍干ナマコ、半干ナマコ、塩漬ナマコなどの商品が開発された。ナマコ市場は種類の変化に伴い、ナマコ売り場の広さも急激に拡大した。2010 年には、デパートの一階部分全部にナマコ商品が陳列されていた。この光景はナマコ市場の規模の変化を眼の当たりにするもので、ナマコブームの到来を実感させられる。

写真 32 大連デパートのナマコ売り場(2010 年)

写真 33 ナマコのサプリメント(2010 年)

昔は加工技術が限られ、シオセイとスミセイのみがナマコ加工の方法であった。しかし、近年は遼東地域ではナマコを加工する各製造社が消費者の要求に応じて開発競争に転じ、様々のナマコ商品が店頭に並ぶようになった。消費者の要求は商品化されたナマコへの名付けにも表れている。例えば、即食ナマコ（レトルト品）は戻す工程が省かれ、購入後すぐ食用または調理でき、感触がやわらかく滑らかで携帯にも便利であるから、共働き家庭の人気を集めている。冷凍ナマコは「単凍」と呼ばれる場合もあり、解凍するとすぐ料理に使えるという長所がある。凍干ナマコは、フリーズドライにより乾燥され、水に 8 時間浸けておけば柔らかくなる。つまり、就寝前に水に浸けておけば、翌朝すぐナマコを調理できることを狙った商品である。これは冬至から 81 日間、毎朝ナマコを食べようとする大連の消費者には、利便性の高い商品だといえる[赤嶺 2010：208]。

半干ナマコは文字通り、半乾燥させ、体壁は弾力がある。しかし、消費者自身が戻さなければならないので、時間に余裕がある人しか調理できない。半干ナマコは乾燥イリコより値段が安いわりによく戻るので地元民の間では最も人気が高い。淡干ナマコは高度な加工技術で作られた商品で、使用されるナマコは上等品が多いのでよく戻り、乾燥ナマコ中の高級品といわれ、高価なので主に贈答品として利用される。塩漬ナマコは一度茹でたナマコを塩漬けして保存し、上質のものを用いるため体壁の弾力が強く、表面にはつやがあって歯ごたえがよいと評判である。このように一つのナマコが様々な商品として開発され、消費者の選択の幅も広がっている。

近年のナマコブームの影響で、ナマコ商品は実に多種多様にわたっている。今まで主に料理の材料として使われてきたナマコは、色々な分野に利用されている。ナマコサプリメント、ナマコドリンク、ナマコ酒、ナマコ調味料など、ナマコの関連商品が次から次へと開発され、かつて一般庶民には手が届かなかったナマコも今や手軽な食品となった。このような変化を引き起こしたのは、現代の加工技術の進歩の結果だが、ナマコへの需要が堅調であることも重要な要因である。需要の拡大があってこそ、ナマコ食文化は多様的に変容することが可能になったと思われる。また、その以外にいくつかの要因も絡んでいるので、それらも念頭に入れて考えてみたい。

3　ナマコ市場の行方

前節でも述べたようにナマコ食文化は伝統的な食文化から現代

化して多様な食文化に変貌した。昔から広東料理や北京料理にナマコを取り入れられていたが、高級料理店に限られ、一般家庭でナマコを食材とする意識はあまりなかった。しかし現在ではナマコはごくありふれた家庭料理の食材として使われ、栄養価値も重視されるようになった。ナマコ食用のブームが高まるにつれ、食用の範囲も拡大する一方で、北はハルビンから南は広州まで全国的に拡大した。ナマコ需要の拡大に伴い、ナマコの養殖、生産、加工、販売など各分野における包括的な業務連携の強化が迫られ、同業種間の競争も激しくなった。2010 年現在、大連のナマコ商会は 61 社あり、その中で商品の知名度や信用度が最も高いのは、「獐子島」、「棒棰島」、「暁芹」の 3 社で、年間の売上は大体 3 億から 5 億元である。それ以外にも「上品堂」、「長生島」、「海晏堂」などがあり、年間の売上は大体 1 億から 3 億元であった[50]。自社の養殖所や加工工場を持てず、小売を中心とする企業や個人の専門店も数多くある。競争が激しい市場で如何に消費者に信用されるかは各企業にとって極めて重要な課題である。例えば「獐子島」は自社の養殖所があり、ナマコのオリジナルな原産地やその天然さを強調する一方、「棒棰島」や「暁芹」は手頃な値段をアピールし、大衆に親しまれるように広告などの宣伝に力を入れている。その結果、各企業は独自のブランドを生み出し、大連ナマコ市場の順調な発展に大いに貢献した。現在では大連ナマコのブランドは他の地域の消費者にも信頼され、全国にその名を馳せている。赤嶺は上海第一食品館の店員へのインタビューを行い、大連と青島では、大連のほうが産地としてすぐれていると認識されていることが明らかとなった。同店では日本産らしきナマコにも大連産と青島産の二種類のラベルが附されており、大きさと形などを比較した場合、大連産が、青島産よりも高価格に設定されていたのである。このことは、上海の人々の間では、大連こそがナマコ食文化の中心地と考えられている証左となる[赤嶺 2010：224]。しかも、その原産が日本かもしれないことも示唆されている。筆者は 2013 年 8 月に大連の「大菜市」のナマコ専門店の店員から、大連の「刺参」は 4000 元/500ｇであるが、福建省産は 1600 元/500ｇであることを告げられ、大連産のナマコは福建省産のものとは明らかな差があり、大連産ナマコのブランド価値が高く評価されているこ

[50]農博網 http://www.aweb.com.cn/。最終アクセス：2013/12/30

とを知った[51]。大連の「刺参」は中国人の伝統的な食文化に関する考え方、つまり食の美味しさを追求すると共に、健康づくりにも気を配るという摂生の考え方を具現化させている。

大連の「刺参」がこういった高い知名度を有するのはその土地にある「真正性」や長い歴史の伝統的な習俗にあるからだと考えられる。大連市民にとって、ナマコは単なる水産食品ではなく、健康のために食する「薬膳」であり、冬季の元旦や春節、10 月の国慶節には最も需要が高まる。大連のナマコ販売状況からみると、冬季には大連の地元民が主な客層であるのに対し、毎年の 4 月～6 月、または 7 月～9 月の間は観光客が主要な消費層となり、大連ナマコ市場のオフシーズンはほとんどなくなった。特に 80 年代後半からは、観光客から厚い関心が寄せられたことによって、ナマコ市場の好調が続くことが可能になったのであろう。

また、観光客にナマコに関する知識をよりよく理解してもらうために、2012 年 6 月 17 日には旅順の太陽沟に世界では唯一の「ナマコ博物館」が完成して公開された。建築面積 1600 ㎡、館内に千種類近くのナマコを展示したという[52]。これはナマコがただの食べ物ではなく、地域文化の象徴として観光客の記憶に残る作用を及ぼす。しかも、建設場所は大連ではなく旅順であることが重要で、これによって旅順観光の複合性の内容がより豊かなものになった。

しかし、近年ではナマコの養殖産業は遼東半島の周辺地域のみならず、山東省や福建省でも出現し、それぞれが養殖に力を入れている。特に 2011 年山東省のナマコの生産量は 6 万トンを突破し、全国ナマコ販売量の 60%に達した。こういったナマコ市場の変化は当然ながら大連のナマコ産業に大きなダメージを与えると思われる。時代の変化に敏感に対応する旅行産業の展開に伴って、今後のナマコ産業はいかなるイノベーションが起こるか、また大連ナマコは従来のようにブランドとしての魅力が保ち続けられるかが注目される。

---

[51]ナマコ養殖技術の進歩で、大連のナマコ「刺参」の種苗を福建省沿海の養殖場で育てることも可能になった。ただし、福建省沿海の海水温度は高く周期が短いので、「刺参」とはいえ、棘が短く、色も違うので、大連周辺の原産「刺参」とは全く比べ物にならない。

[52] 15 大連天健網 http://www.runsky.com/による。最終アクセス 2013 年 12 月 30 日。

結び

本章では地域の特産品が如何なる過程を経て創出、育成、ブランド化されるかに関して考察した。地域の表象となったナマコは地元民だけではなく、観光者にとっても土地の文化、伝統を理解し楽しむために、欠かせない存在となった経緯を明らかにした。観光客は観光地での「異なる」自然を目にし、「異なる」食を口にすることを通して、その地域の伝統的な風習や自分と異なる生き方への理解をより一層深めるのである。また地域社会も観光客の訪問によって、その地域の観光文化を新しく創出する原点を再度見出す可能性がある。遼東半島のナマコ食文化は地域社会と観光客の相互作用の中で育まれてきた。当然のことながら、相互を媒介する様々なエージェントの動きがある。このようにしてナマコ食文化は観光客に大連地域の伝統文化や民俗風習及び生活習慣を理解させると同時に、観光客のニーズに合わせる加工法や料理法をも生み出したのである。

ナマコ食文化も他の文化と同様、人々の知恵や思考、創意工夫を積み重ねつつ時代の変化に応じて、多かれ少なかれ内容に変容が生じ、時代と共に変化してきた。その過程を過去に遡って幾つかの段階を分けて考える説もある[53]。しかし、現在の遼東地域のナマコ食文化のブームは伝統的な食文化の延長線上にあるが、現代人の好みと需要に応じて、急速に変容を遂げている。改めてその特徴をまとめておきたい。

①清代まで宮廷料理として位置づけられてきたナマコ料理は、近代化の中で変容し、徐々に庶民の間に浸透し手軽に食することが可能となった。

②従来は食材であったナマコを健康保健品としてサプリメントのよ

---

[53]赤嶺淳は鶴見良行の説に基づいて、中国とその周辺でのナマコ食文化の発展段階を考えた。第一は山東半島から遼東半島、朝鮮、沿海州に至る東北アジア沿海部で救荒食品や保存食品としてナマコがイリコに加工された。ここに外来の道教医学と狩猟遊牧民族の獣肉食文化が結びつく。第二は道教と接触してイリコは救荒食品から不老長寿の仙薬と認識されるようになった。14 世紀の元朝末期以降のことである。第三は清代でイリコ料理が宮中で「海参席」として認知され地位を獲得するに至り食文化が開花した[赤嶺 2010：171]。

うに冬の間に毎日摂取する人が増えてきたが、これには健康言説の流通や企業の宣伝が大きな役割を持っている。
③ナマコの栄養価が再評価され、両親や友人への最高な贈答品、観光客向けの特産品として利用されるようになったが、その背後には商品化やブランド化の動きがある。
④救荒用の非常食として利用された干しナマコは、結婚式・誕生日など通過儀礼の催事や年中行事で利用され、慶事や祝事の食品として新たな価値を付与されている。

遼東半島ではナマコの加工方法の改善で、ナマコ食文化に変化がもたらされ、昔日の「イリコ食」がすでに過去のものとなり、民衆化、多様化、開放化の動きを加速している。ナマコの栄養価に関する言説は健康を求める人々の思考に合致し、今後も益々広がっていくであろう。しかし薬効については医療関係者の間に諸説あって、企業の宣伝によって過大な情報も流されている。今後の行方は混沌としているが、商品化やブランド化、加工法などの多様化が進み、ナマコ食文化はグローバル化の中で新たな段階に入ったと考えられる。

第 9 章地域開発と観光文化の創出―民間と行政のはざまで

はじめに

本章ではこれまでに考察した内容を締めくくり、いくつかの問題点の整理を試みる。第 2 章ですでに提示したように、旅順周辺の漁村社会は 2000 年代に入ると、「三漁」問題が顕著に現れ、漁村社会は「転型」[54]の局面を迎えた。漁村社会が直面している「三漁」問題を解決するには漁業以外の観光業やサービス業などとの新たな連携に着目しなければならない。地域社会の変容を引き起こす要因は様々であるが、その中には政府が推進した観光政策などの外部の要因がある一方、地域社会の生産機能が停滞した内部の要因もあげられる。地域社会の観光推進はこうした社会的な需要があるからこそ、著しく発展してきたと考えられる。そして、旅順周辺地域の観光推進において政府行政の機能が如何に果たされてきたか、地域社会との相互関係が如何に構築されたかを明らかにし、また、観光文化が如何に作り出され、地域社会に根差した伝統文化が如何に継承されたかなどの問題点を解明するため、第 1 章から第 8 章の内容を踏まえた上で考察を加えて、今後の研究の課題を提示した。

第 1 節　観光開発における民間と行政との関わり

観光は地域振興の「支柱産業」とされ、地域経済に測りしれない波及効果がもたらされると期待されてきた。そのため地域政策として観光振興を図ることは地域の産業を観光関連産業へと誘導し、観光の経済効果を利用しながら高次元化を図り、地域経済をより広域の経済へ結び付けることを可能とする[前田 1995:39]との指摘があり、観光推進を通して地域の観光業だけではなく、関連産業発展の道を切り開く可能性もある。従って経済改革開放後、中国政府が観光を「国策」として取り上げ、1992 年から毎年観光テーマを定め観光プロモーションを媒介として政府の観光政策を積極的に宣伝することを試みた(第 5 章)。つまり中国の観光推進において政府の主導的な役割は、国の観光業の発展にとって欠かせない促進力である[邵

[54] 「転型」は最初に言語学や医学に用いられる言葉であるが、その後経済「転型」も使われるようになった。ここでの「転型」は主に漁村社会の制度、構造及び経済産業の改革を表している。科学史家のクーンが提唱したパラダイム paradigm 概念の中国的展開である。

2006：20]。では、観光推進はなぜ政府の主導的な参与が必要なのであろうかに関しては以下のいくつかの側面から論じたい。

一つには観光資源は一般商品と異なり、現地に訪れる前に商品に関する情報はすべてメディアなどの宣伝により取得されるためである。一般企業が広範囲にわたり宣伝を行うのは限度があるため、政府や地域行政のレベルでの対外観光宣伝は割合に効果的である。

二つには、観光開発の必要とする様々な条件整備、例えば交通条件やインフラ設備、サービスシステム、計画、及び様々な措置の保障、組織的行動の実現などはいずれも政府の主導的な取り組みと関係する[邵 2006：20]ことが明らかである。このような観光施設の整備や投資は政府の積極的な取り組みがなければ、観光推進を却って阻害する一因になるかもしれない。

三つには、観光商品が交通、観光地、ホテル、レストラン、レクリエーション施設、ショッピングセンターなど様々な分野に関わっているということは事実である。さらに有形な物と無形なサービスに分けられ[司馬 2012：76]、各部門への監督は政府の役目であると考えられている。

このように地域観光振興における政府の主導的な役割を見逃してはならない。実際に地元民との関わりが最も多いのはやはり地元政府で、まさに韓敏が指摘するように中国観光推進の主体は観光業界ではなく、地元政府と地元の人々である[韓敏 1996：176]。地域観光の推進は地域政府と地元の人々が観光開発の担い手として重要な役割を果たしている。第 6 章で考察したように地域政府も桜花園の修復及び「桜花節」などのイベントに積極的に取り組んでいた。また、老鉄山自然保護区の整備工事も老鉄山及び旅順口区政府の宣伝と効果的な取締りの実施の結果でもあったからである。

だが地域政府が積極的に観光産業を推し進めた理由についてはこれだけにとどまらず他の視点からの考察も必要である。観光振興は確かに地域社会に様々な恩恵をもたらしたが、一方観光産業への展開を通して地域政府が「績効」[55]をアピールするよい機会でもあった。地域政府を評価する「績効」は様々な内容が含まれるが、観光推進による経済的な効果はその中の一つである。即ち、地方政府が観光を如何に推推するかは幹部の昇進、昇格にも関わる故に、観光

[55]「績効」は、成績、業績の意味である。英語ではパフォーマンス performance にあたる[司馬 2012：3]。

推進による経済的な効能は地域行政が最も関心を寄せているところである。勿論、このような「利己性」は多くの政府職員の勤勉さとは矛盾しないが、収められた業績は当然地域社会にも大いに貢献したといった達成感もある[司馬 2012：81]。

しかし、このような「利己性」の駆使により、地方政府が目先の収益だけを目当てにするような過度な観光開発が頻発している。筆者が調査するある村では、明清時代の建築を再現すべく旧い建物を修復したものの、集客が悪く、期待される経済効果がなかなか達成できなかった事例もある。また、観光振興にあたって観光資源の開発権や使用権､及び収益の配当などを巡るトラブルが起こった際に、法的な規制が欠かせないが、現在トラブルが発生する時はたらい回しにされるケースが多く、政府部門の行政機能が十分に発揮しているとはいえない状況にある。ともあれ政府が毎年推進された観光政策は当然多くの地域に経済の活性化をもたらしたことは否めないが、過度な開発や目標なしの開発が地域の発展を阻害する結果も免れない。従って、地元政府は経済収益だけを目的にするのではなく、問題を解決するバックアップの役割を果たさなければならない。こういった地元政府と地元民の相互関係の構築が依然として大きな課題として残されているのである。

第 2 節　観光推進による文化の変容と構築

観光の語源は､『易経』の中の「観国之光,利用賓于王」(国の光を観るは、もって王に賓たるによろし）に由来している[前田 1995：15]。つまり、ある地方の優れたもの、素晴らしいものに観光客の関心を集めることが観光の主旨である。それでは、素晴らしいものといわれる観光文化は如何に創出されたのかが問われる。山下晋司は観光文化を「観光の政治経済的側面を扱うもの」と「観光の社会・文化的な側面を扱うもの」に分けている[山下 2007：4]。しかし、この二つの側面が扱う内容は全く異なっている｡「政治経済的側面を扱うもの」は主に観光政策、観光産業など国家に統制されるものであるのに対して､「社会・文化的な側面を扱うもの」は主として観光を通じて新しく創り出された文化のことである。本論文ではこの構図に基づき、政治経済的側面(第 4 章と第 5 章)と社会・文化的な側面(第 6 章、第 7 章、第 8 章)の視点から国家が推進された観光と民間が発掘された観光文化の過程を考察した。

しかし、観光による文化の創出と変容を論じる前に､「文化」とは

何か、文化の概念についての解釈が求められる。文化に関する定義は学者により多種多様であるが、アメリカの人類学者、クローバーとクラックホーンは『文化―概念と定義の批判的検討―』(1952 初版）の中で「文化は象徴を通じて獲得され伝達される、目に見えるものも見えないものも含めた、行動の、また行動のためのパターンからなり、そのもっとも本質的な核は伝統的観念、とりわけそれに与えられた価値からなる」[Kroeber& Kluckhohn 1963:357]と指摘する。つまり、文化の本質は行為や制度よりも観念や価値である[鏡味 2010：118]ことが強調され、その価値は象徴を通じて広く知らされるべきなのである。近年、中国で文化の観光資源化が進められるなか、地域社会に根付いた観光文化の価値がますます重視され、九十年代から政府、観光業界、地域社会がこぞって価値ある観光文化の発掘を始めていた。特に地域社会であるホストは自ら、あるいは外部者があたかもホストのごとく、ホスト本来の踊り、歌、工芸品、その他の生活上で不可欠な文化を観光用のものとして本来の文脈から切り取り、客体化し、それを商品として観光客に提供する傾向がある[江口・藤巻 2011：65]。まさに申葆嘉の指摘のように、観光文化は経済的外殻と文化的内在的な要素の重層的な構造である[申葆嘉　1999]。地域社会は客体化された文化（観光文化）を通じて自己のアイデンティティを強化し、プライドを回復させ、さらには商品として経済的な拠り所を得ることになった[江口・藤巻 2011：65]

このように、観光文化は文化のカテゴリーでありながらも、商品としての価値が注目されている。先述したように 2000 年代に入ってから、旅順周辺の漁村では「三漁問題」の解決が迫られ、観光推進は地域社会の経済に大きな貢献をしたことはすでに論じた。しかし、観光はたんなる商業的な活動ではなくそれぞれの場所で文化の生成と深く関係していること[山下 1999：225]が見出されなければならない。文化の発見、生成は魅力のある観光文化の構築に欠かせないプロセスである。特に中国は 10 年文化大革命の嵐に晒され、絶滅に瀕した伝統文化への発掘、構築は一層急務となっている。これは「経済的」という目的のみではなく、地域文化の表象や地域住民自己のアイデンティティの構築においても重要な意義がある。旅順地域でも例外なく近年観光推進を通じて、様々な観光文化は生まれ変わり、喪失された伝統文化の虚構を再生産し、再構築するような動きが広がっている。例えば、第 7 章ではかつて批判された民間信仰が政府主導の観光推進に結び付けられ、幾つかの人気観光商品が生み出さ

れた事例を検討した。第8章では地域文化の象徴として位置づけられるナマコへの考察を通して、ナマコ食文化は地域の観光文化を新しく創出する原点となっている可能性を提示した。これらの観光商品はすべて地域社会に根付いた文化の発掘で再構築されたものであり観光振興に欠かせない新しい牽引力となることは間違いない。

中国の観光資源は世界遺産のような名所旧跡があって多くの観光客が訪れる。それと同様に、地域社会の「地域性」溢れる観光商品も数多くあるとみなされるようになってきた。新たに創り出した「地域性」を名所旧跡と同様に重要な観光資源とする動きである。改革開放後、各地で個別に展開してきた伝統文化や、各地域の独特な文化を掘り起こす動きが活発化した。その中でも特に少数民族の伝統文化が最も注目されてきたが、漢民族の伝統文化を如何に発掘するべきなのかは大きな課題となっている。韓敏が指摘するように、少数民族の場合、言語、服装、髪型、建築、宗教信仰などはエスニックな特徴を持つものとして表象される。しかし、漢族の民族性は多様と単調の両極の幅が広いため、漢族の「民族表象」を明確にする限界が出てくる。漢族の表象は、地域単位、家族や宗族のような集団の表象になる傾向が見られる[韓 2008：257 - 258]。漢民族が中心の旅順の周辺地域は当然ながらこのような困惑に直面している。

しかし漢民族でも独自な生活環境に育まれてきた伝統文化もあるし、多様な色彩を持つローカルな文化も多く挙げられよう。こられの文化を如何に観光文化に創出、構成、表象するかは地域住民にとって極めて大きな試練である。第6章では荒廃した「桜花園」が新しい観光地に変貌した事例を取り上げた。中国にはなじみがなかった「花見」も日本の影響を受け、観光開発の進展に伴い、「花見」文化が中国でも定着し始めた。また、第3章で考察したように人民公社時代に民間信仰や祖先祭祀はすべて批判の対象となり、人々の生活は質素であればあるほど身の安全が確保できる時代であった。この間に失った精神文化も改革開放後、経済生活の改善に伴い急速に復興、保護の風潮が高まってきた。このような背景の中で政府主導の観光政策が打ち出され、復興された伝統文化は観光文化の波に便乗する形で、新たな観光資源として大いに経済活性化にも貢献した。政府が推進した観光振興であったが、結果的には経済の活性化がもたらされ、精神文化を求めている人々にとっては喪失されたアイデンティティの再構築のきっかけを与えることになったのである。

しかし、地域社会の観光推進は地域経済、環境、文化などの各分

野に大きな効果がもたらされた一方、グローバル化による世界の均質化が進む中で、観光文化の「地域性」が失われる傾向も見られる。例えば、中国西南の少数民族を中心に長年調査した鈴木正崇は二〇〇八年に二五年ぶりに貴州省黔西のプイ（布依）族の村を訪問した時に、景観が変わっただけでなく、綺麗な石板の屋根が破壊されパラボラ･アンテナが立っている光景を見てショックを受けたという。自然環境と調和する「生態観光」を宣伝して観光客の呼び寄せを試みても、パラボラ・アンテナで景観が破壊された村は外部者には魅力的には映らない[鈴木 2012：484]。また、筆者が調査した村落では、近年都市化が進められ、ビル建設が大規模に行われて、代々伝えられてきた生活空間やスタイル、伝統的風習が消えつつある事例もあった。これらの事例は全て観光客として現地に訪れるゲストの視線を無視した故の結果である。要するに魅力ある観光文化はホストとゲストの相互作用の中で築きあげられるべきであろう。

以上に述べたように、観光と文化の関係を論じる際、観光推進によって伝統文化を新たに発見し、再構築するという視点からの分析が何よりも重要であるが、観光文化の創出は常に「他者と自己の間の力の均衡をとるという側面」[太田 1993]において進められる。従って、「他者」であるゲスト側の視線や、相互の間に立つミドルマン、コーディネーター、広義の媒介者たちという多様な視線からの考察も必要であろう。観光文化の生成や構築は地域住民自身の文化をめぐる実践と関わる一方、多様な文化を有する観光客の体験にも直接的に深く結びつかなければ意義がないのではないか。

参考文献

[日本語]

秋道智彌編 1995『イルカとナマコと海人たち―熱帯の漁撈文化誌―』日本放送出版協会

赤嶺　淳　2010『ナマコを歩く―現場から考える生物多様性と文化多様性―』新泉社

荒川好満　1990『なまこ読本―ナマコの生物学・増殖および利用―』緑書房

荒山正彦　2001「戦跡とノスタルジアのあいだに―『旅順』観光をめぐって―」『人文論究』関西学院大学、50(4), pp.1-16

有山輝雄　2002『海外観光旅行の誕生』吉川弘文館

アーリ、ジョン 1995『観光のまなざし―現代社会におけるレジャーと旅行―』(加太宏邦訳)法政大学出版局。*The Tourist Gaze: Leisure and Travel in Contemporary Societies*, Sage, 1990.

アンダーソン、ベネディクト 1987『想像の共同体―ナショナリズムの起源と流行』(白石隆・白石さや訳) リブロポート。*Imagined Communities: Reflections on the Origin and Spread of Nationalism*, Verso, 1983.,2nd edition, 1991, Revised edition, 2006.

石田　雄　2000『記憶と忘却の政治学』明石書店

井出　明　2012「日本におけるダーク・ツーリズム研究の可能性」『進化経済学会論集』No.16. 進化経済学会

井上理吉　1930『関東州水産事情』関東州水産会

江口信清・藤巻正巳 2011『観光研究レファレンスデータベース：日本編』ナカニシヤ出版

江後迪子　2011『長崎奉行のお献立』吉川弘文館

遠藤壽儼　1932『新しき満蒙の手引き』兵林館

王　艶平　2008「中日感観光交流の促進策」大藪多可志・大内東編『北東アジア観光の潮流』海文堂出版,pp.1-28

王　慧琴　2010「遼東半島における漁村生活とその変化」『知性と創造―日中学者の思考―』第1号,pp.142－157

王　慧琴　2013「中国遼東半島における地域ツーリズムの構築―旅順周辺の観光開発の事例から―」『人間と社会の探求　慶應義塾大学大学院社会学研究科紀要』,pp. 101－117

王　文亮　2001『中国観光業概説』日本僑報社

王　文亮　2008「中国における『三農観光』の現状と課題」『中国21』Vol.29,pp.77-94
王　楽平　2000「農村地域における観光振興の効果について―中国雲南省石林県を事例に―」『明治大学教養論集』338 号 pp.23-43
大田好信　1993「文化の客体化―観光をとおした文化とアイデンティティの創造」『民族学研究』57(4),pp.383-410
小川国治　1973『江戸幕府輸出海産物の研究―俵物の生産と集荷機構―』吉川弘文館
大藪多可志・大内東　2008『北東アジア観光の潮流』海文堂出版
緒方宏海　2009「中国における『郷村観光』の実態に関する社会人類学的研究」『旅の文化研究所研究報告』第17号,pp.1-14.
窪　徳忠　1981『中国文化と南島』第一書房
鏡味治也　2010『キーコンセプト文化―近代を読み解く』世界思想社
何　彬　2004「儀礼食・節句食のシンボリズムとアイデンティティ」國學院大學日本文化研究所編『東アジアにみる食とこころ―中国・台湾・モンゴル・韓国・日本―』おうふう
片上敏喜　2006「フロンティア研究Ⅱ―観光と食文化―」安村克己・遠藤英樹・寺岡伸悟編『観光社会文化論講義』くんぷる、pp. 153－161
韓　敏　1996「中国観光のフロンティアー創出される“地域文化”」山下晋司編『観光人類学』新曜社、pp.169-177
韓　敏　2007「観光化される毛沢東-中国観光を作り出すしかけ」山下晋司編『観光文化学』新曜社,pp.59-64
韓　敏　2008「韶山の聖地化と毛沢東表象」塚田誠之編『民族表象のポリティクス―中国南部の人類学･歴史学的研究―』風響社,pp.225-261
栗田靖之　1984「贈答・贈りもの考」『暮らしの文化人類学』PHP 研究所 pp,144－168
小磯修二　2008「観光産業による地域の持続的発展―食との連携による方策を考える」大藪多可志・大内東編『北東アジア観光の潮流』海文堂出版
高　媛　2002「赤いツーリズム・黄色いツーリズム―中国の現代観光におけるナショナリズムの商品化―」現代風俗学研

究編集委員会『現代風俗学研究』第 8 号 pp.44-56
高　媛　2008「戦地から観光地へ―日露戦争前後の『満洲』旅行―」愛知大学現代中国学会『中国 21』Vol. 29, pp.203-216（原文：高媛 2003）
黄　強　1998『中国の祭祀儀礼と信仰』下巻、第一書房
崔　相　1963『なまこの研究―なまこの形態・生態・増殖―』海文堂
坂部晶子　2008『「満州」経験の社会学―植民地の記憶のかたち―』世界思想社
桜井義秀・三木英　2007『よくわかる宗教社会学』ミネルヴァ書房
佐々木一成 2008『観光振興と魅力あるまちづくり』学芸出版社
佐々木道雄 2002『韓国の食文化―朝鮮半島と日本・中国の食と交流―』明石書店
榊原英資　2009『知的食生活のすすめ』東洋経済新報社
敷田麻実・森重昌之　2011『地域資源を守っていかすエコ・ツーリズム―人と自然の共生システム―』講談社
謝　肇淛　1998『五雑組』5 巻（岩城秀夫訳）東洋文庫 629、平凡社
朱　浩東　2006「観光資源としての中華料理―北京料理の伝統と現状―」鈴木慎一・董士偉編『比較思想文化論集―観光・環境・共生―』三一書房
邵　琪偉　2006「民族文化資源の応用への道―中国観光業の持続発展の促進―」朱浩東編『比較思想文化論集―観光・環境・共生―』三一書房
蕭　紅燕　2000『中国四川農村の家族と婚姻―長江上流域の文化人類学的研究―』慶友社
秦　兆雄　2005『中国湖北農村の家族・宗族・婚姻』風響社
鈴木正崇　2012『ミャオ族の歴史と文化の動態―中国南部山地民の想像力の変容―』風響社
須藤廣・遠藤秀樹 2005『観光社会学―ツーリズム研究の冒険的試み―』明石書店
瀬川昌久　2004『中国社会の人類学―親族・家族からの展望』世界思想社
蘇　林　2005『現代中国のジェンダー』明石書店
宗　暁蓮　2009「中国における観光人類学の誕生と発展―論点の紹介を中心に―」『白山人類学』12号、75－98
大連民政署 1928『大連要覧』(満蒙地理歴史風俗誌叢書 53)大阪屋號

書店（1995 年限定版）
高橋嘉市　1925『旅順を漁港とする問題に就て』南満洲鐵道株式會社
高山陽子　2007『民族の幻影―中国民族観光の行方―』東北大学出版会
駄田井直子 2012「現代中国における宗教の観光資源化的要素に関する研究―仏教とイスラム教の事例より―」『国際文化研究論集』第 6 号, pp. 185 - 201
田中静一編 1997『中国食物事典』第３版、柴田書店
張　広帥　2010「郷村観光の定義とその重要性に関する一考察」『北海道大学大学院国際広報メディア･観光学院院生論集』6、pp. 83－90
張紀潯・夏占友・張虹　2011「北京市観光農業の発展現状と問題点―北京市昌平区の事例を中心に―」『城西大学経営紀要』第 7 号, pp. 95-117
陳　波　2012「農業観光政策と観光業おこしのイノベーション―中国西部緑色菜都における農業観光地づくりの事例―」『中央大学経済研究所年報』第 43 号, pp. 123-160
鶴見良行　1990『ナマコの眼』筑摩書房（ちくま学芸文庫、1993）
董　志正　1988『大連・解放四十年史』（鐘ヶ江信光監訳）新評論
堂下　恵　2007「グリーン・ツーリズム―京都府美山町―」山下晋司編『観光文化学』新曜社, pp. 115-118。
堂下　恵　2008「日本の自然と地域観光振興」大藪多可志・大内東編『北東アジア観光の潮流』海文堂出, pp. 85-102
中山時子編 1988『中国食文化事典』角川書店
永積洋子　1988『唐船輸出入品数量一覧 1637－1833 年』創文社
永渕康之　1996「観光＝植民地主義のたくらみ―1920 年代のバリから」山下晋司編『観光人類学』新曜社, pp. 35-43
永渕康之　2007「観光と宗教の活性化―インドネシア・バリを中心に―」山下晋司編『観光文化学』新曜社、pp.103－108
聶　莉莉　1992『劉堡―中国東北地方の宗族とその変容―』東京大学出版社
橋本和也　1999『観光人類学の戦略―文化の売り方・売られ方―』世界思想社
橋本和也　2011『観光経験の人類学―みやげものとガイドの「ものがたり」をめぐって―』世界思想社

長谷川清　2001「観光開発と民族社会の変容―雲南省・西双版納族自治州―」佐々木信彰編『現代中国の民族と経済』世界思想社、pp.105-131
東　徹　2003「観光地づくりにおける持続可能性と地域イニシアティブ」総合観光学会編『観光の新たな潮流』同文舘出版、pp.73-95
東　美晴　2001「現代中国における伝統文化の復興と観光の関係についての一考察―上海郊外のケースから―」『東アジア研究』第 33 号 pp.31-41
朴　美慶　1996「観光者の“みやげ品（souvenir)”購入行動に関する研究」前田勇編『現代観光学の展開―観光行動・文化観光・国際観光交流―』学文社、pp.23－40
前田　勇　1995『現代観光総論』学文社
2003「観光と土産品」総合観光学会編『観光の新たな潮流』同文舘出版、pp. 175－189
松川昭子　2004「婚姻とその時代的変遷」『現代中国家族の変容と適応戦略』ナカニシヤ出版
松本嘉久・辻本雄紀　1999「中国におけるツーリズムの発展と政策」『東アジア研究』第 26 号、pp.15－38
森村敏己　1999「“記憶のかたち”が表象するもの」阿部安成・小関隆・見市雅俊・光永雅明・森村敏己編『記憶のかたち―コメモレイションの文化史―』柏書房、pp.225-243
安村克己・遠藤英樹・寺岡伸悟編 2006『観光社会文化論講義』くんぷる
山下晋司　1999『バリ　観光人類学のレッスン』東京大学出版社
山下晋司編 1996『観光人類学』新躍社
山下晋司編 2007『観光文化学』新曜社
山中　弘編 2012『宗教とツーリズム―聖なるものの変容と持続―』世界思想社
山脇悌次郎 1965『抜け荷』日本経済新聞社
虞　萍　2008「現代中国の都市部における女性の婚姻意識と新ライフスタイル―『中国婦人報』を手がかりに―」『現代中国研究』第 22 号、中国現代史研究会、pp.80-94
劉　正愛　2006『民族生成の歴史人類学―満洲・旗人・満族―』風響社
渡邊欣雄　1991『漢民族の宗教―社会人類学的研究―』第一書房

［中国語］
楊　旭　1992「開発“郷村旅游”勢在必行」『旅游学刊』第 2 期, pp.38-41
呉　倩妮 2006「我国“農家楽”旅游的現状和発展対策」『長江大学学報』Vo.13（3）,pp.127-130
魏　巍　2008「旅順旅游形象設計与塑造探析」『科教文匯』（上旬刊）第 11 期,pp.235-236
王 兵　1999「從中外鄉村的現狀対比看我国鄉村旅游的未來」『旅游学刊』Vo1.14（2）,pp.38-42
王 崧興　1967『亀山島―漢人漁村社会之研究』中央研究院民族学研究所専刊 13
高　媛　2003「日本遊客的“満州”之旅與殖民歴史的記憶消費」中国社会科学研究会（編）『全球化下的中国與日本－海内外学者的多元思考』社会科学文献出版社, pp.132－147
于 躍洲　2009「関于対戦争遺跡保護和開発的幾点思考」『斉斉哈尔大学学報』Vo.11,pp.197-199
于立·孫康·徐斌　2007「“三漁問題”与公共政策調査思路」『公共管理学報』Vol.14（2）,pp.30-35
阮衛紅・余学新 2007「試論宗教文化的旅游価値及開発利用」『社会主義研究』第 175 期,pp.134-136
包特力根白乙・賈永剛・趙昭　2009「中国漁村居民収入問題」『大連海事大学学報』（社会科学版）Vol.8,No.2,pp.14-18
包特力根白 2011「大連地区“三漁”問題成因及対策」『瀋陽農業大学学報』［社会科学版］Vol.13（2）,pp.148-152
大連市旅順口区史志弁公室　1999『旅順口区志』大連出版社出版
大連年鑑編輯部編 2005～2012『大連年鑑』大連市史志弁公室
鉄山街道委員会編 2010『遼南名鎮－鉄山街道』
李磊・謝春山 2009「負感旅游資源主導下的旅游開発戦略研究―以旅順旅游開発為例」『広東農工商職業技術学院学報』Vol.25(1), pp.44-48
李愛華・謝春山　2009「試論旅順的旅游資源的開発」『遼寧工業大学学報』（社会科学版）Vo1.11(2), pp.49-52
劉 慶華 1982『満族姓氏録』新賓県民族事務委員会印刷
劉艶芳・劉於清・李平　2008「試析湖西民族飲食文化与旅游開発」『南寧職業技術学院学報』Vol.13(2),pp.1 - 4
林 光紀 2010「“漁民、漁業、漁村”邏輯与悖論-以龍海市浯嶼村

漁業調査為例」『中国漁業経済』第4期第28巻, pp.5-17
羅 光華 2008「大連旅游吸引力的影響因素及其創新研究」『哈爾濱商業大学学報』第3期,pp.109-112
蘆 楊 2005『郷村旅游運営機制研究』（東北財経大学修士学位論文）
国家統計局 1997『中国統計年鑑』中国統計出版社
郭煥成・韓非 2010「中国郷村旅游発展綜述」『地理科学進展』Vol.29（12）, pp.1597-1605
何 星亮 1999「中国龍文化的発展段階」『雲南社会科学』第6期,pp.57-64
郝連儒. 李桂栄、郭辰、張埼 2011「旅順愛国主義教育資源利用現状与対策研究」『遼寧師範大学学報』Vol.34-3, pp.69-73
黄 秀琳 2006「宗教文化旅游産品体系的構建与開発」『莆田学院学報』Vol.13,No.3,pp.82-85
黄薛艶·周寧 2007「漁村旅游客源市場分析与行為模式研究」『農業経済』Vol.3,pp.32-34
姜 琨 2011『大連地区媽祖文化研究』（遼寧師範大学修士学位論文）
吉 成名 2002『中国崇龍習俗』天津古籍出版社
曲 金良 2004「環渤海圏民間海神娘娘信仰的歴史与現状」『民間文化論壇』第6期,pp.41－46
肖佑興・明慶忠・李松志 2001「論郷村旅游的概念和類型」『旅游科学』第3期, pp.8-10
謝 春山 2001「試論大連旅游資源的開発」『中国遼寧師範大学学報』（社会科学版]Vol.24(5),pp.36-38
周 作明 2011『中国民俗旅游学新論』旅游教育出版社
周玲強・黄祖輝 2004「我が国郷村旅游可持続発展問題与対策研究」『経済地理』Vol.24(4),pp.572-575
中華人民共和国国家統計局 2006『中国統計年鑑』
陳梅英・鐘暁軍・蘇真真・林花花 2011「福州民間飲食文化資源開発与海西旅游発展」『中南林業科技大学学報』Vol.5(4), pp.84－86
鄭 蔚 2011「从舟山祭海民俗探討民間伝統的祭祀儀式」上海海事大学、中国太平洋学会、岱山県人民政府編『中国民間海洋信仰与祭海文化研究』海洋出版社,pp.167－171
申 葆嘉 1999『旅游学原理』学林出版社

鄒　統钎　2005「中国郷村旅游発展模式研究」『旅游学刊』Vol.3（20）,pp.63-68
宋振春・紀暁君・呂璐穎・李允強　2012「文化旅游創新体系的結構与性質研究」『旅游学刊』Vol.27(2), pp.80-87
宋軍・李新民編 1998『大連市旅順口区土地志』大連出版社出版
司馬　志　2012『制度変遷与中国旅游産業発展―基于 ESP 範式的産業績効分析』上海社会科学院出版社
孫　激揚　2006『大連歴史文化叢書―民俗史話』大連海事大学出版社
隋　錫林　2010『提高海参養殖効益技術問答』金盾出版社

［英語］
Cohen .Erik　1979‘A *Phenomenology of TouristExperiences*,’ *Sociology*,13（2）,pp.179-201
(遠藤英樹訳 1998「観光経験の現象学」『奈良県立商科大学研究季報』9（1）,pp.39-58)
Kroeber,A.L.&Clyde Kluckhohn,*Culture*: A *Critical Review of Concepts and Definitions*,1963[1952],New York: Vintage Books
Lennon, J., & Malcolm Foley, M. 2000、*Dark Tourism: The Attraction of Death and Disaster*.London and New York: Continuum.
Smith,ValeneL.1992‘Introduction:The Quest in Guest,’*Annals of Tourism Research*,19（1）:1-17

あとがき

本論文の構成や執筆にあたって、多くの方々から応援をいただいたことに、ここで深い感謝の意を申し上げたい。本論文提出に至る道のりで、まず4名の先生の温かな気配りがなければ、ここまでの研究は続けられなかったと痛感している。

まず、慶應義塾大学大学院社会学研究科の鈴木正崇先生に心からお礼申し上げたい。先生は日頃のご多忙にも関わらず、筆者が書いた未熟なものに目を通してくださり、さまざまな視点から貴重なアドバイスをくださって、私はそこから多くのものを学ばせていただいた。特に論文の構成やデータの利用法、及び観光文化論への考察など幅広いご指導、そして先生の学問に対する厳しい姿勢が、筆者の研究が続けられる原点になったと思う。

また、漁村社会のフィールドワークに関して細かくご指導くださった高桑守史先生に感謝の思いを表したい。漁村社会や漁民信仰を考察する際の注意点などのご指摘が大変参考になり、フィールドワークが順調に進められたことはまさしく先生のおかげである。

さらに、論文執筆に、日々の激励と支援をしてくださった慶應義塾大学総合政策部の重松淳先生と、論文の完成までに多くのコメントをいただいた広島市立大学飯島典子先生に深く感謝申し上げたい。両先生は本論文の校正に協力してくださり、常に筆者を励ましてくださった。両先生の公私に亘るサポートがなければ、この論文を纏めあげることは到底できなかった。

最後に鈴木ゼミの皆様が私を温かく迎え入れ、忌憚なく議論してくださったことが、本論文の構想を考える良い機会になった。特に脇田道子さんの異なる視点からのアドバイスは、非常に良い刺激となり、筆者の視野を広げてくださった。

以上のように、多くの方々の励ましや応援があったからこそ、本論文の提出まで漕ぎ着けることができた。紙面の関係で、お名前をあげることができない方々にも、謹んで心からお礼申し上げたい。

また、本論文の中で、既発表の論文に加筆、修正を加えたものは以下のようになる。

第2章　「遼東半島における漁村生活とその変化」『知性と創造－日中学者の思考－』第1号　日中人文社会科学学会　2010年

第 3 章　「漁村社会における婚姻変化への視点―遼東半島の事例から― 」『比較文化研究』第 96 号　日本比較文化学会　2011 年

第 6 章　「遼東半島における地域ツーリズムの構築について－旅順周辺の観光開発の事例から－」『人間と社会の探究』慶應義塾大学大学院社会学研究科紀要第 75 号　2013 年

第 8 章　「ナマコ食文化の変容に関する考察―中国・遼東半島の事例を中心に― 」『哲学』第 128 集　慶應義塾大学・三田哲学会 2012 年